

# 川柳塔

創刊大正十三年 通卷一三九号



日川協加盟

No.1139

四月号

## お知らせ

昨年10月から郵便物（手紙・葉書）ゆうメールの土曜日配達は休止されています。それに伴い、川柳塔への投句締切・毎月15日必着を10月号でお願いしました。

最近締切後に到着する郵便物が大変多くなりました。それらを主幹・理事長・副主幹その他の選者の方々のご厚意により選をして頂いておりましたが、今後は締切後に到着分は川柳塔・水煙抄は翌月号に掲載、それ以外の投句は残念ながら選の対象外になります。

締切は毎月15日必着。郵便事情をお含みの上余裕をもって投函されますようお願い致します。

## 句会部よりお知らせ

川柳塔本社4月句会は、次の要領で誌上句会と致します。

皆さまのご投句をお待ちしております。

### 記

\*『川柳塔』4月号に投句用紙を同封します。

（未読の方は川柳塔事務所に「請求ください。」）

\*投句締切 4月28日（木）消印有効

\*入選発表 『川柳塔』令和4年7月号

\*投句料 1000円（切手不可）

兼題 「買 う」 中村 惠 選（大阪府）  
兼題 「語 る」 吉村久仁雄 選（大阪府）  
兼題 「エネルギー」 片山かずお 選（大阪府）  
兼題 「つるつる」 水野 黒兔 選（大阪府）  
兼題 「記 録」 小島 蘭幸 選（広島県）  
（各題2句出し）

問い合わせ・送り先

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17

花野ビル201 川柳塔社

TEL 06-6779-3490

# 日本現代川柳作家展

小島 蘭 幸

すこしつかれてあたたかい色になる 尾藤 川柳  
ころんでころんでやさしい人になるんだね

生かされて絵になるものは何もなし 森中恵美子  
小島 蘭幸

川柳くろがね吟社の古谷龍太郎氏から、先日、日本現代川柳作家展の案内をいただきました。会場は北九州市立文学館、全国の柳壇で活躍中の作家42名の作品展です。会期は3月31日まで。

私がお長を務める竹原川柳会も以前、川柳作品展を開催したことがあります。参加者は会員だけでした。それだけに今回の日本現代川柳作家展に全国から42名の川柳作家が、直筆の色紙、短冊で参加されていることに驚きましたし、素晴らしいと思えました。

龍太郎氏に確認したところ、色紙の依頼は早い人で昨年2月からとのことでした。実に1年の準備

期間があつたのです。

42名の色紙、短冊2枚ずつを縮小コピーした、手回りの作品集をいただいておりますので少し紹介させていただきます。

みんな土になるのさ人間の祭り 岡崎 守

日本に生まれラッキーだったばかり 高瀬 霜石

泣きじゃくる海一枚をふところ 栗石 隆子

教え子の乳房がふたつずつ笑う 江畑 哲男

辛抱をあしたへつなぐ鬼になる 田中 新一

一憂も一喜も越えて陽は昇る 赤井 花城

旅人のめざしてくれる樹になろう 鈴木 公弘

念仏がうまくて蠅が寄ってくる 新家 完司

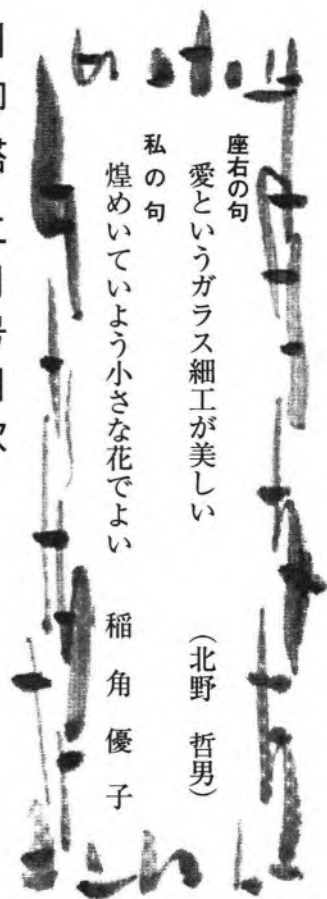
ならば問う葦より強き人ありや 梅崎 流青

かなしみの海花束が沈まない 古谷龍太郎

北海道から九州まで、42名の作家展、龍太郎氏のご努力、川柳愛を思うと実際に会場に行ってみると観賞しなかったのですが、コロナ禍ということと断念しました。

4月には岡垣町のサンリーアイで開催されます。又、色紙を貸して欲しいところもあるようです。

是非、この機会に一人でも多くの方に作家展を見ていただきたいと心から願っています。



座右の句

愛というガラス細工が美しい

(北野 哲男)

私の句

煌めいていよう小さな花でよい

稲角 優子

## 川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「八幡・背割桜」

■巻頭言 日本現代川柳作家展……………小島 蘭 幸 ……(1)

ドイツの冬……………水野 黒 兎 ……(2)

川柳塔(同人吟)……………小島 蘭 幸 選 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌<sup>㉔</sup>……………木津川 計 ……(38)

西尾葉句集「水鶏笛」……………(39)

自選集……………(40)

句集の森……………岩田 美代 ……(43)

温故知新……………(43)

水煙抄……………川上大輪 選 ……(44)

英語 de Senryu<sup>㉔</sup>……………吉村 侑久代 ……(61)

誹風柳多留一二篇研究 20……………(62)

愛染帖……………新家 完司 選 ……(64)

## ドイツの冬

水野 黒 兎

四十年ほど前、サラリーマン時代、当時の西ドイツのハンブルグに駐在したことがあります。北緯55度、樺太の最北端と同じほどの緯度で冬は長く寒い。赴任した最初の冬は零下二十度にもなり日本製のコートや靴ではこの寒さはしのげませんでした。

しんしんと靴の底から冷えがくる

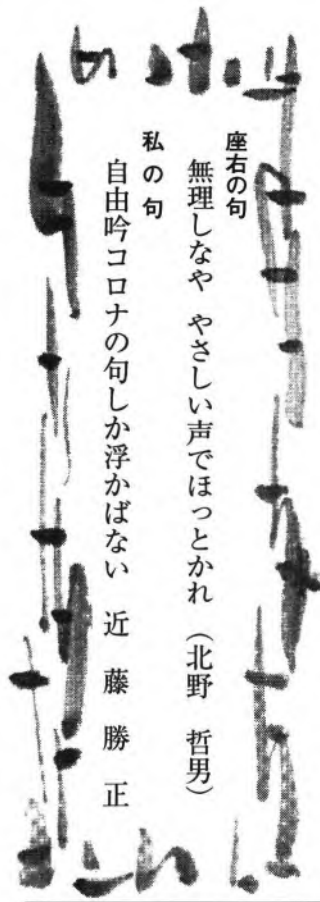
港町とは言えハンブルグは北海から百キロほど内陸に入り込んだ町です。ヨーロッパ大陸のはるか彼方から流れ来るエルベ川を巨船が北海からハンブルグまで遡ってくる事が出来るのです。

ハンブルグ市内には大きな人工のアルスター湖があり冬にはしばしば全面凍結し、市民はスケートをしたり、氷上散歩をしたりと賑わうのです。氷上では赤ワインにシナモンやフルーツを入れて熱くした飲み物が人気で冷えた体を温めてくれるのです。

氷上の熱いワインでほっかほか

ある冬の日、道路は前日の雪が凍り滑りやすくなっていました。信号待ちで停車していたところ後からベンツに追突されまし

檸檬抄「抱く」……………	兼原道夫・久保田千代共選 ……(68)
一路集「耳寄り」……………	清水英旺選 ……(72)
「せかせか」……………	原田すみ子選 ……(73)
初歩教室「スピード」……………	西出楓葉 ……(74)
川柳塔鑑賞……………	板垣孝志 ……(76)
水煙抄鑑賞……………	古今堂蕉子 ……(78)
せんりゆう飛行船 <sup>⑧</sup> ……………	新家完司 ……(79)
『麻生路郎読本』余滴 <sup>(69)</sup> ……………	兼原道夫 ……(80)
インスピレーション・ナビ 印象吟……………	大西泰世 ……(82)
各地柳壇(佳句地十選/西村哲夫・山岡富美子)……………	……………(84)
四月各地句会案内……………	……………(96)
柳界展望……………	……………(98)
■編集後記(ひとこと/西村哲夫)……………	朱夏・勝弘 ……(100)



座右の句

無理しなや やさしい声でほっとかれ (北野 哲男)

私の句

自由吟コロナの句しか浮かばない 近藤 勝正

た。するとこの事故を目撃していた人が私に近づき、何か面倒が起きたら私が証人になってあげますと名刺を渡してくれました。名刺の肩書きで女医さんとわかりました。

女医さんの優しさ冬を暖める

お正月の休みを利用して一家でハイデルベルグまでの小旅行をしました。冬の寒さの観光地はさすがに人はまばらでしたが、古城で日本のテレビがロケをしており、メインの出演者は團伊玖磨さんでした。小学生だった子供たちに「ぞうさん」を作曲した偉い先生だと教えていたら、後ほど團さんと二言三言話す機会がありました。

若き日のハイデルベルグ走馬燈

ぞうさんの歌詞はまだ・みちおという詩人。他にも「やぎさんゆうびん」が有名です。この詩人に愉快な詩があります。最初の3行を紹介します。

いんことカバはいよ  
 だんしはカバもいかな  
 きびんなカバにいかせまい  
 各行を下からも読んで下さい。私も負けずに回文川柳一句

北の旅来てすぐ素敵飛驒の夕



小島蘭幸選

岡山市 永見心咲

さらさらと未来を運び来る波よ

囀りは小鳥か春のわたくしか

空気がってこんなに美味いものなんだ

さくらから学ぶnever give up

春よ来いユーミン流る石の島

堺市 栞原道夫

水禽園フラミンゴまだ動かない

ペリカンが鳴くまで粘れそうにない

息白き二人の満面の笑顔

鉄棒の匂いに奮い立っている

井戸の底から生まれるものを感じたい

滝を見たいと思うところを懐に

大阪市 高杉力

余生にも一つや二つ花は咲く

はみ出したぬり絵言いたいことがある

聖人に囲まれ居心地が悪い

梅桜 バラとジョギングルート変え

オリンピックク出るなら僕はカーリング

いいことがあったようねとむくみかん

待っていた形に開ける春のドア 大阪市 平井美智子

紙つぶて10個 まだまだ大丈夫

おくれ毛に未練がまといつく薄暮

わたくしはわたくしですとゴッホの黄

むずかしい字はひらがなでかけば良い

手の平の蛹が蝶になつてゆく

大阪府 谷口義

時どきは面白いこともある日本

ぶつきらばうな先生を頼りにしています

ひねくれて見ると面白い映画だ

敵もさるもの調味料も進化した

私の一日四コマ漫画になつている

大関ころころ角番でございます

大阪府 谷口義

大阪府 谷口義

倉吉市 牧野芳光

渡された白紙汚してばかりいる

手の平を開くと過去がよみがえる

格上げをされて遠ざけられている

歎を振るたび老人の息づかい

回り道してから腰が強くなる

転ぶはずなのに転ぶ歳になる

枚方市 栃尾奏子

悪役が似合うと言ったのはあなた

私の視野を広げるハイヒール

共稼ぎ女戦士である誇り

ギョツとして欲しい日もあるミスもある

診断は要充電と出て実家

赤ちゃんのように眠りにつく実家

今治市 永井松柏

五千歩をルーチンにする万歩計

遣伝子が詰めが甘いと言っている

トリセツにちゃんぼらんと書いておく

古家解体ボクの記憶が壊される

薬を抱く母の森陽の光

聞きたくないことは聞かない聞く力

桜井市 安土理恵

精一杯つくしてるのに叱られる

どうぞどうぞトイレも風呂も掃除ずみ

指図せんでも戸締りもした火も消した

腰が痛くて庭の世話までできません  
補助輪の油そろそろ切れそうだ  
過ぎてみないと解らないのが人生か

藤井寺市 鈴木いさお

狭いけど二人で暮らすには手頃

お互いの甲辞託せる友がいる

小匙一杯ほどの皮肉が効きました

言葉など要らぬハグするだけでいい

鄙びた宿にはにがり酒が似合う

セコムしてオミクロン株寄せつけず

五欲みな捨てて素敵な自然体

くず籠に私の今日を投げ入れる

大砂丘沈む夕陽は魔術だな

勉強はライバルの灯が消えてから

人生の伏せ字が解けぬまま暮れる

君もわたしもやがて月から使者が来る

鳥取市 岸本宏章

オミクロン最後の足掻きなら許す

理由などどうあれ眠いときは寝る

好奇心あればヒントも寄ってくる

貸し借りがないから続く長い友

自信ある人は決して焦らない

マスク廃棄誰に責任取らせるか

堺市内 藤 憲 彦

さりげなく一筆箋にお人柄  
留守番へ茶碗のありから習う  
モッタイナイ教えてくれるパンの耳  
3回接種それでもマスク外せない  
来し方の紆余曲折が生きるパネ  
ゆるゆるの脳にして出る縄のれん

土佐清水市 辻 内 次 根

百面相つくって今日のスタートに  
初氷ぱっくり割れた指の節  
合掌をすると目立ってきた汚れ  
老眼へ絵本のような解説書  
示す偏衣偏かと虫眼鏡  
屑籠へ三日夢見たロト6

奈良市 山 本 昌 代

脳体操時どき散歩道変える  
母さんの言葉拾っている散歩  
仏壇の夫は答えくれません  
嫁がくれた言葉わたしの宝物  
誉めてから叱れと母の置土産  
赤ちゃんの嗅覚うふふ馬が合う

尼崎市 永 田 紀 恵

よく見ると怖い目をしているパンダ  
思い出が夕陽と座る四畳半  
泣き上戸人生半分泣いて来た

雪隠と書けばトイレは寒そうな  
音無しの構えで迫る妻の乱  
老犬と足が揃って来た散歩

東かがわ市 川 崎 ひかり

鏡など見る間なかった束ね髪  
雪しんしん老いの孤独を深くする  
漸くにひとりに慣れた七回忌  
炬燵ぬくぬく巢籠もりこれも悪くない  
螺旋階段見上げただけで目が眩む  
朝陽浴び今日の生命に有りがとう

堺市 奥 時 雄

配食や外食はせぬ意地がある  
道楽と苦勞が今に生きている  
ワクチンの注射以外は医者知らず  
還付金ないので申告をやめる  
健康優良爺を表彰せよ  
幸せはゴルフのランチ飲むビール

松山市 大 内 せつ子

ころころと笑いたくなる最後尾  
金魚の涙今日のわたしと同じ色  
二人三脚ゆるんだ紐が結べない  
終止符を打ちます あなたとの内緒  
リキュールの甘さに無気力なおんな  
アウトラインぼかす6Bの喜劇



尼崎市 羽 奈 和 子

初挑戦ピアノを習うボケ防止  
言われるままGOもSTAYもワクチンも

雪に足跡鳥は素足だ冷たかろ  
泣き止まぬ孫は娘にお返しす

今風に大きなマスク雪だるま  
煮つまった場で冗談を言い放つ

大山市 金 子 美千代

ちよつとした不調もコロナかもしれず

くしゃみ連発肩身の狭いマスク  
たんぼぼに会えた気晴らしの散策

下駄箱の半分非常持ち出し品

鬼は外心の鬼が出て行かぬ  
もつともつともつともつととアスリート

唐津市 坂 本 蜂 朗

凍てつく日妻の笑顔と鍋料理  
鍋料理妻に請われて差配する

鍋料理体重計に封をする  
飢餓を知る老いの食事はみな旨い

父の年越えた頃から時化に入る  
老い二人曜日を今日も聞いている

三田市 九 村 義 徳

ピンチには護ってくれた父の壁  
退屈の二文字知らない父でした

初孫が流してくれた背が温い

雪しんしん温泉宿の灯が温い

4Kで初冠雪の富士を見た

若者のセンス取り入れ磨く喜寿

岡山市 丹 下 凱 夫

ビッグボスなかなかやるな ワイドショー

お茶漬けにすればいいのにデイナショー

晩学のいつも寄り道回り道

税務署の日の丸胸を張っている

にんげんを試す神様八百萬

「おはよう」のパワーを貰うウオーキング

西予市 黒 田 茂 代

祝成人饑に降るぼたん雪

ストーブも炬燵も掃除機には邪魔

母さんのうた何度聞いても胸に沁む

シニカルな漫画世相を串刺しに

忘れ得ぬひとを心のアルバムに

今が一番残り時間は考えぬ

豊中市 きとう こみつ

池上さんが出ているまっとうなテレビ

ボンと押しパツと私のネット買い

トンガの噴火 世界はひとつだと思ふ

大好きな風呂も忘れてソーイング

新生児の髪でこの世にひとつ 筆

ありつたけの力を出せよタイガース

越谷市 久保田 千代

城壁を高くしている淋しがり  
出来不出来あつて私の処方箋  
これからは雑談力が物を言う  
静いの相手尖つた自分です  
正論を吐けぬ私の背の歪み  
聞く耳は人の優しさ知っている

尼崎市 藤井 宏造

不要不急に縛られ増える孤独感  
先頭になりたくはない向い風  
迷い箸叱つてくれる人もなし  
ラーメンの汁残すよう言われてる  
あなたの字読み易いので良い字です  
手紙の主は泣いて見ている「こころ旅」

北九州市 小松 紀子

友達以上以下でもない男性五人  
トイレ借り義理買いせねば気がひける  
無理するな内部告発腰と膝  
寂しさが覚悟に変わる八十路  
陽がしむむように死ねたらなと思う  
春が来た寒さに耐えて春が来た

鳥取市 奥田 由美

娘にも似た狎が届いた誕生日  
決意した離農がゆらぐ春日より  
飼い主に似たのかポチも規格外

三回目のワクチンで来た副作用  
スーパールのカートと刻む万歩計  
通販でも似たもの買いの従姉妹さま

富山市 島 ひかる

遺品整理ははの文箱に孫の文  
拝啓と書いてよそよそしく思う  
むかし子に出した手紙を読み返す  
褒められた子供はほめる事を知る  
カタカゴを食べる万葉人になる  
カタカゴは住職からのお裾分け

三田市 上田 ひとみ

そんなこと何でもないと言える日が  
これからを案じてばかりいられない  
エイヤーと大声出してみてごらん  
よく晴れた月曜日ただそれだけで  
きつちりとしているあなたスゴイです  
誕生日ありがとうです母さんに

米子市 野川 宣子

百均のメガネで余生はやつと見え  
帽子にマスク防犯カメラ追えません  
ビッグボス野望を隠すサングラス  
元気もりもり原動力はまず一杯  
Tシャツに恋したころの力瘤  
しみや皺もういいんです元気なら

岡山県 高岡茂子

毎年想う昨年より今年が寒い  
片づかぬ部屋で出てくる捜し物  
給食で納豆好きになってた児  
音たてて瓦せんべい食べてる齒  
成人した孫に亡夫の面影見る

岡山県 田中 恵

母という文字と響きが胸を打つ  
母さんの笑顔引き出す割烹着  
むずかしい漢字は飛ばす癖がある  
あっち見てホイで暮らしているリズム  
それなりの夢に向かっている歩幅

岡山県 藤澤照代

ひらがなの母の文から雪花の香  
夕焼けを見送るように点くネオン  
背を向けて寝ても弁当作ってる  
お互いに呆れ寡言と多言住む  
食べて寝て猫と遊んでまた眠る

岡山市 大石洋子

後始末考えながら豆を撒く  
毛糸帽マスク強盗ファッションで  
齒を抜いて喪失感がハンパない  
軽やかに歩くため買う赤い靴  
鬱ふつとばせコレステロール味方せよ

岡山市 工藤千代子

ブローチで隠しています生活臭  
鯉呼吸してます婆ちゃんになって  
道草の分だけ光る径になる  
繕っても繕っても破れる負の部分  
お薬は飲んだけれどもからっ風

岡山市 前田 恵美子

オミクロン株千を越したぞもう止まれ  
どんな世も食べなきや体もちません  
人の世の騒ぎ知ってか福寿草  
節分を過ぎて光が踊り出す  
雪花が散っているけどさあ散歩

笠岡市 藤井智史

愛を勝ち取る戦闘力を得る  
人生のGOOD ROUTEを探し出す  
消費カロリ―多い爆発な愛  
オンライン乗って未来に動き出す  
社会的距離から恋の好奇心

広島市 岸本 清

コロナ禍に日本一周地図の旅  
巣ごもりに強い助っ人冷凍庫  
年寄りの自覚ないまま年寄りに  
コロナ禍に追い討ちかける杉花粉  
記念樹は十年経って背の高さ

竹原市 岩本笑子

一人また一人マラソンの選手  
選手の名呼んで監督あきらめぬ  
友情は熱しマラソン追いかける  
集団という甘さが見えている  
道路一ぱいに先生の声先輩の声

三原市 鴨田昭紀

ゆっくりと答えを探すひとり旅  
穏やかな笑みで謀反を企てる  
丸暗記しておく人生のイロハ  
輪の中に飛び込み生き甲斐を探す  
我慢することを覚えてから無風

三原市 笹重耕三

元気ですか風が立ち寄る無人駅  
これからも老いを楽しむ歩数計  
スマイルという婆ちゃんの処方箋  
こんな筈じゃなかった庶民の秋刀魚  
老いほれを纏って過ぎていく二月

岩国市 上村夢香

胸に棲む鬼と毎日するけんか  
眠れない夜があつてもよしとする  
チョコ選び悩んだ頃もありました  
小気味よい返事をくれる二年生  
聞く力返すことばも聴く力

防府市 坂本加代

自縛して何も言えない動けない  
チャイム鳴り慌ててマスク見つからず  
コロナ禍にやっと安らぐこもりびと  
損してもバカ正直は治らない  
花粉症コロナマスクに守られる

鳥取県 門村幸子

待合室咳が出そうで出しづらい  
耳かき棒怖くて奥へ届かない  
大寒に脚よめげるなよく歩け  
残雪に足をとられぬよう歩く  
日本人でよかった今朝のお味噌汁

鳥取県 斉尾くにこ

大賞としておきましょう参加賞  
雪の日に生まれて寒い誕生日  
おはようと吹きあげる雪なでる雪  
古民家に雪雪おとなりは空き家  
映像の田舎は私のと違ふ

鳥取県 細田裕花

大雪にコロナ毎日がモノトーン  
さりげなく孫のジョーカー引いてやる  
ああ悲し言葉出て来ずごまかした  
ビッグボス踊る翔んでる大真面目  
もう一問解けば冬將軍は去る

鳥取県 本庄 ひろし

口裏をいつも合わせる仲間です

不整脈昨日の酒が気に掛かる

派手な服センスが良いと勘違い

頑張れた追いかけて来た君がいて

会えるなら苦にはならない待ち時間

鳥取県 山下 節子

これからの趣味は川柳だけにする

雪道を四股踏むごとく進む古い

雪達磨 雪合戦と子等弾む

母さんはいつも我が家の福の神

少年の事件矛盾が多すぎる

鳥取市 池澤 大鯨

飼犬とテレビ見てる身動きもせず

咳払いしてるのに無視されている

無信仰実は万象崇拜す

五黄の寅信じたくなる虎年生まれ

運試し神を試していることに

鳥取市 加藤 茶人

喋るのも嫌と机に置き手紙

思想とは怖い飢えより核兵器

あの時の無駄が役立つ回顧録

速射砲連発銃と妻の口

上達の妻に止めたい同じ趣味

鳥取市 岸本 孝子

ゆっくりと目を覚ましてる庭の梅

捨てがたい写真仕分けの手間をとる

老人らしくならぬことだけ心掛け

手間かかるメニューが減った夕の膳

趣味ふたつどちらも大事手は抜かぬ

鳥取市 田賀 八千代

新築を泣かす落書き孫飛来

デイサービス週二の母に笑顔増え

真の声マスク邪魔して届かない

チョコ渡しそれぞれ描く物語

モチベーション上げるためです人を恋う

鳥取市 棚田 大

あの世にもコロナあるのと孫が問う

コロナまたオミクロン株くらくらに

クリスマスケーキ食わずにサンタ待つ

近所だぞメールするより声かけて

田舎でも近所づきあいさけたがる

鳥取市 谷口 回春子

妻の前自信ないから空手形

コロナ禍は愛情倍加するチャンス

振り向けば八十路の坂は直ぐ傍に

音もなくやって来ました八十路坂

コロナ禍のライフスタイル七変化

鳥取市 永原昌鼓

我が人生一番若い今日も暮れ  
若い気で生きたし無理な米寿の身

コロナの世旅も自宅もウツの種  
ほかほかの焼きいも冬は格別だ  
若くして逝った母親今恋うる

鳥取市 中村金祥

立つ春へ心の鬼を追い払う  
雪国に腰痛手当出ないかの  
ダイエツト卑しい口を戒める  
年金は下がり物価は上がる鬱  
原油高一食抜いて冬を越す

鳥取市 副井ゆたか

コロナ禍で挑戦心も陰り気味  
人生はモーグルスキー起伏越え  
椅子取りを競い励んだ社の仲間  
聡太竜王AI超えの新手指す  
昨日より一步高みの明日目指す

鳥取市 福西茶子

笑わせて泣かすテレビに守りされる  
ガソリンも灯油も高いジャズ踊る  
明日の服よりも目覚めるのが大事  
お日さまを五日見ないと気が滅入る  
言い合いは嫌いシカトはなお嫌い

鳥取市 前田楓花

ストレスに弱くてヘルベスが攻める  
ティータイム友が苺を提げて来る  
鼻からも口からもイヤ内視鏡

輪になつて疲れがとれる露天風呂  
麦味噌のやさしい味に嵌つてる

鳥取市 山下凱柳

大噴火気圧の変化までするか  
寂寥感漂う過疎の村に住む  
全没にしんみりなんかしておれぬ  
破調句でないか何度も指を折る  
鬼の目に見せた涙の一滴

鳥取市 吉田孔美子

詫び方も弁解もおさらいが要る  
荒廃の田の神様に詫びんのか  
その色香で何に詫びたと言うのかえ  
鑑定値これが親父の詫び方か  
蠅一匹にみつともない騒ぎだ

鳥取市 吉田弘子

世の移ろい王者は変わるオリンピックク  
毎日の積み重ねこそ宝もの  
欲しい物即答できぬ誕生日  
一人居てひとりではない家族愛  
回覧板声聞きたくてベルを押す

倉吉市 大羽雄大

遠い町より始めよう杖デビュー  
ステッキを持って歩けばゼントルマン  
マスク慣れ顔の一部になつてきた  
雪掻きもずばらになつた家の前  
ほかほかの炬燵でこくり外は雪

倉吉市 田中紀美恵

神様と手をたずさえて生きて行く  
友亡くし心の扉開かない  
神と住みやさしい心持つて生きる  
切り替えの上手な孫にしゃっばぬぐ  
よっしゃあこれから全句天とるぞ

境港市 藤原久直

こども部屋今は私の秘密基地  
ユーモアをポンと出しては笑い呼ぶ  
酒の席自然と舌が回りだす  
若い頃覚えた囲碁が生きがいに  
温かい親切貰う優先席

米子市 池田美穂

おひな様五人囃子はリストラに  
今も尺背中を搔いて現役だ  
黙食のくちやくちやの音耳に付く  
ろうそくを全部立てたら火事怖い  
皺寄せがどつと来ている学期末

米子市 伊塚美枝子

ストーブがあつて助かる停電時  
立春に降る雪春を遠ざける  
ぬくもりが丁度良くなる古い二人  
ほかほかと日向の匂いするお風呂  
幸せが湯氣の向こうで微笑んだ

米子市 後藤宏之

お祈りは自分のことで手一杯  
この頃は祝儀袋に縁がない  
ミサイルに海の魚も大騒ぎ  
蟹タイム宴が急にシーンとなる  
このところ堪忍袋荒れ模様

米子市 後藤美恵子

平和ゆえ選んだ道が歩めてる  
野菜送る包む地方紙我が句載る  
バーゲンに突撃気力失せだした  
母さんから盗んだ味を子が盗む  
空財布目立つ所に置いてある

米子市 竹村紀の治

ご近所を一巡りする僕の旅  
楽しんでいきますと若いメダリスト  
アポ無しの客にパジャマがうろたえる  
誕生日壁の写真に杯を上げ  
ホロ酔いを過ぎれば天下無敵です

米子市 中原 章子

記録的寒波の子報身がすくむ  
気取つても進む老化がさけられぬ

羽生君析る思いで滑り見る  
嬉しさが大変よりも上回る

閉店の店にさよなら言つてくる

米子市 成田 雨奇

図書館に行けばまだある紙の本  
経済が回つてもほく蚊帳の外

天国でお前誰だと父は言う

宇宙人ほくと仲間になれそうだ  
パソコンをやめてそろそろ仙人か

島根県 伊藤 寿美

厨の水ボタリボタリと父の黙  
ありがとうと書いて卒寿の筆を置く

寂聴天寿古書市で買う「晴美」  
ムササビが天井裏に住みついた

わたしがわたしに傘さしかける最終話

松江市 石橋 芳山

どんぶりの罅が示しているカニ座  
手の平を流れるつまらない映画

混乱のシミュレーションに混ぜご飯  
ベネチアングラスにカメモシがもかく

品のないオコゼでしょせんダボハゼで

松江市 梅瀬 みちを

義理チヨコの最後の砦妻がいる  
ショックです夫婦で来いと医者が出る

眞実はペラペラ言える訳がない  
葬儀社の会員なんかなりません

虐待のニュースチャンネル直ぐ変える

松江市 藤井 寿代

外は雪 熱燗がクセになりそう  
何年振りかの蟹食べてほっこり

札幌の雪をコタツでながめてる

すっぴんのままこれまででもこれからも  
ひらがなのようにほっこり生きたいな

松江市 松本 知恵子

春近い雑木林で耳済ます  
ふる里の大根畑の存在感

母さんは白寿わたしのパワー源  
雪降ろし父の姿が鮮明だ

父と子の絆は強し銀メダル

出雲市 伊藤 玲峰

露の臺晴れ間に覗きよるこばす  
会社の梅ほんのり咲く客迎え

北京五輪フィギュアスケート代替わり  
まだこの世冬を凌げば春が来る

欲のない私が祈る健やかさ



出雲市 岸 桂子

生きざまが自分の顔を彫り上げる

行間に遊ぶ一人のサスペンス

来世も女に生まれ子を宿す

捨てられぬ過去を秘めてる欠け茶碗

事あらば祈る心になる弱さ

松山市 栗田 忠士

隊列を乱すアリにも訳がある

伊予柑がなもしなもしと鎮座する

こっそりと風が捲った余命表

ブライドを捨てれば木偶になりそうで

不要不急自家散髪で切り抜ける

松山市 古手川 光

凡々と暮らせる日々の有難さ

老化でダウン家電も次々と

アナログの爺生き辛い世となりぬ

おだやかな一日だった夕陽見る

空家増え故郷が山に埋もれる

松山市 宮尾 みのり

ウイルスの新種文明嘲笑う

割り切れぬものを背負って生きている

大波小波悟れぬままに現在地

里山が好きと暫く言ってたが

石原慎太郎逝つても化粧手を抜かぬ

松山市 柳田 かおる

国産使用とある鯖缶を買う

三猿のかたちストレス溜めている

貧乏性なのかタクシーより電車

コロナ禍にやる気ファイトが無くなるよ

久しぶりの句会みんながよく喋る

西予市 西田 美恵子

飲み過ぎないように食べ過ぎないように

老いという未体験から来る不安

大切な日は大切なベアグラス

どぶろくという古里の旨い酒

幸せだったと気付いた時の不仕合せ

阿南市 小畑 定弘

冬雲と掛け合いながら父の墓

もう少し尖っていたい喜寿なるぞ

徘徊じゃございませんと句帳持つ

接吻を拒むかたちの白マスク

ざぶざぶと顔を洗って恋に会う

熊本県 岩切 康子

玄関へ古紙を集めにありがたい

白髪増え髪を隠した帽子編む

お客様少ない時にお買物

常日頃変わらないかと弟が

コロナ禍の顔は保湿だけで良い

熊本市 杉野羅天

男鹿市 伊藤のぶよし

寒暖差十度山の靈氣喰らう

おかしさは人妻僕の横に立ち

新型コロナナ悲愴感などない若さ

獸増えて鹿の横断待たされる

変異株何処まで行くの  $\alpha\beta\gamma$

唐津市 山口高明

床の間を飾る女将の池の坊

臨月のお腹かかえて家事繁多

馥郁と甘茶の香り花御堂

苛めなど無いと先生知らぬ振り

接種していても安心成らぬ菌

札幌市 小澤淳

ほっこりとした顔になる金メダル

虎は皮俺は一句を遺したい

建前がネクタイ締めて譲らない

暮らし向きそれぞれ違う冬の窓

流感で鶏の一家は地の底に

塩竈市 木田比呂朗

まだ少しくセの顔出す月曜日

年金で今日一日もこつこつと

旅カバン今日もマスクと対峙する

カラオケの喉も封印二年間

聞く耳の決断少し腰が引け

弘前市 稲見則彦

改めて柳田国男読んでます

青春は今だと思っういつだって

折々に買ったスーツに詫びている

穴のない五円硬貨の意地を聞く

物差しが違う二人の物語

弘前市 今愁女

立ち上がるとき「どっこいしょ」言うて啜られる

せめてもの椅子使つてのスクワット

木々芽吹き地を割って水仙が咲く

北に咲く城下のサクラ日本一

寒さに耐え雪に閉ざさるも故郷は

東京都 川本真理子

東京の大雪小さな雪だるま

「半分こ」と言って大きい方は君

つまるところ美味しくものを食べることに

しばらくは下げておくだけ春のもの

春を待つ列にさっそく並んでる

八王子市 川名 洋子

コロナ禍に一周忌にも会えぬまま  
来る来ないむしられてお花のウツ  
コロナ後はちよつと恋しておしゃれして  
紙コップ程の重さの愛はある  
人生の余白に入れる淡い恋

横浜市 川島 良子

目と肌で感触を読む冬五輪  
手に入れた自由背負う責任18歳  
終活は死ぬためじゃなく生きるため  
パンダになってスキー教室から帰る  
燃えるものありて余生が忙しい

横浜市 菊地 政勝

今年また不要不急に縛られる  
マスク取り春の小道を歩きたし  
ひょうきんな奴を仲間に入れておく  
衆目のビッグボス来て波乱気味  
手相とは違う余生に生きている

朝霞市 前田 洋子

北風に裸ん坊の桜の木  
春は来る猫と気楽に生きている  
水掛不動喜んではお顔やわ  
コロナほどしつこい人はパスします  
診察を待つ老若はみなスマホ

愛知県 早川 遯行

私も頑固嫌いなものは嫌い  
人間に生まれたことを悔いる酒  
手が触れ肩が触れ窮屈な日本  
体中痒くて冬は大嫌い  
長生きをしてもコロナに苛められ

名古屋市 山本 三樹夫

国民の疑心暗鬼を消す政治  
薄れゆく拉致を抱いて夢の塔  
アスリート待望の冬空を飛び  
豪雪に綺麗と言えぬ苦悩する  
ヴァレンタイン本命募集自分チョコ

犬山市 関本 かつ子

ご近所もスマホで会話オミクロン  
正直に年相応になる体  
腹立ちを静めることが出来る年  
ワクチンを終えた友からもう誘い  
二人抜け最年長になるテニス

可児市 板山 まみ子

厳寒もコロナを避けて草テニス  
悩んでる暇も無いほどバタンキュー  
何波まで来たら収まるコロナの世  
なぐさめてなぐさめられて共に老い  
登れない雪山見える坂へ行く

奈良県 安福和夫

リタイヤは人生Ⅱへの通過点  
オンライン駆使で若さ取り戻す  
在宅でフリーランスのニューライフ  
女房が健康管理ディレクター  
古希傘寿働き盛り延長戦

奈良県 谷川 憲

陽光を拾って散歩距離伸びた  
ワクチンに追われ一年過ぎました  
無理や無茶が持病の素になっていた  
またひとり昭和の偉人旅立った  
古里の遠い記憶は忘れない

奈良県 中原 比呂志

障子窓春はほんわか長い影  
こたつから抜け出す桜まだ蕾  
犬嫌いなのに尻尾を振られても  
日帰りのスーパー温泉年金日  
春だ春だ騒ぎたいのは皆同じ

奈良県 中堀 優

今後のことあるからやはりダメはダメ  
強烈な小言が疼く腹の底  
年金の暮らしに響くオイル高  
この私あなたへ咲いた花だもの  
もうほちほち仮面ぬぐ日が近づいた

奈良県 長谷川 崇明

オミクロン自問自答の冬籠り  
過去は過去今日という日を大切に  
まだ欲はひとつなんかにしほれない  
福寿草ここが浄土と咲き誇る  
立春はきたがコロナでまた自粛

奈良県 渡辺 富子

身の内の尖りを消した草むしり  
来し方を語れば雲が流れ出す  
三輪山へ古代を偲びウォーキング  
足音をしのばせ老いがついてくる  
怪しくなる記憶のかなた陽が沈む

奈良市 宇賀 史郎

曲り形夫婦で家庭内別居  
名門もうっすら金具剥げ始め  
事実枉げ道義に反しても弁護  
わが子には貶し他家の子には褒める  
焼肉の匂いで目覚め下車準備

奈良市 大久保 眞澄

オバちゃんパワー衝立を取り椅子寄せて  
心美人かなりビミョーな褒め言葉  
ネコ駅長もう猫の手と言わせない  
賀状仕舞い決心できる強い人  
コロナ自粛アテがはずれたえべっさん

奈良市 加藤 江里子

思い出はモノクロームに変化して  
たつぷりと冬陽を浴びて散歩する  
野路菊のよに生きたいとしっかりと  
実南天寄り道をした幼い日  
B面の人生もまた味がある

奈良市 高橋 敬子

一際に寒さ身にしむ電気代  
非日常が普段の顔になってゆく  
父の回忌冬の星座が顔になる  
出来るはずが出来なくなっているジャンプ  
ミサイルのおもちゃにされる日本海

奈良市 辻内 げんえい

二人でも混み合う朝の洗面所  
種よりも手っ取り早い苗を買う  
人気ドラマ孫はマンガで知っている  
孫からの鋭い指摘ラインから  
覚めてみりゃ天の匂二度と出てこない

奈良市 米田 恭昌

コロナ禍の人影もない寒い街  
三密避けて寡黙な老いはなお孤独  
インスタ映えだけで売れているスイーツ  
何されても遺憾ですますお人良し  
寅年だ暴れる虎のキャンブイン

生駒市 飛永 ふりこ

雪が舞うほんにココアが和らげる  
こんにはアリスサムから笑みもらう  
お互いを労り合ってこそ絆  
溜めないでストレス揉んで解します  
鴨たちも目の色変わるパンの屑

香芝市 大内 朝子

感染者数聞く心臓に悪い日日  
その日まで夢は枯らさぬよう生きる  
頷きの上手な友に救われる  
それぞれに咲いて終点ご一緒ね  
川柳のお蔭集中力元気

香芝市 山下 じゅん子  
(純子改め)

宿の膳いらつしやいませ蟹笑う  
城崎にてぎつしりつまつた松葉ガニ  
旅の宿お持ち帰りはできぬ膳  
こだわりを捨てて出かける一人旅  
漆黒の海にひとすじ希望の灯

和歌山市 上田 紀子

双六の上がりあたりで湧く勇氣  
正解は一つではない多目的  
たればの約束増える春近し  
起き上がり小法師みたい憎めない  
逆転の発想あすが見えてくる

和歌山市 柏原夕胡

バーゲンに走り寄贈をする物資  
チューリップ芽吹く春まであと少し  
亡姉の闘病コロナじゃなくて良かったな  
十キロ一万のごはんは猫が食べている  
忙しすぎて泣いている暇がない

和歌山市 松原寿子

満面の笑みで話題をてんこ盛り  
愚痴吐かず黙黙こなす生き上手  
反論をすれば惨めになるだけだ  
心の隅に個室があつてリラククス  
ペンパルの君に心を癒される

海南市 小谷小雪

お気に入りの手袋を繕っている  
ウィルスに自宅軟禁させられる  
鈍行のリズムは居眠りを誘う  
山荒れてイノシシに里荒らされる  
辛い日もあなたに傘を差しかける

京都市 清水英旺

元氣な文寄こしてくれた遠い友  
憂鬱が続くコロナとのお付き合い  
例年になくゆく年がいとおしい  
老いはれてゆくスピードの速いこと  
元日から透析に行く妻淡々

京都市 藤井文代

同窓会同じお歳のはずなのに  
宅配便が長電話への助っ人に  
下戸のお陰今日の割り勘安くなり  
知った振りよりどこかが違う知らん振り  
何か足りないようなまま今傘寿とは

長岡京市 山田葉子

テンポ良く歩くと影も嬉しそう  
初対面どこかでお会いしたような  
揺り椅子が巢立った家族懐かしむ  
危なかつた信号変わり走れない  
独りなのにおでんいっぱい炊くなんて

大阪府 米澤 俣子

絵心はないが今日の絵なら描ける  
このところ心底笑うことがない  
神よりは遺影に頼む願いごと  
湯豆腐ゆらゆらゆっくり愚痴を聞いてくれ  
着ぶかれて食べてテレビのユートピア

大阪市 石田孝純

霧散して青空になる春の鬱  
オクターブ上がるカラスの声も春  
揚げ雲雀ピチュピチュ春もホバリング  
啓蟄に手足が伸びて武者震い  
ここからは自由時間にしませんか

大阪市 磯 島 福貴子

四回目はワクチン接種あるだらうか

納豆をぐるぐるまぜて異次元へ

ごくらくごくらく湯たんぼ二つ侍らせて

ピークアウト未だ未だ見えぬオミクロン

コロナ鎖国留学生の意気を削ぐ

大阪市 井 丸 昌 紀

手探りで扉探した先に鬼

ひらがなの小言じわじわ攻めてくる

青と黄を混ぜて緑はへそ曲がり

輝きすぎて素性がばれた偽ダイヤ

好き嫌い好き嫌い好き困ったな

大阪市 岩 崎 公 誠

百点に満足したら上がいた

赤信号園児止まって右左

還暦になった娘の赤い靴

世話してもされてもきつと友はいい

黙食が普通になって笑い消え

大阪市 岩 崎 玲 子

食事会していた事が嘘みたい

ハグひとつままにならないコロナ鬱

断捨離でちよっと進化の老いの道

孫からのハガキに好きと大きな字

カタカナ語調べてひとつ賢なり

大阪市 内 田 志津子

一客一亭至福の時をコロナ禍で

争いの訳は昨日の一行詩

頑張ったごほうびだらう御来光

ご先祖に初水仙のおもてなし

青汁苦い母さんの味がする

大阪市 宇 都 満知子

休日のポストにも来たメール便

福は内老いた鬼さん鬼も内

福豆はおやつに食べて三日間

くりかえす指のひび割れ春はまだ

ご仏飯きょうはあなたも五目飯

大阪市 江島谷 勝 弘

五十年せつせと買った宝くじ

そこそこに期待してます誕生日

あつあつあ月日は早い喜寿傘寿

コストコはもう行きません疲れます

お断り手元不如意の私です

大阪市 榎 本 舞 夢

おだやかに正月気分日を過ごす

三回目ワクチン投与墓参り

豆蒔いて鬼オミクロン追い払う

節分にイワシ巻き鮭ひいらぎと

鬼の面泣いてる曾孫動画来る

大阪市 大川 桃花

久し振りレジに向かえばセルフレジ

退院へ庭の南天赤あかと

嬉しい時の涙は照れているのです

小指の爪赤く塗ってる婆お洒落

アナログでタクシー拾うも人頼み

大阪市 奥村 五月

御供は仏見るだけ食べもせず

自衛隊武器は持たずに何でも屋

コロナ禍に寝間着姿の自宅勤

遺伝かな酒と女は大好きや

自肅中独りでないと雛飾る

大阪市 小野 雅美

命日に近づくだけで出る涙

泣きなさんな泣きなさんなど笑む遺影

愛という字しばらく書いたことがない

金色のポストへ願ひ届けてと

諦めの特効薬で生き延びる

大阪市 笠嶋 惠美

淀川の広くて好きな河川敷

河川敷野球かわい元気な子

何食べる自分自身に語りかけ

キラキラ流行花もキラキラ付けて咲く

点滴が心のすき間うめていた

大阪市 川端 一步

ハッピーはボクの相棒との出会い

したいことしている今が最高だ

羽生さんと藤井五冠が入れ替わる

若者が図書館開く時間待ち

おいしい話きつと後に何かある

大阪市 古今堂 蕉子

コロナ禍に虐待続く子の受難

あり得ないなぞだスマホの検索は

風邪ですか地声ですとは言いや

骨組みがそっくりですと整骨医

神妙にさぐりを入れるうちの犬

大阪市 近藤 正

高すぎる値上げラッシュに消費税

先見えぬ感染予防息苦し

身を切ると維新ちゃっかり助成金

ハト派ぶりタカに変身する総理

コロナよりカジノに舵を切る維新

大阪市 坂 裕之

気が沈むこんな時こそ笑える句

好きな事して毎日を我が儘に

歳なりに弱ってきたが負けないぞ

声上げて自分の意志を伝えたい

無理せずいつものように歩いている



大阪市 高杉千歩  
車椅子スイスイ一番乗りで食堂へ  
お三時のおやつがお三時に届く

あめしんどときどき大きな息をする  
戻りたいあの日がだんだん遠くなる  
生まれ変わるならば今度は強い人

大阪市 田中廣子

三回目済んで皆んなで出かけた  
腰痛は人にわからぬ辛いもの  
我慢して頑張つて行く買物に  
老い二人捜し物して笑つてる  
ヨーロッパ旅の思い出つきません

大阪市 田中ゆみ子

ひと言が言えずに拾う落椿  
数独にロジック孫と競い合う  
憧れは悪態をつくおばあさん  
首都に雪転倒を待つカメラマン  
膝に喝モーグルの瘤これでもか

大阪市 津村志華子

駄句没句いいの一日楽しんだ  
相撲相手の五七五は手強いぞ  
没句でもいいよと亡夫が笑つてる  
喜怒哀楽ぶっちゃけました短文に  
カレンダーの裏がわたしのメモ用紙

大阪市 寺本実  
聞く耳は持つが優柔不断です  
正月のついで薬が増やされる  
土砂降りの中で好きだと言つてみる  
風除けにしますあなたのたくましさ  
折り返し電話しますとそれっきり

大阪市 中井萌

皆んな来い鍋いっぱいの関東煮き  
早や後期ためらう事は何も無い  
子守りした孫に可愛い彼女さん  
心配を打ち消す医師の若い声  
例えれば孫はマシユマロ子はおかき

大阪市 原田すみ子

きつねうどん普段の日々の味がする  
さよならを言わねばならぬ日もいつか  
着膨れて五感も鈍く閉ざされる  
父母を語る姉にも恩ばかり  
孫が来て仏間も使うかくれんぼ

大阪市 平賀国和

七十路の険しさを知る友が近く  
三・一一一十二年後も傷癒えず  
言葉の力励ましくれるみずすゝの詩  
スポーツで世界をほぐす五輪かな  
今に生きる太子の教え和の一字

大阪市 降幡弘美

令和の子が語るドリフのおもしろさ  
ジム通いしているのだがなぜ太る

母は句で子は算数で指を折る  
新雪にはじめの一步刻みこむ  
子が覚え教えてくれる外国語

大阪市 宮崎シマ子

差入れが来ると笑顔で娘と喋り  
差入れのリング私に逢えて嬉しそう  
柳友からの小包抱きしめ涙ポロポロ  
あの雲は友を待つのか動かない  
句会済むかたまる人と散る人と

大阪市 山本加お里

羽生さんよくぞ挑戦金メダル  
身が軽い一人暮らしも慣れてきた  
全員がコロナに見える電車内  
カルチャーに行くため買ったリユクサツク  
教壇を下りれば師弟今は友

大阪市 横山里子

蠟梅のここだけ春と咲き誇り  
新しい百均できて夢買いに  
せめてもと私のために飾る雛  
貧乏性未だにマスク洗ってる  
呆けたのか確か女だったと思う

大阪市 若本安代

メールにはみな逢いたいと言ってくる  
ゆつくりとランチひとりも悪くない  
いまならばすべて流せる事ばかり  
占いに夢書き足して散歩する  
好奇心散歩のコース変えてみる

堺市 今井万紗子

七千歩疲れを知らぬ万歩計  
気合入れゴシゴシ洗う老いの錆  
マスクも慣れた何時まで続く三年目  
お年玉五円も入れて福願う  
もしもだなんて悲しい話言わないで

堺市 柿花和夫

絞つたらレモンも老いも味が出る  
欲捨てるのにも意欲が要るのです  
校長室の一幅の書にお人柄  
今年も会えた緋寒桜よありがとう  
相棒は私の中の智者と愚者

堺市 源田八千代

寒中にも水仙蠟梅凜と咲く  
子や孫への散財崇り自粛する  
頭が下がるコロナ禍の医療スタッフ  
親友が心友となる余生  
物価上がり年金下がる買い控え

堺市 齋藤 さくら

コロナ禍を忘れ去る日がきつと来る

オリンピック元氣頂く金メダル

優しさが見えていますよマスク越し

よそ見していても年月容赦ない

お近付きなりたい人が一人居る

堺市坂上 淳司

鈍行の旅を楽しむ古い仲間

青春切符で富士をぐるりと巡る旅

前後左右富士が顔出す身延線

頬つ被りのおばちゃんの居るローカル線

お茶受けは凍てた野沢菜スキー宿

堺市 澤井 敏治

寂聴さんに読んでもらった「鹿の声」

春きざむ俎板を聞く夢ごこち

バラが咲いた裸電球四畳半

コロナ禍に街の画廊という穴場

また戦かと象が静かに目を閉じる

池田市 太田 省三

クラス会男のにおい皆消える

合格の夜は親父の酒すすむ

合コンの華にはなれぬ怖い女医

ご近所の古墳はいつも素通りし

原点に立つとヒントが見えてくる

貝塚市 石田 ひろ子

字も書ける歩ける自分編でてる

老いという誇りを保つ薄化粧

挨拶はしつかりマスクしていても

病院へ行くため体調整える

空き家から更地になった散歩道

河内長野市 大島 ともこ

生きてるから生きなきゃこの世享受して

小さな幸をどうか返して今一度

大笑い抱えて友がやって来る

どん尻がピタツとはまる私流

前向きとは言わぬいつもの前のめり

河内長野市 梶原 弘光

入院中ゆっくりバズル解けていく

ネックウオーマー上げて省略するマスク

庭園の奥に格好の四阿

カラオケの休止が続き喉退化

ふん切りを付けさせたのは子の寝顔

河内長野市 木見谷 孝代

やっと知る許し包んだ夫の愛

一人でもパワーつけると餅をつく

マスクつけていてもシミは増えている

検査ばかりする転ばぬ先の杖

ワンクッション置いて孫を眺めてる

河内長野市 黒岩靖博

献立も家計で選ぶ主婦の知恵

巢籠もりでテレビビデオの一人旅

無精髭マスクで隠し手抜きする

舞い散った桜絨毯通り抜け

老いて尚バレンタインのチョコが来る

河内長野市 辻村ヒロ

永田町追求避けるレシビあり

大匙から小匙に変わる老いの日々

嫁と姑何処か似ている面白さ

今少し気力で旗を振っておく

都合により老人らしい顔をする

河内長野市 中島一彌

お互いに弱みをかばう老夫婦

一つ鍋つつく景色の五十年

頻尿の寒さ身にしむ冬の床

命日の線香の香の包む部屋

指先の乾きを焦るレジ袋

河内長野市 藤塚克三

近頃は常識外す智恵もいる

形見の品に亡母の温もり感じて

白を切るも邪念の心顔に出る

着痩せする妻のせい肉隠し芸

卒園式親より燥ぐ爺と婆

河内長野市 村上直樹

春夏秋冬見飽きぬ神の絵巻物

就活の孫へ最後のお年玉

恐ろしや無口の妻と核コロナ

呱呱の声戦知らずに百寿まで

老い燦燦すこしアンテナ曇るとも

河内長野市 森田旅人

メジロにも名前をつけて狭庭の餌

嘴の細さ子メジロ健やかに

きよろきよるとやはり子メジロ落ち着かぬ

食べながら糞するのはやめなさい

客人のスズメつましく地をつつく

河内長野市 山岡富美子

如月の暦自粛に飽きてくる

いつまでの我慢かコロナとのバトル

遠い日のロマン箆の手眺めつつ

ときめきは失せぬ鏡は嗤えども

その齡超えたが亡母に追いつけぬ

岸和田市 岩佐ダン吉

働きぬき年金こんなもんですか

国保高く来院は自粛せよ

背の丸さ母に似てきていませんか

乱れた字ただ閉店の二字がある

積ん読が増えた嬉しくなってくる

岸和田市 雪本 珠子

シナリオになかった道を歩んでる  
凍てついた心を愛で溶かしてる  
ときめきもふとした事で色褪せる  
自分らしい生き方探す旅に出る  
コロナ禍が自分見直す切っ掛けに

吹田市 太田 昭

無駄骨の一つひとつが骨になる  
握手してまず外堀を埋めておく  
偏屈の自分の殻に住み慣れる  
忘れてたことさえ忘れ老いてゆく  
悪人が善人になる再生紙

高槻市 片山 かずお

アナログ派らしい手帳に書いている  
好みはどちら心美人と器量良し  
ありがたいらしいが退屈な法話  
欲が顔を出して迷いが深くなる  
転けるので諦めました走ることに

高槻市 島田 千鶴子

桜草咲いたね春はここにある  
小春日はちよつと遠出をする散歩  
光射す神社に続く石畳  
立ち位置変えて眺める暮し方  
シナリオが変わる老後も恙無く

高槻市 初代 正彦

耳鳴りも偶には気兼ねするようだ  
念を入れ二重マスクのお買い物  
正念場ここはデビルと持久戦  
ちよつとしたことで輪ゴムの世話になる  
ネコ抱く妻のしあわせそうな顔

高槻市 富田 保子

あくせくと美徳と走り来た昭和  
どうでもいい事がどんどん増えてくる  
お陽さまがのぞいてくれる窓を拭く  
サルビアが燃える震災の街に  
お正月のお墓はきれいな花盛り

高槻市 松岡 篤

マスクしても目力という武器がある  
少しならと医者の特可出た晴れて飲む  
無意識にした落書きは母の顔  
契約書全部読んだら日が暮れる  
家飲みに変わり奥さん機嫌良い

高槻市 安田 忠子

食いしん坊食べる早さは金メダル  
思いつき立ち上がったら忘れてる  
金銀銅一度は欲しい人人生で  
自粛生活オリピックに釘付けに  
忘れ癖すつかり板に付いてきた

豊中市 池田 純子

また籠る大福ケーキ付いて来る  
台所放つばらかして羽生君  
もの足らぬ孫が来ぬ日のゆったり感  
周五郎今日もホロっとして眠る  
べっぴんないちごばかりが並んでる

豊中市 上出 修

人生を重ねインソップ読み直す  
惚けたかな記憶辿るが出てこない  
興奮の渦スタンディングオベーション  
ONも口をあめぐりビッグボス  
不器用でも嫁に恵まれ子だくさん

豊中市 藤井 則彦

耳の痛い言葉こそ我が応援歌  
コロナより先に来て待つ接種券  
理由なき反抗のまま平社員  
誤字脱字を軽く見たのが命取り  
あの人かとひっそり想うオリオン座

豊中市 松尾 美智代

震えながらりと咲いてるすみれ草  
日溜りにそろり芽を出す福寿草  
川柳塔癒やされてます表紙の絵  
過去懐かしみ八十路に思いふくらます  
三度目のワクチン接種待ちながら

豊中市 水野 黒兔

久しぶりのマスクの顔の目が笑う  
船酔いは妻が船長してる船  
春の日が心の奥も暖める  
雨だれがドレミを奏でやがて春  
お茶の味昭和の渋い笠智衆

富田林市 中村 恵

ひとひらに太陽と風光りだす  
本当に嬉しいときも泣くのです  
熟練の味は母から教わった  
一輪の花を描きたすわたしの絵  
けつまずくたびに地球に吠えておく

富田林市 山野 寿之

焼き芋を包む新聞コロナ記事  
水割りの水の少ないのを所望  
晴れ着乗せ成人式へババ破顔  
野球よりファッションショーのビッグボス  
少年が白球を追う未来追う

寝屋川市 川本 信子

恨まない人生照る日嵐の日  
ギシギシと不協和音の出る体  
アルバムに残る私のハイライト  
傘寿に必要働き方改革  
還す命ギリギリまで遊戯三昧

寝屋川市 伊達 郁夫

万策が尽きた演歌を怒鳴ろうか  
悲しくて日記白紙のまま眠る  
線香花火よろこぶ母の車椅子  
音のない部屋でひとりの箸を置く  
押し花のままであなただを閉じ込める

寝屋川市 富山 ルイ子

赤く点燈一層マスク手洗いを  
娘婿現場の仕事気にかかる  
毎日の会社行く孫気にかかる  
感染者毎日増えている日本  
ならぬのが不思議と思うオミクロン

寝屋川市 平松 かすみ

今日からは四人姉妹も独りなり  
私の声を聴かせるスマホから  
涙君さよならしない独りぼち  
法名を並べおはよう今晚は  
町内にちよこちよこちよことオミクロン

寝屋川市 廣田 和織

お若いと褒めてもらえる歳となる  
年寄りも変異続けて生き延びる  
大半は忘れた方がよい記憶  
まるい石ばかりで会議弾まない  
空いた穴埋める派遣というピース

羽曳野市 磯本 洋一

隠れ店三日で捜す妻の勘  
この程度二日酔いせぬ酒の量  
ハルカスで気分高揚プロポーズ  
三日坊主止められなくて傘寿なり  
脱炭素禁煙してよお父さん

羽曳野市 宇都宮 ちづる

バス停のフェンスに掛かる白マフラ  
節分は認知予防に豆数え  
バラ五十本娘から届いた感謝の日  
プラチナ婚目指し仲良くあと十年  
思い切りハグする孫の涙見て

羽曳野市 徳山 みつこ

春節の街を闊歩のノーマスク  
一面の葉の花蝶となる私  
菌の浮くような世辞も嬉しい八十路坂  
見た目で勝負ときに私もしています  
行き交う人に道を聞けない大都会

羽曳野市 藤原 大子

落葉踏む元気な芽生え楽しみに  
声に出し我が身に問うている疑問  
誘導の問いにまんまと乗る私  
恨んでは心納める不甲斐なさ  
素ごもりに尋ねたい事たまつてく

羽曳野市 三好 專平

あそび駒つかいそこねてまた負ける  
コンビニもはやらぬ店とはやる店  
検察と首相がグルになっている  
マイナスとプラス仲良く手を握り  
寅年も諍い絶えぬこの地球

羽曳野市 吉村 久仁雄

無神論孫の受験の絵馬は別  
頑なに自説曲げない夏みかん  
幸せな人とは少し距離を置く  
パートナーいつも笑顔の人選ぶ  
たかが百年だから命が愛おしい

東大阪市 北村 賢子

ありがたい何時もと変わらない目覚め  
釘付けで北京五輪の家籠り  
クルクルと空舞うスノボーに歓喜  
負けたとて悔いない努力した結果  
籠もる日へやる気もらっている五輪

東大阪市 佐々木 満作

感染に命の保障読めぬ危機  
格差社会追い打ち掛けるオミクロン  
表彰台四年の努力実を結ぶ  
半世紀為になること残したか  
あれこれと生きて来た道咀嚼する

東大阪市 西村 哲夫

母ちゃんの声聴きたくて呼んでみる  
呼ぶ毎にいませし母と待ち合わせ  
方向を母のお陰で失わず  
帰り待つ母はいつでも待ちぼうけ  
お母ちゃん笑われたって呼び続け

枚方市 谷 英也

振りむけば一人であった話声  
ジャズ鑑賞心に沁みる八十路です  
華麗に舞うスケーター世は平和  
耳遠く心静かな八十路です  
イライラも積もればガンに心する

枚方市 藤田 武人

アホ言える友が旅立つまたひとり  
いつもとは違う仕草に気づいても  
回り道したから今に辿り着く  
生きている元気ですよと震えた字  
本当に罰が当たるか試したい

枚方市 (故) 山口 弘委智

昨日山きよう海を見て春を待つ  
春一番新聞を待つ 歓喜待つ  
集えるを喜び合うて初句会  
健啖を子に囁かれた得意技  
きのうとは違う風あり春隣



藤井寺市 太田 扶美代

後手後手に回る悲しき自尊心

お百度参り粉雪の舞う午後でした

八十路にもまだ夢がある夢がある

捨て切れぬ夢をこっそり抱いている

略式をとつても嫌う父とだった

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

春一番老けてばかりはいられない

ひらがなの如くに咲いたものも花

浦島のその後を探す冬籠もり

甘えるのは苦手になった冬すみれ

温かく静かな部屋があればいい

藤井寺市 吉田 喜代子

遠き友今年こそはに変異株

慎太郎逝く私の青春道連れに

忘れてた健康という幸せを

新聞が忘れゆく日々防波堤

ハッサクの香りの先に旧友の顔

箕面市 酒井 紀華

セルフレジ後ろの人が気にかかる

独りはち孤独にたえるお正月

ムンクよりグレタの眼光奮い立つ

ありったけの腕力つかい雪下ろし

パスワード一字ちがつて闇のなか

箕面市 出口 セツ子

ヒーターとコタツの番で日が暮れる

経済力親の威厳も無く頼る

足腰が自粛続きで弱くなる

ただ耐えるのも限界のオミクロン

手洗いが過ぎて霜やけ悩まされ

箕面市 中山 春代

まっ先に雪の嵩聞く電話口

オミクロンが一気に染める世界地図

特別な人はいないがチヨコレート

女子会で解けるほどの小さいウツ

朝ドラを時計代わりにカフェオーレ

箕面市 広島 巴子

寒行にコロナ退散託します

コロナ禍に世界情勢きな臭い

北京五輪平和へ聖火消さないで

ああコロナワクチン3度打ち止めに

立春の響き楽しく梅昆布茶

八尾市 寺川 はじむ

久し顔名札で迎えるクラス会

マドンナに未だ群がつて傘寿会

ぐずの振りしてきっちり空気読んでいる

孫の芸部屋が笑いではち切れる

ぐずぐずも時には吉になる不思議

八尾市 村上 ミツ子

年の数食べると豆をかぞえる子  
コロナ退治へ鬼にも応援を頼む  
ゴミ出しも先ずマスクしてマスクして  
コロナ禍をぬけだせるのはいつだろう  
酒などいらぬ粕汁を所望する

神戸市 上田 和宏

いい酒だ苦手意識が消えている  
あれもこれも無かったことにして平和  
不審電話最初ハローと言ってみる  
八十三まだ守りには入らない  
好奇心明日すること考える

神戸市 奥澤 洋次郎

地で生きていこう二度とはない余生  
ビジネスの世界は怖くなっている  
寒風へ出ればやる気になってくる  
増えるべくして増えている感染数  
台本が無くて伸び伸び定年後

神戸市 奥水 弘

人生気楽つぶやく顔はソクラテス  
米寿明けお誘いなのか友ら逝く  
ご破算で生き直すなら亀の道  
間の抜けたやり取りだけどいいお風呂  
椅子で貫禄正座は無理と茶会抜け

神戸市 近藤 勝正

声馴染マスク取れたら知らぬ顔  
コロナ後のふるさと見たくスクワット  
厳寒に堪え咲く老梅まねたいな  
本当に神はいるのか丸かじり  
軽よりも小回りでできる現総理

神戸市 斎藤 隆浩

スキーよりアルプス眺め露天風呂  
生きるヒント探し求めてひとり旅  
いつまでも昭和を背負う石頭  
勝ち組もピーク過ぎれば下り坂  
暖房の効いた図書館我が書齋

神戸市 敏森 廣光

人生の重みで軋む我が背骨  
冬季五輪怖いスポーツばかりです  
爺ちゃんはやっぱり鬼が似合ってる  
朝ドラも大河も脇が光ってる  
雪国は酒と肴が美味そうだ

神戸市 富永 恭子

痛む胃をほぐす炬燵のあたたかさ  
ふつきれば朝の冷気が心地よい  
優しさが嬉しい蜂蜜がおいしい  
労りの言葉を自分にもかける  
出番待つ桜の花の一筆箋

神戸市 能勢 利子

三回目のワクチン予約無事に済む  
友も皆ワクチン済めばランチする  
その日まで不要不急は家に居る  
指折って頭の体操本整理  
チューリップに負けじ顔出す春の草

神戸市 松倉 正美

母から妻に継承された恵方巻  
節分会授かる豆はピーナッツ  
祭り好きな友の寂しい家族葬  
戦後派はコロナ何ぞにへこたれぬ  
バレンタイン孫の手作りブラウニー

神戸市 山口 光久

謙虚さが皆に好かれみなが寄る  
世の中を上手に泳ぐ低姿勢  
待ちました産声聞いた日の朝日  
老人の笑顔が皆をほっとさせ  
生きてきた証ですよと皺を撫で

神戸市 山口 美穂

お祝いを頂き米寿意識する  
生きている確認出来た年賀状  
スッピンの自分の鏡見たくない  
電話のむこうお喋り出来る友がいる  
ああ寒波散歩にかえてスクワット

神戸市 山崎 武彦

ルンルンの春がわたしを呼んでいる  
マスクとり腹の底から笑いたい  
明日開く蕾に少女の詩がある  
山萌えて空もわたしもよく弾む  
遠まわりふと眼の合ったその日から

明石市 糀谷 和郎

矢印が逸れて気楽になりました  
不安より期待が勝る始発駅  
掴めそうで掴めないのが虹の端  
青い空とんと御無沙汰土踏まず  
罪ですかキセル乗車をするトンボ

尼崎市 近兼 敦子

母さんが中継役で回る家  
キャッシュレス時代にのれず現金派  
気付かない癖をさらりと指摘され  
記念日を夫婦で忘れ平和な日  
正論も反論も子は振り向かず

尼崎市 藤田 雪菜

寒がりが天気予報にビビってる  
正すこと信じることの難しさ  
初詣終った途端エビスさん  
連ドラの明日を待たせるテクニク  
寒い朝一輪の梅凜と咲く

尼崎市 山田厚江

金正恩アメリカ製のワクチンで  
踏み台にされても君の為ならば  
ゴッホの自画像キヨロリ瞳が物を言う  
缶詰と本と電池を買い込んだ  
失敗を僕のミスだと言える人

尼崎市 山田耕治

自転車に付けるとスヌーピーのお守り  
ご一報ください猫のモンタージュ  
母さんが居てたらと言う小言聞く  
灯点してお仏壇へも恵方巻  
句会報のお名前さがすのも哀し

加西市 山端なつみ

鬼は外私の胸にも鬼は外  
豆撒けど鬼は胸奥引きこもり  
寒中見舞出さずこたつでもう立春  
眼帯の上に眼鏡の不自由さ  
独眼竜のお洒落な眼帯ないものか

川西市 山口不動

鴨池にしばし子鴨を愛でしおり  
裸木に空の鳥の巢残りたり  
風花に乗って消えてよオミクロン  
嫁からの手袋温し初使用  
如月に吾を産みし母五十回忌

三田市 足立つな子

空晴れて粉雪の舞うお正月  
つきつきと納得いかぬ事故多発  
酢みそ和えパスタもいいがほつとする  
首据わる孫はキヨロキヨロかわい  
人生のゴール間近のプレッシャー

三田市 稲角優子

カレンダーに楽しみ付けて年明ける  
蠟梅の香り天使が舞いおりる  
春弥生母を泣かせて発つべきか  
温もりを君にあげようさあおいで  
立春を飾るひ孫も六人目

三田市 大西重男

薄着してワクチン接種風邪をひく  
明日にしようその明日来たがまた明日  
御守りも賞味期限があるらしい  
平均寿命越えたし終の準備する  
婆ちゃんになっても消えぬ淡い恋

三田市 尾崎一子

大寒のゆず湯に溶けるコロナウツ  
二十回忌若い黒髪亡夫恋う  
想い出も惚気話になる供養  
いつか死ぬ今日という日を美しく  
豆を煎るコロナ終息鬼やらい

三田市 住 吉 美和子

オミクロン田舎町にもやって来た  
伊予柑の皮を浮かべて超長湯  
陽が眩し背筋伸ばして深呼吸  
国民は勿体ないこと知っている  
元総理近頃やたらと口を出す

三田市 多 田 雅 尚

NOと言う返事も出来ず悔やむ日  
笛吹けど交互接種に人気なく  
人工の雪まで造りやる五輪  
節分の今年の鬼はオミクロン  
温暖化に反比例する老いの冷え

三田市 中 山 昭 美

夜更しの帳尻合せする昼寝  
安請け合い後悔すぐに押し寄せた  
何だっけ階段半ば立ち止まる  
巣ごもりの気晴らしにする医者通い  
断捨離はまたにしよう春の雪

三田市 野 口 真桜子

きつく結んだ赤い糸解きたいのにほどけない  
堪えきれずため息ばかり雪積もる  
丹塗りの剥げた祠に子猫寄り添う  
垂り雪に埋もれ艶めく寒椿  
苦労話全部柩に入れていく

三田市 堀 正 和

通販が過大包装されて着く  
まずいとは言えぬ食レポつらからう  
久し振りにお代わりもした栗ごはん  
ぼっちゃりもいいなお人好しに見える  
菜の花の彼方に比良の白い雪

三田市 村 田 博

あと僅か迷路の先に青い鳥  
ステルスの値上げじわじわ攻めてくる  
新聞を変えても景色変わらない  
肩の荷を下ろすと重くなる臉  
好奇心消えた男は無味無臭

高砂市 松 尾 柳 右 子

オミクロン避けありがたいデイケア  
感染へ自問自答の引きこもり  
おおわらわ人工雪の舞台裏  
2歳児へウガイ手洗い馴れさせる  
まん延は怖いワクチン何度でも

宝塚市 丸 山 孔 一

想定外縮む背丈と出る腹囲  
金メダル裏に隠れた苦節の日  
デイケアに週一通う身となれり  
古桜白い苔生し春を待つ  
空も地も汚れた地球救わんか

丹波篠山市 北澤 稠 民

着るものも気にせぬようになりました  
少しずつ終着駅に善を積む  
年老いて負ける事にも慣れてくる  
川柳の好きな医者には愛がある  
好きな歌ふさぐ心の窓を開け

丹波篠山市 酒井 健 二

丁寧な言葉をかける心がけ  
人に道譲って歩く渡世術  
無為徒食妻の入院なんとする  
入院の妻が教えるカキフライ  
はした金有れば餓える国でなし

丹波篠山市 長谷川 善 輔

温暖化それでも寒い年齢としのせい  
飼い主に似てくる猫に腹を立て  
スポーツも奇術見ること進化して  
おもろない思つても見てる冬季の五輪  
マチユピチュもハワイも見ずに終りそう

丹波篠山市 藤 井 美智子

頼もしく孫成人へ仲間入り  
一線を終えて八十路はマイペース  
目標は卒寿流れに身を委ね  
しあわせは手のひらサイズ欲言わず  
返納へ歩く回数増えて来た

西宮市 緒方 美津子

寒の水橋をくぐればやがて春  
宝くじ未だ笑ったことがない  
犬に散歩をせがまれて元気です  
輝の手より生まれる温い和紙  
五歳児もゴミの分別しています

西宮市 亀岡 哲子

若い若いと言われたままのおばあさん  
ドッコイショ起きる勇氣に今日がある  
冷蔵庫にちよつぱりずつが溜りだす  
老人ホームのちらししつかり裏表  
八度二分の熱で見つめる児の瞳

西宮市 西口 いわゑ

今日立春子供のような誓い立て  
返事など望めぬ手紙書いている  
地球儀を廻し廻して見るニュース  
がむしゃらが過去形になり今静か  
曾孫にもいいばあちゃんを記憶さす

西宮市 福島 弘子

念願の鳴門の渦潮船に酔う  
初節句頑固な老父の鯉のぼり  
おでん炊く炎の見えるガスがいい  
三分が待てぬ五歳のカップ麺  
タイ焼きの頭尻尾でまた迷い

西宮市 福田正彦

川柳で耕す頭脳生き生きと  
鍛え抜く心は余裕迷わない

一言の謝罪が胸を開かせる  
小さな夢これでいいのだ抱きしめる  
非が無いと言いつ張り合つて遠ざかる

花だよりコロナの機嫌見るお酒  
大過なく凡庸同士ダイヤ婚  
孫五人恋の便りはまだ聞かず  
老犬の友へ元氣を見せに行く  
お返しの出来ぬ好意に胃が重い

初キッスとおい想い出よみがえる  
血塗られた戦の跡に手を合わす  
しみるなあ五十年の妻の味  
妻と二人褒めも文句も分けあえる  
気がつけば古里見えぬ老いの窓

(前月分) 高知県 小澤幸泉

こんにちはそのから名前でて来ない  
ちゃんづけで呼んで呼ばれてどっこいしょ  
丸木橋這うて渡つたなつかしさ  
亡夫との思い出だから片づかぬ  
同じ事話しに今日も来てくれる

(前月分) 雲南市 菅田かつ子

(前月分) 羽曳野市 宇都宮ちづる  
ベチャクチャの娘等が気になる混んだバス  
スーパ一の七草庭の草と似る  
四・五日なら嗅覚使う期限切れ  
十年日記次をどうする八十路前  
補聴器も老眼鏡も懐かない

(前月分) 倉吉市 田中紀美恵  
冬の寒波よけて通れぬ炬燵出す  
挨拶をしたくないからそっぽ向く  
コンコンと咳をする人よけて通る  
その話何度も聞いた母認知  
くだいなあ何度も同じ事言うな

第2回 熊本県川柳研究協議会川柳大会

日時 5月22日(日) 開催 10時  
投句締切 11時 披講 13時  
場所 くまもと県民交流館バレー9階  
第1会議室  
鶴屋東館のビル9階  
(電話096-355-4300)  
市電・水道町下車すぐ

課題と選者 (各題2句)  
「パレード」 北村あじさい 選  
「そこそこ」 古谷龍太郎 選  
「抜く」 小谷千代子 選  
「究める」 梅崎流青 選  
自由吟 森中恵美子 選

講演 木本 朱夏  
参加費 千円  
参加者全員、課題「緑」(字結び)を  
1句提出。全句発表誌に掲載します。  
主催 熊本県川柳研究協議会

## 川柳塔の

# 川柳讃歌



上方芸能評論家 木津川 計

### 真つ直ぐ育ち真つ直ぐ老いてすぐ八十路

松尾 美智代

「でこぼこ道や曲りくねった道、地図さえない、それもまた人生……」戦後歌謡界の大スター・美空ひばりの絶唱にしてラストソング「川の流れるように」が人生行路の容易なさを歌い上げた。だれしもの道は曲りくねるのである。だが、美智代さんは幸せだった。真つ直の道を真つ直に歩いて八十路を数えた。この上は、川の流れるように、おだやかに、この身をまかせていきたい。美智代さん、大丈夫です。安心してまかせてください。

### 一万歩あるける足に金メダル

中山 春代

察するに、春代さんは一万歩あるけるのだろう。それがどれほどの距離かわからないが、「金メダル」を贈りたいほどの健脚である。一方、私は軽い脳梗塞の後遺症で脚力が衰え、ステッキに頼って歩いているから春代さん

が羨ましい。足元おぼつかない私の脇を若い人が次つぎ追い越してゆく。私は居間に座りずめだから脚は弱るばかりだ。70代の老化は一年ごとだが、80代は一月毎、90代は毎日に弱るほどに車椅子が近づいていることを知る。

### すぐ下車をしそうな人の前に立つ

降幡 弘美

「終点の一つ手前で席が空き」とどなたかが詠んだ。無念だったろう。どうせ空くなら三つ四つ手前で降りて欲しかった。当てがはずれたのである。人生の運不運は電車に座れるか否かに始まり、配偶者に恵まれるかどうかで決まる。もし配偶者の選択で失敗すれば電車の空席に当る当らないどころでなく一生の不運、貧乏くじを引いたのだ。引くなら当りくじを引きたい。弘美さん、あなたの問いの振幅幅は広いのです。無事に座れましたか。

### 閉店の貼り紙にある涙あと

岩佐 ダン吉

コロナ不況の影響が大きい。「近畿の経営破綻、2年間で548件」と新聞が伝える。集中していた飲食業から様々な業種に広がっているという。コロナがなんだ、といい加減に見くびっていた私たちが、事態は深刻で世紀的規模の災禍になった。よるこんで廃業するのではない。泣きながら「閉店の張り紙」

を貼る、その「涙あと」がダン吉さんには見える。貼る方も見る方も辛い。早く災禍がおさまリ、ダン吉さんが飲みに行けますように。

### 横にいてだけで空気が温かい

牧野 芳光

抱擁力と羞恥心、心得ねばならない人間の資質であろう。恥も外聞もない人物とのお付き合いはお断りしたい。おおらかで、いつも静かに笑いながらまわりを引つ張っていくリーダーがいる。小事に目を配りながら大局をとらえている。少年の恥じらいを失わないままおとなになった彼は何ごとにも感動して皆を讃える。だから彼の「横にいてだけで空気が温か」くなる。そうさせる人に私はなりたい、と芳光さんはみんなに思わせました。

### 少年のように球春待ち焦がれ

木田 比呂朗

少年のように私は高校の選抜野球と夏の甲子園を待ち焦れる。選ばれたチームと勝ち抜いた選手たちの優勝戦が終わった。表彰式がすみ、「選手一同場内一周っ！」で優勝、準優勝チームが一周し始める。その列を見ながら、これで今年の夏の終ったことを知る。また来年、まで生きているかどうか、思わず涙が流れる。比呂朗さん、「球春」でなく、高校野球で「ご免なさい。ですが、待ち焦がれるのです。」



西尾葉句集『水鷄笛』くいなぶえ

目くばせに哀れ五十の血があわて  
手を洗うてるところへ来てささやかれ  
ゴシップは今日又かえたネックレス  
行末を小間使いの方が案じ  
月の縁団扇くるくる廻すだけ  
ボートも二人ベンチも二人中の島  
情熱はいつそ無口にしてしま  
色の道メンデルの法則ここに生き  
アバンチュール横町をぬけ路次をぬけ  
手をつなぐきつかけとなった水溜り  
愛の巢は隣りの音もよくきこえ  
雨傘を忘れて帰る術もござる  
水差しを小笠原流で運ばれる  
愛人はうなずくばかり砂の道  
愛人の言葉のはしも暖かく

「カステラと花束」

お見舞へ附添い言葉添えるなり  
病人の向うむいたをとがめまじ  
寝返つて氷囊さぐる機嫌が出  
七度二分見舞いの客の好き嫌い  
置き薬でなかつた風邪を笑ろて起き  
退院へ爪先ゆるい足袋をはき  
お見舞に行けば一杯やっております  
お見舞は寿司が喰べたい話きき  
寝顔だけのぞいて見舞失礼し  
検温器は喜んで主治医趣味のこと  
春になったらと病人も看護婦も  
検温へちよつと眼蓋を開けただけ  
退院の握手の力ほめられる  
検温を汐時にした見舞客  
食後すぐ薬の為の飯のよう

# 白選集

小島 蘭 幸

地鎮祭晴れる上棟祭晴れる  
絵日記のらんこうさんの小さきこと  
座り続けるせめてリッチな椅子にする  
自粛自粛お腹が空いたことがない  
旅に出るとごはんが美味しいのは何故だ

川上 大 輪

落とし蓋してから気付く忘れ物  
もう削れない鉛筆のひとり言  
蛇口からときどき漏れてくるお告げ  
懐で居座っている寒気団  
進化論コロナも負けず変異する

北野 哲 男

エコマーク無かった頃は皆質素  
成長期粗食で育ち卒寿越す  
有難や医者ハシゴがまだ出来る  
梅の香に予定を変えるウォーキング  
億の金数えたいので宝くじ

木本 朱 夏

猫を抱く時間と星を観る時間  
ぼよぼよと春の兆しが首筋に  
王様の耳には届かないニュース  
読みすすむうちに涙に曇る本  
この程度ニイチエ芭蕉も読んだけど

新家 完 司

コスモスの野原があった駐車場  
ゴキブリは殺すが蜘蛛は助けたい  
自販機のお世話になって熱いお茶  
大根の葉っぱが旨い林住期  
手探りでネット社会を覗き見る

高瀬 霜 石

百葉の長と信じるばかりです  
タンパク質大事アルコール極大事  
2合は飲めるイカの足いっぱい  
酒は毒ですか悪友またひとり  
亡くなった人と話ができる酒

竹 治 ちかし

我が胸の文化遺産という故郷  
コロナにも負けず七十二候見せ  
ワクチンの接種に貰う市民権  
易し老い難し学びの中学生  
もうとまだ まだを選んで夢を追う

津 守 柳 伸

3 回目済まし自肅の厚い壁  
ひいらぎと鯛忘れぬまつりごと  
靴底も腰もカイロの外出日  
お元気な声に安堵の電話口  
想像を絶する異郷豪雪地

西 出 楓 栞

心から笑うことないコロナ以後  
さりとても二十歳に戻りたくもなし  
マリーンズのシャツ着せられている曾孫  
クックパッド見つつ結局梅茶漬  
インスタントとレトルトで日々事足りる

仁 部 四 郎

桜見て卒寿の手帖菊を待ち  
声と顔ウーンと卒寿の同期会  
手を合わす卒寿の歳の計報欄  
卒寿だが選挙があればまいます  
卒寿だと思おうと暦いかめしい

平 田 実 男

お茶に水やがて空気も有料か  
犬掻きで八十路を越えて来た卒寿  
褒め言葉・凄い・さすがに・素晴らしい  
膝腰に相談をしてスクワット  
一番はすき腹という調味料

福 士 慕 情

ずいぶんと降りましたねと雪を掻く  
ブルがまたどっさり雪を置いて行く  
家は冷蔵庫雪に閉じ込められ  
屋根雪を下ろしたいけど病みあがり  
立春が過ぎても油断できぬ雪

藤 村 亜 成

良質な睡眠求めてする日課  
空白を四・五日埋めて書く日記  
コロナ時代に困った花粉症  
切り裂かん記憶に辿り着くまでの膜  
見直そう原風景と現風景

松 本 文 子

私だけの木漏れ日の道歩く  
どっこいしょマイナンパーも一休み  
美しい姿で枯れていった花  
曲りくねって細くなっても続く道  
忍耐と同居手足が動かない

三 浦 強 一

足腰が福祉除雪に掌を合わせ  
福祉除雪温暖の雪重たかろ  
喜怒哀楽共有できる友がいる  
百歳の時代卒寿は通過点  
終章となつて自分史まだ続く

村上玄也

年号の令和にやっと馴染みだし  
返上か継続悩む免許証  
とりあえず運転テスト受けておく  
車ない暮らし想像さえできぬ  
六十年余持った免許だいたいおしい  
踏ん張っています仮分数の分母  
極楽に行くサイフォンに身を任す  
新語辞書の中全く孤立した  
何処に行っても片隅が指定席  
松根油採られた松も枯れてきた

森山盛桜

てのひら

八木千代

淋しくなったら すぐ右の手を裏返す  
うす桃色の丘にまわりを囲まれて  
よろよると生命線もつながって  
感情線だけはきつぱり一文字  
まだいくらか脈がありそう私の掌も

山本希久子

また来年会いましょうねと桜散る  
八十七年生きたK点越えた  
蛋白質ビタミン足りぬ老いの膳  
どこかで別れ待っていいそんな花の道  
迷ったら残す断捨離すすまない

板尾岳人

真夜中に起こされ命あふれ出す  
地球儀を回す女へ筆不精  
早春の山に小石が喋り出す  
吊橋がゆれてみどりもゆれている  
美術館出ると無口になっている

居谷真理子

噴火した途端に軽石になった  
愛になぜ嫉妬がついてくるのだから  
ヒントよりでかい答えを出してやる  
どなたにも似ず老人の出来上がり  
ゲームイズオーバードシアンルーレット

### 麻生路郎語録

▼ホントに寒くならないうちにソロ／＼春めいて  
来た。ポカポカするようになったら、吟行でもし  
たい。

灰色の街の変な圧力から遁れるためにも吟行は  
是非やりたい。「番傘」も「三味線草」も「昭和  
川柳」もみんな仲よく、お手々を繋いで春の野辺  
を散策するのも悪くはないじゃないか。

（「川柳雑誌」昭和12年3月号「編輯縦横」より）



# 森の集句

## 『縞かすり』

岩田美代

鱒雲 今日続きは明日になし  
 燃え尽きた男と女の見る花火  
 美しい嘘てらてらと柿をむく  
 妬心抱き蛙の声に囲まれる  
 ほんとうを聞きに来たのに芒は棒  
 春めくも幻ひとつあるでなし  
 縞柄が生きて勝気のこぼれそう  
 花芯をのぞいて花を哀しませ  
 みんな皆笑顔でみんな皆他人  
 染め替えて羽織は過去を喋らない  
 遠い日の如く綿菓子なめてみる  
 虫の声切れ目があった別れぎわ  
 覚悟せぬ鯉を見た日の淋しくて  
 女三人くらしの所作でみかん剥く  
 昔むかしのやさしさが残る橋

(昭和55年9月10日 発行)

## 温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

いずれまた相談するとそれつきり  
 泥絵の具はげて南蛮寺は秋  
 女郎花やわい男が多すぎる  
 美術展三つを梯子する文化  
 スペアキー性善説は信じない  
 軌道敷き淡々と去る創業者  
 核のない地球を孫に贈りたい  
 川柳の本をたくさん持つている  
 洛陽・西安の旅(四句)  
 銀鞍にあらねど白馬の人となる  
 兵馬俑 男はみんな戦好き  
 胡姬が注ぐ白酒に酔う古都の夜  
 長安や王維 岑参 李白 杜甫  
 スタートの時には見えたピラミッド  
 裸木がオブジェにも似て冬の天  
 大器にはならなくてよし孫を抱く  
 敵だからいちばん高い花贈る

# 水煙抄

## 川上大輪選

尾道市 小川道子

牙え渡る空氣に嘘は似合わない  
たつぷりの湯舟に浮かぶ一行詩  
凜として立ち振る舞いの美しさ

燃え盛る炎の如し火の女

訳あつて磔の飛んで来ない位置

ゆるやかに日差しが届くきょうの窓

チヨコパフェをおいしい顔が覗いてる

朝焼けが街の欠伸を聴いている

コーヒ―はブラック遣る氣買つて出る

水溜り空の移り氣映しだす

北風が冬の威厳を曝け出す

おしゃべりな女が噂キヤツチする

紙コップ握りつぶした日の孤独

三文判押しして独りの武者震い

泣きぼくろ描いて自画像できあがる

大阪市 岡田恵子

宮崎県 惠利菊江

以下余白想いの丈は書きました  
胸底にこびりついてる瘦せ我慢  
何食わぬ顔で凶星を突いてくる

大阪府 高木道子

法要の知らせが並ぶ節分会  
本堂の畳つめたし鬼退治

着膨れてエプロンの紐たて結び

お日様を丸まる包む干し布団

豆撒いて追い出すほどの鬼も無く

マイカーでマスク外して深呼吸

鳥取市 吾郷天遊

のんびりと生きて命を遊ばせる

日めくりがだんだん加速する老後

歳月の速さに夢が追いつかぬ

口癖になったごめんねありがとう

スピードの違う時計の三世代

人參をぶら下げ駄馬の尻叩く

河内長野市 坂野澄子

スタートライン背中に亡母の応援歌  
ひたむきに生き抜く母の座り肝脈

父ちゃんが怒ると動く団子鼻

駆け引きは止めよう毬が弾まない

鬼の子と呼ばれし虫を手に包む

思ひ出はおまけがついた赤い飴

門真市 坂本星雨

風よりも静かに母が逝くなんて

しんしんと俯く影へ悔い積もる

風と風との出会う音聴く冬ひとり

蓑虫になつてやさしい春を待つ

懸命に素直に生きるダンゴ虫

悲しみを閉じ込め朝の陽が昇る

広島市 常國喜好

出会いより別れが告げてくれたこと

わき道を抜ける出口が大渋滞

さいころが二つあるから面白い

近ごろは五百歩いかぬ歩数計

くつろげば猫も男も伸びをする

杖二本持つて私も二刀流

大阪市 森廣子

生き延びてどうやら米寿近くなる

良い事が待っていいそうな春はそこ

こんな日もリッチにしよう花を買う

私みたいと思わず笑うシワ蜜柑  
何が足りない虚ろな心持て余す  
かき分けてペールの中を抜けれられぬ

山口市 中前幸子

雑木林を歩く無口な風連れて

ふと気がつけば万葉の森の中

ちぎれ雲ゆつくり愛の形して

流れる街の灯二次会が懐かしい

ひとコマ漫画からはみ出しているわたし

ブラックコーヒーこころの刺を抜く

大阪市 大沢のり子

誰よりも優勝したいビッグボス

退院へテレビカードを使い切る

五十肩今朝もこわごわ回す腕

レシピには書けぬマル秘の調味料

好奇心だけはまだまだ失せてない

心の鬼ほどよく残し豆をまく

河内長野市 穂口正子

写真うつりどない撮つてもお婆さん

あちこちが痛み病名しほれない

絵手紙に川柳一句友見舞う

妻がなじる弱った僕に意趣返し

ごそごと音たてながら老けてゆく

親の恩気付かぬままに老いた思

大阪市 東 敏郎

嫁ぐ娘に黙って母子手帳  
八十路坂越えた辺りにある関所  
一万歩悲鳴をあげる歩数計  
酔っぱらう振りしなくても千鳥足  
老犬に手綱とられる帰り道

大阪市 今村 和男

逝くときに感謝するなら先に言え  
捕逸したボール追いかけ半世紀  
泉の精よ金の斧では木は切れぬ  
この道と決めているのに迷ってる  
月末は溜った怒り捨ててに行く

大阪市 折田 あきこ

握りこぶし振りおろせず胸の中  
おしゃれでした記憶の中の友の笑み  
うつぶんをまき散らかして咳をする  
ゆとりない時の流れをのぼる鮭  
コトコトと喜び煮つめ一人鍋

大阪市 阪井 恵子

淋しさをひたすら埋めてゆくバズル  
淡々とおまけの明日を生きてみる  
言いかけた言葉転がす胸の奥  
タンポポの後はどうなれ風まかせ  
れんげ草ほこぼこ笑う君に似て

大阪市 阪本 秀子

三食で気力もチャージするのです  
コロナ禍に絆の価値を問うている  
ほんまもん捨て身になればみえてくる  
整わぬ憂き世かたむくやじろべえ  
今もなお父母の温みは消えぬまま

大阪市 樋口 眞

息災ですし丸かぶり豆を撒く  
狭い庭椿彩り添えてくれ  
ひま過ぎた日はどうしても眠られず  
寂しがり誰彼なしに話し掛け  
子の自慢始まりそつと席を去る

池田市 上山 堅坊

難問が解けて大きな深呼吸  
気配りを受けて嬉しい歳になる  
褒められて年甲斐もなく元気湧く  
数回も読んで記憶をせぬ頭  
悔しさを飲み込み明日に期待する

貝塚市 吉道 あかね

梅一輪飾り二月の中にいる  
冬眠は長い私も生きている  
そこそこの妻にそこそこの努力する  
物差しを変えて幸せだと気付く  
文旦が届きりピング春になる



柏原市 神崎 江

しよが湯を入れて始まる冬の朝  
ひとりよりふたりもいいとふと思う  
ときめきが少女のごとく止まらない  
彼のためお浸しでさえレシビ見る  
おはようを交わす人いるあたたかさ

交野市 山野 双葉

菜の花を背にし遺影の母笑う  
悲しみに歌ってやろう子守歌  
空っぽの私になって逢いに行く  
指が触れ急に無口になる二人  
ライバルは自分だと知る持久走

高槻市 三谷 白黒

毎日が同じリズムの繰り返し  
御老公今でもテレビ観ています  
ワクチンが効き過ぎたので寝ています  
長生きが幸せなのか考える  
許される嘘があること子に教え

豊中市 貝塚 正子

芋虫の今日か明日かと脱皮待つ  
泣き喚き気がすんだのか子の寝顔  
恨み言とうとう夫に言わぬまま  
昔話花咲かせたり散らせたり  
太い太い線を二本も引いて拒否

豊中市 齋藤 奈津子

掛け放題とだらだら長電話  
そろばんを習ったけれど計算機  
年の変わり目令和西暦ややこしい  
若いと言われいつ諦める白髪染め  
「青良し」と信号見では口ずさむ

神戸市 青木 公輔

摘んでも摘んでも美しい芽が育つ  
ずぶぬれのシャツ伏兵の眼がにらむ  
爽やかな汗からドラマ動き出す  
耳よりな話はサギの序文かも  
散り際に言う一言が胸に棲む

神戸市 城戸 誓子

連れてってV字飛行の雁達よ  
シヨッピング果たせず母は寝たきりに  
桜色おしゃれな母の服選ぶ  
セピア色モダンガールの母ポーズ  
病室の父にキスした二十歳の日

神戸市 みぎわ はな

足し過ぎた酒に海馬が揺れている  
揺れ出すと妻が美人に盃重ね  
ステイ二年妻も相伴酒好きに  
妻のアテ居酒屋よりも温い味  
ポストへの往復だけの三〇〇歩

神戸市 村松久江

会いたいと願う心に蓋をする  
息を詰め苦手な人を遣り過ごす  
うかつにも零した言葉握られて  
ふたりなら笑い飛ばせる何事も  
ビー玉を透かし見ている平和の世

神戸市 山根弘華

誤解とけ今日は嬉しい月をめ  
川柳で心のかさを落す日々  
ほけ防止メモを片手に一句よむ  
白寿まで心しずかに春を待つ  
追伸に一句をそえて出す便り

明石市 瀬島流れ星

薄れゆく記憶へ明日の日が怖い  
人生に正解は無い個々模索  
バカバカと自分を叩く大チヨンボ  
こんな佳句作れたむかし懐かしむ  
立ち飲み屋他所の課長とウマが合い

芦屋市 荒牧孝子

返して欲しい貴重な老後この二年  
最後の嘘病んでる母へ大丈夫  
天国の住所教えてお母さん  
二世帯の阿吽のルール上と下  
身辺整理バブル産物続々と

伊丹市 延寿庵野鶴

阿と吽で邪氣払ってる仁王像  
深爪でちよつとためらうツアーパス  
飛び回る黒子の汗は写らない  
人間のエゴで地球儀よく軋む  
裏表紙これも大事な本の顔

伊丹市 岡村風琴

春の陽を浴びて新芽が踊り出す  
幸せな顔になつてるイチゴパフェ  
しっかりとこころを研く写経筆  
雑巾は文句もいわず役目終え  
お代りが止まらなくなる隠し味

三田市 幸田厚子

薄紅を塗る気にさせた解除明け  
今日の宿銘菓とお茶で伸ばす足  
二年振り箸とスプーン増えた膳  
婆一人孫も来ぬのに寿司と豆  
母逝つて寡黙な父の背が泣く

三田市 森玲子

あなたの名今更聞けず長話  
夫とはあれこれそれでピンとくる  
猫二匹留守番頼みシヨッピン  
投句済み一先ず脳も小休止  
六波来て私我慢のカゴの鳥

西宮市 高橋 千賀子

三回目打つても心晴れぬまま  
コロナでも生きてる今が花なのさ  
節分や猫もイワシの尾頭付  
極上のしあわせ旨い物食べる  
日溜りで猫とまどろむ至福どき

西宮市 藤原 みよし

お雛様淋しかろうと出してみる  
おいしくて飲んだワインを抱えこむ  
春隣り若芽出てるが迷つてる  
ひとり鍋すぐに満腹味けない  
元氣やね声かけられて背伸びする

奈良市 東 定生

カーナビに誘導される狭い道  
飲み過ぎか景色が違う朝が来る  
ニッポンが縮まるような寒気団  
マスク越しアクリル越しの遠い声  
指紙めてページを捲るタブレット

生駒市 饗庭 風鈴

ゴーギャンとヤシの木陰で昼寝する  
千年万年ヤシの木陰に棲んでいる  
いつかなる生まれ変わってヤシの木に  
花が咲いてもあなたが居ない岸辺  
もういいよがんばらんかてありのまま

生駒市 永田 美美子

啓蟄にコート脱ぎ捨て野良仕事  
ジャンボクジはらはらどきり胸騒ぐ  
冬のジャズ老いの胸にも春の風  
デジタル化きいて忘れてまたきいて  
昼下りつついつい弾む立ち話

和歌山県 三枝 眞智子

ライバルの笑顔見たさに一歩引く  
さよならと言う前に過去振り返る  
少しだけ愛を下さいリフレッシュ  
空は青心も晴れてまず一歩  
やつときた朝眠れぬ夜の長いこと

和歌山市 北原 昭枝

かあさんと呼ぶ声がする遠い耳  
ひらめいたヒントを試す台所  
大皿へ揃う家族に匂を盛る  
泣き笑いしつつ親子にある絆  
まだあったひとつやふたつ老いの役

和歌山市 倉橋 悦子

水際で綱引きをするオミクロン  
コロナ絶滅期待しているのはいのち  
吹き溜り春が溶かして通り抜け  
生きざまをくつきり見せて冬木立  
旅預けつもり貯金で慰める

和歌山市 定松宏枝

宵つ張りされど早起きお姑さま  
逆立ちをしても秀句は浮かばない  
値上りに何を節約ケセラセラ  
巢ごもりの鈍る体にムチを打つ  
この二年急に老けたと見る鏡

和歌山市 西川千鶴

怠惰癖血筋ですのよオホホのホ  
誤配です我が家に億ションのチラシ  
消えるから綺麗なんですレインボー  
貼り終えた障子にギラリニヤンコが目  
しがらみを断てぬ男に明日はない

岩出市 村中悦男

コロナ株隣は急に遠くなり  
詰まつたら怖いと息子餅くれず  
新入児おまもり付けたランドセル  
電話だけ使えるスマホうれしくて  
番地不記戻った便の疲れ顔

鳥取県 下田茂登子

楽しみはないがなんとか生きている  
医者に行くタクシー代もままならぬ  
八十八歳祝ってくれる息子はいい  
百歳は望んでいないでも生きる  
今一度旅に出たいと足に聞く

米子市 川本美津子

今年こそ丸い心で過ごしたい  
ポケットに今年の夢を入れておく  
コロナ禍で冬眠期間また伸びる  
接ぎ木して若返りたい二十代  
あたり前出来ぬ自分の老いを知る

米子市 妹能令位子

枕木のままで生涯終えた母  
膝枕今では猫のお気に入り  
イクメンがポイント稼ぐおむつがえ  
年金日鳥取牛のすきやき日  
二世帯にある隠し味義母の味

松江市 中筋弘充

初恋の人がホームに居るといふ  
まんざらでもないよワクワク八十路坂  
何かあったら医者に言つてと薬剤師  
酒よりも水を飲めよと言う主治医  
反抗したいときもあつたか桃太郎

安来市 原德利

節分はチビリ立春はグビグビ  
神様を怒らせた神社のはしご  
極太の線が越せない拉致被害  
波の誘惑もろともしない防波堤  
復活の狼煙上げても無観客

美作市 岡本余光

慎ましく生きて草木と語る春

生き方のヒントを猫にもらうとは

コロナ禍が話のまくら自粛中

仏壇へ献杯今日のいい話

水ぬるむ年頭の計狂いだす

広島市 田桑恵子

雪しんしんコーヒーカップ替えてみる

美容院出れば風花舞っている

鬼は外鳩にも豆のおすそ分け

エンディングノート途中で放つてる

改ざんがうやむやになる永田町

尾道市 村上和子

翼があると信じてた青春期

過ぎ去ったあの頃が青春だった

憧れた大人になつて悩ましい

失恋を癒やす新たな恋ごころ

昨日の恋へ三下り半を突き付ける

竹原市 土井輝恵

断捨離に夫婦喧嘩がついてくる

畠止め貰い野菜の身になりぬ

八十四張子の虎に見守られ

毎朝の蒲団収めがリハビリで

呆け防止に始めた事が続かない

三次市 伊藤寿子

顔知らぬ柳友浮かべ読みふける

同病の友がやさしい見舞くれ

ロボットになつたみたいな我が体

夜桜が好き初恋を思い出す

さみしくもハラハラと散る桜好き

松山市 郷田みや

片目でもはつきり見えるお月様

福はうち鬼もおいでと豆を撒く

好きなこと言える友にも内緒事

ハートチョコふたつ歪な相似形

若さかな悔しさ飲んでバネにする

今治市 安野かか志

駆け抜けた夢幻の半世紀

在りし日の原風景を呑んだ海

お遍路が接待風呂に溶けてゆく

それらしい初夢もなく夜が白む

群れを出て唯の男として生きる

大洲市 花岡順子

目が覚めて眠れない夜の長いこと

着飾って行くところなしコロナの世

声出して気合いをいれる休みボケ

他人だから深い話を背を向ける

目も耳も経年劣化とは悲し

佐賀県 真島 久美子

押し売りがきて太陽を置いてゆく  
ふるさとの浴槽に浮くカットパン  
決断を掴み損ねてばかりいる  
横顔が冬の大三角になる  
多数決の中でアヒルのふりをする

青森県 月波 与生

ムーへ行くその他大勢引き連れて  
コインランドリーで洗う要介護  
ドラキュラもインプラントにしたらしい  
お手つき三回で少年に戻る  
はいとしか言わない人が泣いている

黒石市 石澤 はる子

吹雪いたり晴れたりまるで今日の僕  
自信過剰デコボコ道に諭される  
全身に経年劣化赤信号  
雪雪雪生きる覚悟を試される  
一服のお茶でリズムを整える

黒石市 北山 まみどり

剣先が溶けて氷柱の涙色  
靴音も軽く乾いている路面  
わくわくと一枚剥がすカレンダー  
店頭に一足早い桜もち  
水音も車の音もにぎやかに

岐阜県 喜多村 正儀

息切れのしない歩幅で登る坂  
気遣いの花一輪があたたかい  
ふる里で探すあの日の焚火あと  
謹言で実直に来て絶滅種  
水澄んで見せる大河の腹の底

豊橋市 小松 くみ子

病院の混雑ぶりがハンパない  
窓口で個人情報しゃべらせる  
体調のアドリブ好きも困ります  
体調のSOSを見逃すな  
ねえねえママ誰にあげるのそのチョコは

豊橋市 西郷 紀美代

反論も面倒になる歳のせい  
気がつかぬ内は言っても埒明かぬ  
えらいことしかかしていた脳回路  
廃屋のお家事情に合わせぬ法  
終活に葬儀メニューの思案中

八幡市 武田 悦寛

割られても再生準備薄氷  
風呂敷で包んだ愚痴がこぼれ落ち  
発車ベル単身赴任手を離す  
頑固さをハンガーに掛け一休み  
傷ついた過去を隠してくれる雪

大阪府 大浦 福子

好きだから素顔は見せぬ化けている

日は昇る今はしっかりと耐える時

しっかりと今日を生きたか胸に問う

六十から私を生きるタガ外し

大阪府 奥野 健一郎

愛嬌で今なら済ます物忘れ

本当の歳を当てたらそれっきり

手で重さはかってレタス買えと妻

好きですとさらりと言った面の皮

大阪府 尾崎 文子

立春にちよつと立ち寄る本屋さん

聞いているかハウスの野菜春の音

寅年の息子やさしい人になり

コロナ死の数字を軽く言わないで

大阪府 田原 康雄

深深と雪の降る日は鍋がいい

毎日のラジオ体操仕事顔

第六波ドラゴンボール皆さがせ

独り愚痴聞いている猫はおおあくび

大阪府 中村 峰子

チューリップ無造作に生け春を待つ

アルバムで楽しい記憶呼び覚ます

ダイエットいつもスカスカ冷蔵庫

マイペース人のペースを狂わせる

大阪府 前川 善之

勉強は幾つなつても遅くない

終末を如何に歩むか話し合い

流産に小さな光見えて来た

泣く子供泣かす親にも情けない

大阪府 松田 聰

孫が来るじいしばあばは落ち着かぬ

菜の花にそよぐ風にも梅香る

オミクロンとの戦いに負けられぬ

値上りの理由わかるが住みづらい

大阪府 宮本 千恵子

デパ地下はしばしコロナを忘れさせ

食リポーターマスク着脱忙しい

知事の眼光日毎鋭くオミクロン

歩夢君目が回ったよ金メダル

堺市 古川 光雄

コロナ居て財布の中味もの静か

この二年路地裏飲屋縁切れた

八十路でもフィットネスでは元氣出し

もう二年外で飲み食いない暮し

池田市 倉本 一弥

はてさてと今日することをメモに書く

これからはまずひと呼吸おき話そ

今日からは妻の小言にゃはいと言お

氣遣いをしてくれるのは犬のもも

泉大津市 助川和美

カラオケに行けぬストレス口喧嘩

お付き合い無駄な出費が繋ぐ仲

集場所違いいらだつバス旅行

乗り換えの寒さ身にしむ朝の駅

泉佐野市 檜葉良子

昨日より十年前を覚えてる

もう一本付けてあげましょ年金日

直球に優しさ混ぜてアドバイス

ポイントのためにしている無駄遣い

吹田市 岩口のぞみ

全て観たメダル争い在宅で

めざめても起き上がらずにストレッチ

筋トレが瓶のフタにも敗れた日

想像を超える努力を想像す

吹田市 西沢司郎

テレビから飛び散る唾に顔背け

捨ててくる出癖のついた靴二足

溜め過ぎたボンと捨ててもいい過去を

もやもやのままです事件が幕下ろす

高槻市 鳥居宏

大雪の予報当地はちらりちら

元気な頃良かった坂の上の家

大刀魚と白子で妻の誕生日

テレビ体操簡単なのに遅れがち

豊中市 松田蟻日路

そのおでき加齢ですねと事も無げ

パンダ人形やつぱり日本製が好き

自肅中馬券は買えず損もせず

リビングは温室ポインセチア俺

寝屋川市 坂本ミヨノ

天の住人 夫に酒を注意する

散歩途中ホット飲んでる祖父母なり

神社参り人生祈り安心だ

誕生日してあげますと散財だ

寝屋川市 長尾千賀

遠い国の恵みが朝食デビューする

ジグゾーパズル愛の形はまだ途中

ノックして老いも結構デリケート

雨ねうんゆつくり午後が過ぎてゆく

羽曳野市 黒木ひとみ

寒空を犬に連れられ散歩する

参拝者迎える巫女の艶姿

豆撒かず巻寿司食べる節分日

予定表中止の文字が並んでる

東大阪市 青木隆一

コロンブス卵ひとつで有名に

爪切りと耳かきだけは上等に

世も末と嘆くかたわら賭けゴルフ

老木の朽ちずに枯れる美しさ



東大阪市

秀 爷

地獄の日思い出しては日々努力  
刺激なき年金暮らしすぐ呆ける  
人生はまさかまさかの繰り返し  
純粹に生きて世の中逆恨み

八尾市 田 邊 浩 三

我が歳が本当なのか首捻る  
コロナより恐ろしいのは妻の風邪  
寅年も家に帰れば虎になる  
豆まくが妻も私も拾うだけ

神戸市 石 川 克 美

地図見ても形わからぬトンガ国  
気にかかる賀状返信なき人よ  
今日もまた外へも出ずに日が沈む  
時代だねキラキラ名前の選手たち

神戸市 米 田 利 恵 子

寒そうに立つわたくしの薄い影  
降参をする大声になる前に  
コーヒータイトムいつもの席が待っていた  
窓際の緑わたしを守るよう

神戸市 櫻 井 崇 史

青空に飛行機雲が線をひく  
友人の副反応に安堵する  
アマタくじ命運分ける線をひく  
おお寒い近いコンビニ遠くなる

神戸市 山 根 弘 華

誤解とけ今日は嬉しい月ながめ  
口だけはまだまだいける卒寿坂  
深よみをしすぎて友と仲たがい  
振袖に未来の夢があふれだす

芦屋市 新 阜 義 明

促され気づくお寺の貼り言葉  
聞いただけ心ホッコリ豚まんは  
軽過ぎる死んで10万家族葬  
誰が決めた朝晩飲む午後紅茶

尼崎市 清 水 久 美 子

カロリーを気にせず食べる腹の虫  
ものぐさにさせる炬燵に首つたけ  
世の憂さを忘れるために早寝する  
高齢で執着して命綱

尼崎市 宗 和 夫

巣籠りも慣れたものと見栄を張る  
ステイホーム行くあてなしのひとり旅  
第六波友の便りも途絶えがち  
オミクロン何するものぞ一人酒

小野市 田 中 辰 夫

七十歳白髪頭のラプソディー  
カレーライス三日続ける老い二人  
コロナ禍のネオンばかりの繁華街  
福引の鐘の音にもコロナ臭

再々の巢ごもり慣れた長い髭  
老化する皮膚にすり込む厚化粧  
痛み止め脱毛兼ねたシツプ薬  
右左我が家知ってる千鳥足

三田市 生田 えい子

揺るぎない父の背中を見て育つ  
まだ夢に出会う事なく雲の上  
まあいいか一人暮しの鍋続々  
家計簿も寒波自粛で悲鳴あげ

三田市 木村 マユミ

大手術三途の川を垣間見た  
手術医の顔を知らずに転院し  
医師泣かせ退院急かす患者です  
弄るくせ一人携帯ゲームする

三田市 辻 開子

第六波拡散止まず怖さ増す  
豆播きでコロナ退散すしを食う  
バーゲンのチラシにつられ無駄を買う  
鶴を折る気分良好風に乗る

三田市 馬場 貴美江

寅年と力の入るトラファン  
あの人もあああの人も認知症  
淋しすぎたったひとりのお正月  
老人ホーム昨日に続くお葬式

宝塚市 太田 としお

神様と心をつなぐ私の手  
能率の上がらぬ介護でも楽し  
わだつみの声ききたくて知覧まで  
予定なし一人静かに昆布茶飲む

丹波篠山市 河南 すみえ

晴れた空畑の草木が呼んでいる  
育ち過ぎ作る楽しみ化け大根  
一人歩き持たねば不安スマホ価値  
熱爛は二人の愚痴を丸くする

丹波篠山市 澤 良子

長考もスタミナ勝負囲碁将棋  
最大の恩人親を忘れがち  
朝ドラが終わり再開家事日課  
人助け臓器提供意思表示

奈良県 室田 行久

子の願い親の想いとすれ違ひ  
スローでも家事は一人前にする  
子はいつか親の生き様みて育ち  
満月はホツとするから大好きだ

奈良市 尾畑 なを江

鳥一羽増えて夫婦の会話増え  
有り余る無為の時間に脳硬化  
雪三尺故郷からの初便り  
初鳴きはホーホーホーと後が無い

生駒市 児玉 規雄

籠り疲れ午後ようやくに始動する  
和歌山市 佐藤 まき

味気ない全て機械のコロナ除け

ぶら下げてライオンに餌やる如く

良く嘔んでテレビの美女もベート舌

和歌山市 鍋嶋 澄子

コーヒーへお洒落に手焼クッキーを

棄かな冷たい風を引き連れて

コロナ禍で鳥さえ来ない侘び住まい

老夫婦時刻む音聴いている

和歌山市 福島 一雄

共稼ぎ二人の夢はマイホーム

健康で食欲あれば憂いなく

弱いから無理に強がり見せたがる

鬼よりも恐い人間多くいる

和歌山市 まつもと もとこ

没句こそ私を変える第一歩

心臓のささくれ治す絆創膏

気まぐれな君が咲かせた姥桜

優しさの嘘なら星になりました

鳥取県 橋谷 静江

亡母の影思い浮かべて生きている

老いた顔鏡見るのが怖いです

テレビ見るだけで疲れている私

夫入院大きな炬燵独り占め

鳥取市 上山 一平

卒寿でも背中押されて万歩計

卒寿きて体内時計ねじを巻く

卒寿でも表情豊か手話の会

卒寿きて昔はなあーと涙ぐむ

鳥取市 大前 安子

趣味の会歳の差なんてないような

ちぎれ雲風のいたずら逆らわず

よく降るねただそれだけの電話鳴る

朝に夕ころろが騒ぐ耳が立つ

鳥取市 山野 すみれ

振り出しにカレーの辛さ丁度良い

つくづくと片付けてみて無駄を知る

スパイスは主張もするが脇役も

口実を探す砂糖の匙加減

倉吉市 伊藤 嘉昭

悩みごとテレビ見てると治りそう

夢ならば覚めて聞きたい亡父の声

抱き上げた妻の軽さに病見る

暖冬が飛んでいったよこの寒さ

倉吉市 堀 かずこ

雪どけの春待ちわびる山を見る

足腰が弱い私に歌がある

苦しんだ分だけ我が身労って

こけるなと医師のことばに涙出る

倉吉市 宮田風露

寒くなると膝が知らせるようになり

講演を聞く耳だんだん遠くなり

講義中大きな欠伸噛み殺す

節分に心の鬼も追い出した

倉吉市 若松由紀子

老眼が進み真実よく見えぬ

老い独り気付かぬままに呆けすすむ

今日終る寝床で明日を考える

祝日に日の丸の旗今は見えず

境港市 中井虎尾

虎コワイだからかわりに猫なでる

バレンタインチョコ買うその日猫は恋

冬ごもり猫が寄り来て添寝する

生かされて地球の隅に俺はいる

松江市 相見柳歩

何も無い所へどうぞ山陰へ

紙の辞書きつといいこと待っている

パソコンの中より紙が安心だ

突然の告白準備五年間

松江市 山根邦代

十六本食を支える歯をみがく

コロナにも節分の豆ぶつきたい

サアサアの掛け声だけは元気なり

電話から友と笑いのシワ作り

津山市 高橋由紀女

春節の猫もひと声ラブコール

退屈がスマホ相手に独り言

真新しいスーツ試練の道が待つ

ここかしこ芽吹く草木を撫でてやる

瀬戸内市 宮宅比佐恵

卒業でリズムがもどるパパとママ

おむかえの児を抱きパパの貌になる

生きてゆく重み卒寿の命だく

交換の部品も切れた卒寿坂

広島市 小畑宣之

築きたる信用ふいに無礼講

機内より妻と眺めた丸い虹

食えるもの何でも食べた戦時中

損しても良い得るものが多ければ

広島市 松尾信彦

推敲に欠かせぬ辞書にぬくめ酒

人生の教育現場繩のれん

杵柄は足踏みミシンマイマスク

懐かしい服着て老いを包み込み

竹原市 若年幸子

微熱あり慌て駆け込む病院へ

ワクチンの副作用です炬燵守

梅鶯私の春を揺り起す

守るものあつてまだまだ若くいる

府中市 岸田 武

節分の鬼は笑つてばかりです  
北京五輪思わぬ穴もありました  
寝返りを何度うつても明けぬ夜  
生真面目を唯一遺産として残す

高知市 三谷 松太郎

自画像を句に詠んでみる昼さがり  
純情を誰もほめてはくれないが  
脳ひとつ丸くなつたり尖つたり  
そもそもを覚えておればまだいける

福岡県 本田 さくら

三ヶ日こわいかわいい寅きたる  
ダラダラとわたしこの頃ダメ女  
こたつて眠りを誘う妖精だ  
雪が降る遠い昔を連れて降る

宮崎県 黒木 栄子

曲がつてもキューリはキューリ安い方  
母さんの心音そつと確かめる  
息切れのところどころにあるベンチ  
悔やんでも過去は過去なり振り向かぬ

沖縄県 禱 モモト

知らずにて見ざる聞かざる気楽です  
丁寧な字を書く人は几帳面  
コンビニの端数支払いポイントで  
降り頻る雨の巢籠り川柳を

沖縄県 宮 すみれ

影を踏みチビとノッポの私いる  
亡き夫会わせたかった孫と婿  
朝つみにどれどれ野菜味見する  
地平線両手に夕日のせてみる

弘前市 小山内 真由美

なんとなくを水色で描く安堵感  
無言という若きナイフも水溶性  
テキストは安心感を積んでいた  
人生論味わうように母の道

富士見市 中島 通則

ワクチンと颯ごつこの変異株  
お互いを杖だと頼る古い二人  
終章にむかし己が掘った穴  
亡き友の誘いのメール消せぬまま

石川県 堀本 のりひろ

政治家に敷居が高い仁王門  
不埒者くぐつてみなよ仁王門  
こわもてにやさしき隠す仁王様  
仁王門大手を振つて無事通過

静岡市 渡辺 芳子

コロバナイ一番心にかける事  
一月がアツと言う間に過ぎ去つた  
九十二歳後悔なしで生きたいな  
オリンピック最後かもと見入つてる

オミクロンピークアウトを待ち望む  
子と過ごす残された日々大切に  
梅の花咲く頃父の命日で  
何よりも自分を好きでいることに

心配の種を噛んだら歯を痛め  
祖母譲り外反母趾と料理好き  
大雪に犬は毛布に包まって  
まっ白な雪が時には牙をむく

横浜市 巖田 かず枝

雪が降る荒ぶる心鎮められ  
達人の料理を学ぶYouTube  
日に一度気晴らし兼ねてコーヒー屋  
ガラケーからスマホに替える大騒ぎ

横浜市 加藤 佳子

受験生桜サイタを待ちかねる  
真夜中の歯痛のつらさ身に浸みる  
初孫を抱く爺さんの嬉しさよ  
寿司好きの孫鯉より玉子焼

京都府 北野 クニオ

（前月分）  
鳥取県 下田 茂登子

（前月分）  
鳥取県 下田 茂登子

私が名前忘れることがあるみたい  
啖呵切る元氣は失せてボケて来た  
もう一度旅に出たいと亡夫に言う

（前月分）  
大阪市 近藤 風羅

きたえんとジョギング汗で風邪をひき  
鼻柱折られて天狗思い知る  
淡口の政治評論聞きあきた  
不器用な親でごめんと子にわびる

（前月分）  
四條畷市 西川 ひろし

心にもバリアフリーを保ちたい  
民へ吹く政治の寒波容赦なく  
寒風へせて心にヒーターを  
雪国も年頭吹雪やり過ぎと

## 川柳「路」700号発刊記念・全国誌上川柳大会

課題と選者（各題2句・字結び可）共選

「総」 安藤 波留選・渡辺 貞勇選

「空」 真島久美子選・安藤 紀楽選

「誠」 金子美知子選・永井 松柏選

「喜」 平田 朝子選・八木せいじ選

投句方法 便箋または原稿用紙一枚に4題まとめて  
記入（各題2句）

締切 4月30日（当日消印有効）

投句料 1000円（切手拝辞）

投句先 〒245-0066 横浜市戸塚区俣野町  
1403-6-108

田中 和男宛

連絡先 TEL/FAX 046-240-6278 八木せいじ

主催 川柳「路」吟社

# 英語 de Senryu ⑫④

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

地球あわただしく揺れる淋しさ 蒼く黄色く

*Im sad  
the Earth swaying hurriedly  
in blue and yellow*

地下センター幻の如く人がゆく

*just like illusion  
people go and come  
in the underground shopping center*

---

*sad* 淋しい    *the Earth* 地球    *sway* 揺れる    *hurriedly* 慌ただしく  
*illusion* 幻影    *people* 人々    *the underground shopping center* 地下街

---

～リバーウィローのため息～ ⑫④ 蕪村編『俳諧玉藻集』に収録された遊女の句(2)

今回も前回に続いて江戸時代の遊女の句を紹介しましょう。『俳諧玉藻集』に纏められた遊女の句は、発句4 4 9句のうち2 0句あります。英訳は「英語ハイクを楽しむ会」所属の小泉裕子氏と試みました。

つま 爪はづれ<sup>きゃしゆ</sup>花香に育つ<sup>かへで</sup>や若楓                      好 女

*treating its tail,  
young maple grows  
faintly and elegantly                      Yoshime*

爪はづれとは、着物の裾のさばき方のことで、転じて身のこなしのことです。若い娘の仕草と、楓の育ち方を掛け合わせていますね。

かきつばたいつ見んことぞ沢ながら                      奥 州

*when in the world  
can I see iris  
in the stream?                      Ohshu*

杜若は、五月人形にも飾られ、いなせな若者の姿をどことなく連想させますね。

# 誹風柳多留一二三篇研究 20

高野 範雄・山田 昭夫

小栗 清吾・細井 龍夫

伊吹 和男

清 博美

付近で、深川七場所の一つとして賑わった」  
〔日国〕。

永代橋を渡った川向こうには新川があり、そこには酒問屋が軒を連ねていた。酒は蔵元から問屋、そして小売店に卸されるが、酒問屋では、主人や番頭あたりが利き酒をして、銘柄毎に取引価格を決める。

蔵中をちび／＼のんて直か出来ル

傍四 8

利き酒は、

新川はよしあし共にかんではき 明二仁 2  
という句があるように、酒そのものを飲み込むようなことはしない。しかし、

き、酒をぐび／＼のんてしかられる

安元 満 2

というような事もあったようで、中には、少しずつでも入ってしまい、それで良い機嫌になって、その勢いで樽下あたりに出かける者もいたのである。

き、酒のきげん一ト切あそぶなり 一二 12

清 賛。

152 仲人へ不断着て来てそつとさせ

高野 嫁が仲人を訪ねる時は、盛装で来るはずなのだが、不断着のままやってきたので、もしや夫婦喧嘩でもしたのではないかと、ぞつとしたのである。

仲人の妻も同しくなために来

宝 12 満 1

仲人も夜更てよへハ虫をやミ

明元 札 5

清 賛。

153 するが町他国のものにはびこられ

高野 「駿河町」は、日本橋通り室町二丁目と三丁目の間の道の両側にあった。やや北寄りに常盤橋がある。ここから富士山がよく見

えるため、駿河の名があるという。この町の大半を占めていたのが、越後屋呉服店であり、駿河町といえは直に越後屋を意味したほどであった（『川柳大辞典』）。

句は、駿河町というから駿河人が幅を利かしているだろうと思うが、そうではなく伊勢出身の越後屋ががんばっているというのである。

するか町外にたつねる人ハなし 安七 仁 1

忝丁に老人の男えちこもの 安六 満 1

清 賛。

154 き、酒のきげんやぐらへこける也

山田 樽は、深川の岡場所があった樽下。「江戸深川富岡八幡の一の鳥居の近くの火の見樽

155 うるしかきの、字一字で日をくらし

山田 漆屋の店頭風景を詠んだもの。生漆は、そのままでは光沢も悪く、乾燥も早いので、



漆屋では用途に応じて、色々と添加物などを加えて加工する。そのため、生漆を桶に入れて、「の」の字を書くようにぐるぐる掻き回す。うるしやハ外のの、字ハ書ぬなり 二四15

尻と手で、字遊女と漆かき 一四—30  
清 贊。

156 おやをさへおん出スやつと座頭いひ

山田 武田信玄は、父信虎を駿河に追放して甲斐の国主となる。また、領内の盲人たちを、敵の間者として悉く殺害したり放逐したと言われる。

主題句はこのことを詠んだもので、被害を受けた座頭たちの恨み節。  
親虎の甲斐なく嗣子に蹴落され 一〇八27

甲州は針やあんまにことをかき 明四信2  
清 贊。

157 哥かるたよろ／＼ものでけいど入れ

山田 警動は「賭場や私娼窟への不意の手入れ」(「広」)のことで、正月の歌かるたの席へ、生酔の年始客が、「不意の手入れ」よろしく、踏み込んで来た。その結果、歌かるたの連中は、警動に会った私娼たちと同じように、

生酔に百人おいてみんなにげ 安六仁1  
生酔ともに百疋り置いてにげ 籠三28  
清 贊。

158 もてるはつなひくはしから乗って行

山田 靡く橋とは、「靡く」と「柳」は縁語だから、これは柳橋の事であろう。  
柳橋人をなびかす所なり 莖二2

その柳橋から猪牙舟に乗って行くのだから、行き先の吉原の遊女は当然客に靡きに靡き、「もてるはず」。  
清 贊。

159 うつけぬお針つつとこいですて

山田 何かを「受け付けぬお針」が、その物をあたかも縫い糸を抜くように「つつとつと抜いて捨て」というのだから、多分付け文あたりであろうが、場面がはっきりしない。  
上方出来の雑俳では、「お針」はしばしば

お寺や商家の裁縫女として出て来る。  
大それた寺の蛸釣るお針置く 小柴垣42  
おく様の目をぬくお針か小夜衣 とはず30  
これだと色々な場面が想定出来るが、川柳では専ら「吉原のお針」を指すことになって

いる。主題句をそのように解すると、楼主か若い者の仕業となるが、果たしてそのような事があつたか。その上、

所化寮の壁にお針の所書 種即六3  
い、仕事おはり旦那の御意に入り

柳書に収録されているものだから、一概に吉原と限定出来ないのではないかとも思われる。そこで礎稿としては、寺の坊主どもが、寺お針に付け文をした場面としておく。

諸賢のご教示を得たい。  
小栗 「抜いで捨て」を物を物理的に捨てるのではなく、単に拒絶の意にとれば(無言で糸をこきながら無視する)、付け文に限定せずとも、一般的な依頼事でもいのように思える。ただ、その内容がわからず、何が面白いかわからない。お針の行動を観察しただけの句か。

細井 口説きを無視して黙々と針仕事をするように感じますが……。  
口説くのは太鼓持ちかも知れません。また、元気のいい若い者かも。

高野 小栗説の「付け文に限定せずとも」に 贊。

# 愛染帖

## 新家 完司選

(投句267名)

大阪市 平井美智子  
二割ほど嫌いな人もいる此の世

(評)半分は味方、半分は敵だと言われる此の世で、苦手が二割とはマシな方だろう。まあ、それ以上増えないように努力したいが……。

弘前市 福土 慕情  
生きるつてお金の掛かるものですね

(評)先ず衣食住。加えて教育、医療、老後の資金等々。人間ひとり生きて行くのに掛かる経費は2億円以上とのこと。大変だ。

高槻市 島田千鶴子  
捨てようか迷う洗濯してる服

(評)もうヨレヨレになってしまったし、捨て時かもしれない。しかし、せつかく洗濯しているのだから、一日だけ着てみるか？

境港市 藤原 久直  
またやったメガネのままで顔洗う

(評)眼鏡を上げて「メガネメガネ」と探しているのはうっかりミスだが、メガネのままの洗顔はメガネと顔が合体しているのだ。

今治市 永井 松栢  
ヒトゲノムに好戦的と書いてある

(評)ヒト科の設計図と言われるヒトゲノム。そうか、人間がスポーツや博打に興じ、戦争に突入するのは遺伝子の所為だったのか。

岡山市 永見 心咲  
恵方巻終始無言のハツゲーム

(評)節分に恵方を向いて、願い事を思い浮かべて食べると願いが叶うという恵方巻。だが「無言で……」という条件が鬱陶しい。

米子市 妹能令位子  
悪女にはなれないままで今老女

(評)若さと美貌を武器に、男を騙して貢がせて、等と甘い夢を見ていたが……。ふと気がつけば男たちも振り向いてくれぬ歳である。

黒石市 石澤はる子  
聴くつもりだけだったのにまた叱咤

(評)事の成り行きの説明と弁解を聴くだけで「決して怒るまい」と思っていたのだが……。

宝塚市 丸山 孔一  
欄干にカマキリぼつん朝日受け

(評)全身に朝日を受けて身じろぎもせぬカマキリ。さて、何を考えているのだろうか。この世には人智の及ばぬこと多々あり。

大阪市 江島谷勝弘  
デポチンがだんだん広くなってきた

(評)デポチンは「おでこ」の関西弁で、眉

から髪の生え際まで。だが、だんだんに広がって、今や頭のとっぺんまでデポチン！

朝霞市 前田 洋子  
猫通院ねらったように雪が降る

奈良市 加藤江里子  
健啖家猫も夫もわたくしも

弘前市 小山内真由美  
おかえりと背伸びの猫はほほえんで

神戸市 富永 恭子  
めっちゃ好き超かわいいと猫のこと

奈良県 小畑なを江  
猫だけで話題がふえてたのもしい

枚方市 栃尾 奏子  
縁側も春 吾輩も猫になる

札幌市 三浦 強一  
親ガチャと言うなよ子ガチャだった

東京都 川本真理子  
伸びしろが減って見えてきた実寸

土佐清水市 辻内 次根  
散髪をしましょう生きています限り

松山市 柳田かおる  
切り抜いたコラムと朝のコーヒート

鳥取市 副井ゆたか  
傘寿までしぶとく生きる柑の虫

西宮市 緒方美津子  
夫婦でも作り笑いは疲れます

河内長野市 村上 直樹  
もう面倒は見ないと妻の捨て台詞

奈良県 安福 和夫  
チャリンコで転び通院ひた隠し

兵庫県 吉道あかね  
病院食完食しても太らない

奈良県 廣田 和織  
寝屋川市  
断捨離ができずに増えるメモ用紙

箕面市 出口セツ子  
服よりも断捨離したい人が居る

三原市 鴨田 昭紀  
真ん中の椅子で狡さを身に付ける

沖繩県 宮 すみれ  
風揚げにすれすれ飛んだオスブレイ

府中市 岸田 武  
物価高ネギのしっぽも使い切る

豊橋市 八甲田さゆり  
年頭に大きなことを言いすぎた

川西市 山口 不動  
見において食べにおいてと呼ぶテレビ

佐賀県 真島久美子  
ポジティブで心軽いが身は重い

豊前市 藤井 智史  
エイヤツと日本大地図買いました

箕面市 藤井 智史  
ガレージの客の車は鼻が出る

豊前市 藤井 智史  
裏道で前前彼とすれ違ふ

豊前市 藤井 智史  
食パンの六枚切りのような恋

豊前市 藤井 智史  
口じゃなく頭で食べるダイエツト

西宮市 福島 弘子  
今日からは誤嚥防止のパビブペボ

弘前市 高瀬 霜石  
家出したことにはしておくなくしもの

岡山市 大石 洋子  
婆さんと呼ばれてからは遠慮せず

明石市 瀬島流れ星  
踏んだ人次第で痛さ依怙蟲風

和歌山市 柏原 夕胡  
芋虫のためにパセリを植えました

豊中市 水野 黒兔  
アヒージョヤカルパッチョより冷や奴

尾道市 村上 和子  
役に立つがもう重すぎる広辞苑

大阪市 平賀 国和  
無理にでも笑い寿命を延ばそうか

大阪市 平賀 国和  
いつの間にか中流からこぼれ落ち

大阪市 平賀 国和  
免許更新認知テストが待っている

豊前市 居谷真理子  
ビッグボス シーズン前は一人勝ち

青森県 月波 与生  
あぶく銭早く使えとせきたてる

青森県 月波 与生  
スマホだけで間に合うような知識欲

大阪府 谷口 義  
三振ふり逃げから明日で還暦

大阪府 谷口 義  
むつつりスケベ集い日本を愛う

黒石市 北山まみどり  
雪かきと相性がいい万歩計

大阪市 小野 雅美  
好き嫌いなから困る血糖値

大阪市 東 敏郎  
ブルーライト昔ヨコハマ今スマホ

河内長野市 山岡富美子  
毎日触れるのに洗えないスマホ

神戸市 奥澤洋次郎  
神様に命乞いする歳となる

神戸市 奥澤洋次郎  
欲失くしすとんと落ちた駆動力

大阪市 岡田 恵子  
死に様をさがしていけとある余生

尼崎市 山田 耕治  
えびせんの袋からつぼ倦怠期

大阪市 内田志津子  
気分れに体操をする朝八時

富土見市 中島 道則  
拷問のような形でストレッチ

交野市 山野 双葉  
徳儀に救われ生きてきた命

松江市 石橋 芳山  
空っぽの心に生けるフリージア

大阪市 島田 明美  
押し入れて広げるしわくちやなメンツ

大阪府 島田 明美  
アポカドの食べ時 恋の終わり時

越谷市 久保田千代  
干し草の匂いに遠い日々がある

石川県 堀本のひろ  
門くぐり十七音に四苦八苦

貝塚市 石田ひろ子  
人間が消えないように句を作る

神戸市 榎田 次郎  
伝えたい想を集めて句を作る

岡山県 藤沢 照代  
生き恥を川柳でときどき洗う

津山市 高橋由紀女  
いざ書いてみると一字に行き詰まり

箕面市 広島 巴子  
五七五考えすぎて偏頭痛

岡山市 丹下 凱夫  
川柳のおかげ自粛も忙しくない

美作市 岡本 余光  
入魂の句を読み直し気が抜ける

大阪市 井丸 昌紀  
酔い醒めて川柳浮かばなくなつた

藤井寺市 太田扶美代  
それほどはわろてないのに笑い皺

藤井寺市 鈴木いさお  
八十年も生きてきましたこの顔で

枚方市 谷 英也  
八十路でもジャズ鑑賞に沁みる脳

米子市 伊塚美恵子  
プロポーズされた記憶も薄れゆく

三田市 北野 哲男  
力瘤落ちて毒舌冴えてくる

横浜市 川島 良子  
「ポツタクリ男爵」冬五輪にも出現

唐津市 仁部 四郎  
無駄話それでいいのだ見舞客

松山市 郷田 みや  
不揃いがいい焼きたてのロールパン

大阪市 石田 孝純  
うつらうつら野山に冬のノースайд

鳥取市 奥田 由美  
春を待つ夫に小鉢のフキノトウ

大阪市 高杉 力  
空気入れ借ります春を満タンに

八王子市 川名 洋子  
義理チョコも予定がないがチョコを買う

鳥取市 前田 楓花  
持て余すコストコチョコの凄じ量

鳥取市 田賀八千代  
チョコ渡す孫が本命義理夫

池田市 太田 省三  
名將は送りパントの価値を知る

米子市 池田 美穂  
地震火事へそくり場所を思案中

名古屋市 山本三樹夫  
激論をお茶一服が和ませる

大阪市 宇都満知子  
目と口はいつも一緒に笑いだす

広島市 岸本 清  
老友の耳遠くなり念を押す

鳥取市 岸本 宏章  
主語抜きの会話で暮らす老いふたり

橋本市 石田 隆彦  
歳とつて夫婦の会話ダブルボケ

尼崎市 清水久美子  
色気より食い気を通す冬籠もり

神戸市 敏森 廣光  
金持ちはケチ貧乏人は見栄っぱり

三田市 上田ひとみ  
お散歩は楽しいことを探すため

高槻市 片山かずお  
金になる話たいがい損をする

奈良県 山根 弘子  
玉手箱あけて老女になりました

池田市 上山 堅坊  
亡き妻が思わぬ時に顔を出す

奈良市 大久保眞澄  
キヤッシュユレス罪悪感のない浪費

羽曳野市 吉村久仁雄  
絞り染めが得意の母に育てられ

鳥取市 大前 安子  
私に裏と表があるらしい

小野市 田中 辰夫  
柱のキズ子供と孫の背くらべ

沖繩県 禰 モモト  
一人では生きられぬ世に支えられ

東大阪市 秀 峯  
教科書の酸素不足で不登校

昭和なら今年九十七年度  
堺市 村上 玄也

何処へでも出向く恋猫うらやまし  
大阪府 高木 道子

初めての補聴器街に音溢れ  
尼崎市 宗 和夫

木枯らしにせかせか食べる焼きうどん  
鳥取県 門村 幸子

回遊のマグロと同じ止まりや死ぬ  
奈良県 中堀 優

ぼけながら上手に生きる知恵さがす  
大阪府 笠嶋 惠美

ありがとうごめんなさいが世を回す  
大阪府 磯島福貴子

老獺な妻の口撃攻めあくむ  
鳥取市 山下 凱柳

負けたって恥かいたって地の自分  
米子市 後藤 宏之

写真整理夫婦の歴史ラッピング  
河内長野市 穂口 正子

紅梅の香り遮る杉花粉  
豊中市 松田蟻日路

親機子機なくて気楽なスマートフォン  
和歌山市 まつもとともこ

革命歌ふつと小唄にする時雨  
丹波篠山市 酒井 健二

診察券ふえてトンネルまだ続く  
鳥取市 倉益 一瑠

二十メーター先まで来てるオミクロン  
寝屋川市 平松かすみ

笛太鼓自粛今年で三年目  
横浜市 菊池 政勝

句会なく飲み会も無く自粛中  
大阪市 坂 裕之

行かなくて済んだコロナ禍での葬儀  
大山市 金子美千代

慣れっこになった自粛で見える五輪  
岡山県 田中 恵

家籠もりオリンピックが守りをする  
松江市 梅瀬みちを

犯罪者マスクはちゃんとつけている  
防府市 坂本 加代

おしゃべりもマスク付けたらおとなしい  
唐津市 山口 高明

会釈したマスクの美女は誰だった  
堺市 今井万紗子

何時まで続くビチャビチャマスク孫三歳  
大阪市 津村志華子

コロナから逃げてひと日を梅の郷  
熊本市 杉野 羅天

失ったコロナの日をどう生かす  
池田市 奥園 敏昭

行き場なし僕と一緒にの救急車  
香芝市 大内 朝子

コロナ禍にめげずしぶとく生きてやる  
香芝市 大内 朝子

おめでとう孤食独酌誕生日  
米子市 竹村紀の治

熱燗をコップ半分飲む至福  
豊中市 松尾美智代

栄養が自然にとれる酒の膳  
堺市 奥 時雄

蟹よりも鯛の刺身にいいお酒  
鳥取市 岸本 孝子

あと一センチ揺れる新酒に丸い月  
松山市 大内せつ子

酒飲みの楊枝の先に味がある  
大阪府 今村 和男

ぐい呑みもグラスもふたつあれば良い  
鳥取市 山野すみれ

同病の相部屋酒量自慢する  
男鹿市 伊藤のぶよし

酒一献こころ解ける初対面  
豊中市 齋藤奈津子

お互いのよいしよはしらない飲み仲間  
堺市 澤井 敏治

もうあかんあかんと言って三軒目  
神戸市 山崎 武彦

酒にさえ溺れなければ家二軒  
豊中市 上出 修

百薬の長を呑むなと医者言う  
三田市 堀 正和

卒酒するなと一升瓶に頼まれる  
安来市 原 徳利

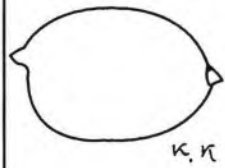
共選欄

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句323名)



「抱く」 楽原道夫選

一升瓶抱いて楽しい友がくる  
 孵化しない卵抱いてる母性愛  
 お陽さまに背なを抱かれてすするお茶  
 命抱くはんなり照らす道がある  
 よく喋るロボット犬を抱きしめる  
 崩れていく母の記憶を抱き寄せる  
 母を抱く冬の日差しの柔らかさ  
 夢のなか母に抱かれた温かった  
 ふと抱いた疑問素直にしてくれず  
 胸に抱く本音が怒り帯びてくる  
 諍った後の心を抱きしめる  
 腐葉土になって明日の命抱く  
 育休の市長ちゃんうまく抱き  
 わたくしの守護神である腹時計  
 新刊書抱いて部屋から出てこない

米子市 竹村紀の治  
 富山市 伴 よしお  
 岡山県 田中 恵  
 大阪市 山本加お里  
 米子市 中原 章子  
 堺市 今井万紗子  
 神戸市 米田利恵子  
 奈良県 谷川 憲  
 奈良市 山本 昌代  
 宮崎県 恵利 菊江  
 神戸市 村松 久江  
 寝屋川市 伊達 郁夫  
 唐津市 仁部 四郎  
 弘前市 高瀬 霜石  
 芦屋市 上野多恵子

「抱く」 久保田千代選

抱きしめてあげるあなたが笑うまで  
 一升瓶抱いて楽しい友がくる  
 抱いてみて叩いてスイカ買いました  
 抱くように持つて帰った松葉ガニ  
 義理チョコに少し希望を抱いている  
 老いを抱く杖もサブリも道連れに  
 胸の底君の温みは消えぬまま  
 ライセンスいっぱい抱いてまだ無職  
 抱きしめているものいつか消えていく  
 一錠を後生大事に抱くばかり  
 埋み火を抱いてはるかな人想う  
 だしぬけに抱かれてからの恋でした  
 神木を抱いて命をチャージする  
 わたくしの守護神である腹時計  
 寝たつきりの母が抱いていた時間

大阪市 小野 雅美  
 米子市 竹村紀の治  
 寝屋川市 平松かずみ  
 大阪市 原田すみ子  
 貝塚市 吉道あかね  
 大阪市 宇都満知子  
 神戸市 みぎわはな  
 三田市 堀 正和  
 松江市 相見 柳歩  
 佐賀県 真島久美子  
 松江市 藤井 寿代  
 大阪市 若本 安代  
 広島市 岸本 清  
 弘前市 高瀬 霜石  
 藤井寺市 太田扶美代

バラ抱いてくるから期待してしまう ふとこらにすっぱりはまる猫を抱く とりあえずその嘘泣きを抱いてやる どんな夢抱いても罪は問われない 抱き上げた母が軽あるく寄りかかる 子にも孫にも話さぬ秘密一つ抱く だれにでも抱かれる猫に嫉妬する フランスパン抱いて気分はパリジェンヌ 火を抱いてから熱くなるカレンダー 歳ひとつとると抱くものひとつ減る 問題を抱いて冷たく飛ぶ火花 コロナ禍を蓋するように雪が降る 雪に抱かれて静寂につつまれる 朝霧に抱かれ眠るふるさとよ 芽吹くものそつと抱いて山目覚む ふるさとの再起抱いている案山子 おばちゃんの鮎が抱いている平和論 悪人も時どき抱いているわたし 抱きしめるわたしの中にあるグレー 錆びた鍵の秘密を抱いて生きのびる 無理難題抱いてしつこく生きてます 夢を抱く昨日の夢にけじめつけ	広島市 防府市 松山市 奈良県 羽曳野市 羽曳野市 堺市 大阪市 山口市 安来市 松江市 池田市 鳥取県 広島市 大阪府 三原市 神戸市 海南市 松山市 大阪市 三田市 東大阪市	羽城 裕子 坂本 加代 大内せつ子 安福 和夫 宇都宮ちづる 徳山みつこ 柿花 和夫 田中ゆみ子 中前 幸子 原 徳利 石橋 芳山 太田 省三 斉尾くにこ 田桑 恵子 高木 道子 笹重 耕三 上田 和宏 小谷 小雪 柳田かおる 岡田 恵子 九村 義徳 西村 哲夫
--	--	--

バイク抱きビーナスライン鳥になる 朝陽浴び望みを抱く日は弾む 温度差のある愛を抱き夫婦です 心中に抱く私の二面性 コロナ後のハグを夢みるバスポート 感染の恐怖を抱いて今日も無事 抱いていた夢へ強制送還の罫 桜抱く夢駆け巡る志望校 次世代へ夢抱かせた金メダル アルバムへ大志抱いた頃の僕 哲学を抱いて群れから遠くいる 失意の底で抱きしめている影法師 焰抱き年を跨いで熱下げる 無機質な街で乾いた飢えを抱く 夢ばかり抱いて現実から逸れる ぼつねんと膝を抱える青い鬱 違和感を抱きつ流れに背かれず 歳ひとつとると抱くものひとつ減る 子が巣立ち今は仔猫を抱く暮らし 掌の恋抱きしめてたそがれる 志抱くも茨の道続く 反骨を抱き続けて黄昏れる	大阪市 豊中市 奈良県 大山市 豊中市 高槻市 神戸市 生駒市 横濱市 宇都部市 大阪市 大阪市 岡山市 高槻市 三原市 堺市 神戸市 安来市 高槻市 桜井市 東大阪市 松山市	田原 康雄 藤井 則彦 渡辺 富子 金子美千代 きとうこみつ 松岡 篤 奥澤洋次郎 飛水ふりこ 川島 良子 平田 実男 高杉 力 森 廣子 工藤千代子 富田 保子 鴨田 昭紀 坂上 淳司 山口 光久 原 徳利 片山かずお 安土 理恵 佐々木満作 宮尾みのり
--	---	---

風と語り風に抱かれているすずき	池田市	上山	堅坊
ハグなんて言うから軽くなった「抱く」	奈良市	大久保眞澄	
人前でハグできるほどに進化する	京都市	清水	英旺
ハグの前一度体温確かめる	堺市	内藤	憲彦
老人もハグハイタッチ盛り上がる	奈良市	宇賀	史郎
孫が来てヨイコラシヨツとハグをする	川西市	山口	不動
ごほうびはしっかりと褒めてハグをする	鳥取県	山下	節子
温もりをずつと感じていたいハグ	枚方市	藤田	武人
ハグをするため両腕は空けてある	弘前市	福士	慕情
大空をハグするように深呼吸	富士見市	中島	通則
バックハグのシーンみて餅焼いている	大阪市	大沢のり子	
背中からおてんとさまにハグされる	大阪市	島田	明美
抱き枕アナタも草を食べる人	佐賀県	真島久美子	
抱き枕おまえだけだと添い寝する	和歌山市	山田	厚江
抱き枕今日のわたしを畳むとき	和歌山市	倉橋	悦子
テディベア抱いた娘をママが抱く	和歌山市	まつもととこ	
ぬいぐるみ抱いてやさしく児は語る	鳥取市	山野すみれ	
寂しくてピンクのブタの抱き枕	神戸市	城戸	誓子
背丈より大きいクマに抱かれてる	東京都	川本真理子	
抱き合つて暖をとつてるぬいぐるみ	大阪市	今村	和男
抱き人形離さぬ人とエレベーター	大阪市	高杉	千歩
赤ん坊まあるくまるく抱かれてる	八幡市	武田	悦寛

ふと抱いた疑問素直にしてくれず	奈良市	山本	昌代
赤ん坊抱いてほどけてゆく心	鳥取県	門村	幸子
志抱く子見守るしか出来ぬ	西宮市	福島	弘子
命の火抱いて明日へ三分粥	河内長野市	坂野	澄子
まだ抱いていたい叶わぬ夢がある	東京都	川本真理子	
青春に抱いた夢は露と消え	河内長野市	黒岩	靖博
俺だつて夢を抱いた少年期	川西市	大坪	一徳
夢を抱き故郷を捨てる無人駅	弘前市	福士	慕情
器には過ぎた野望を抱いている	大阪市	樋口	眞
ふるさとの再起抱いている案山子	三原市	笹重	耕三
芽吹くものそつと抱いて山目覚む	大阪府	高木	道子
老いたばくを抱くふる里の山や森	豊中市	水野	黒兔
大地抱くこの森林が命綱	札幌市	小澤	淳
頂きで天空からの風を抱く	香芝市	山下じゅん子	
彼岸会の弥陀に抱かれた夢を見る	吹田市	太田	昭
たおたおと嵐を抱いていた夜半	松江市	石橋	芳山
背中からおてんとさまにハグされる	大阪市	島田	明美
友人としてのハグです誤解なく	橿原市	居谷真理子	
温もりを抱いた記憶が温かい	富田林市	中村	恵
まだ夢を抱いているのか無精卵	岡山市	丹下	凱夫
抱いた子にだかれる夢の四コマ目	岐阜県	喜多村正儀	
抱卵のかたちで過去を抱いている	今治市	永井	松柏



コート着る母に抱かれるように着る	宮崎県	黒木	栄子
抱く前にひとつの謎を解いておく	神戸市	青木	公輔
もう逃がしはしない春をぎゅっと抱く	笠岡市	藤井	智史
抱きしめて下さい別れの日が近い	桜井市	安土	理恵
抱きしめてあげるあなたが笑うまで	大阪市	小野	雅美
太陽は火傷するから月を抱く	倉吉市	牧野	芳光
抱えてる手の相しかと陽に晒す	鳥取市	吉田孔美子	
海だった頃には何もかも抱けた	富田林市	中村	恵
再会へボトルは海を抱きながら	枚方市	栃尾	奏子
石地蔵わたしも抱いているマグマ	黒石市	石澤はる子	
クリムトの抱擁の絵に目が泳ぐ	尼崎市	藤井	宏造
抱くように持って帰った松葉ガニ	大阪市	原田すみ子	
焼き芋はまず抱いてからいただきます	岡山市	大石	洋子
雪だるま秘密を抱いたまま溶ける	岐阜県	喜多村正儀	
抱卵のかたちで過去を抱いている	今治市	永井	松柏
抱き締めた形に残っている昨日	土佐清水市	辻内	次根
電柱が冬に抱かれ立ち尽くす	豊中市	松田蟻日路	
泡少し抱いて緩衝材にする	西予市	黒田	茂代

秀句

ギョツと抱く一気に飛んで行くように  
 万緑のパイプオルガン空を抱く  
 丸ごとの白菜抱いて踏ん張りぬ

黒石市 北山まみどり  
 箕面市 酒井 紀華  
 和歌山市 北原 昭枝

泣き止んだ瞳は虹を抱いている	枚方市	栃尾	奏子
少年のように一途な夢を抱く	藤井寺市	鈴木いさお	
円周を逸れて児が抱く夢無限	伊丹市	延寿庵野鶴	
孫を抱く温もりへ酔う まだ生きる	三次市	伊藤 寿子	
赤子抱く娘の乳房母になる	三田市	尾崎 一子	
太陽が月を抱いたら金の輪に	大阪市	川端 一步	
聖書持ち聖戦という銃を抱く	神戸市	山崎 武彦	
新芽抱く枯れた葉っぱにある役目	西宮市	緒方美津子	
明日開く蕾はパワー抱いている	大阪市	米澤 俣子	
岩を抱く根つ子があつて葉が繁る	鳥取市	池澤 大鯨	
腐葉土になつて明日の命抱く	寝屋川市	伊達 郁夫	
幾星霜青い大志は抱いたまま	河内長野市	村上 直樹	
逆縁を抱いて涙がかわかない	松山市	栗田 忠士	
冬晴れの空に抱かれて二月の計 <small>クエステション</small>	大阪市	平井美智子	
? を抱いて猜疑の芽が育つ	枚方市	藤村 亜成	
泡少し抱いて緩衝剤にする	西予市	黒田 茂代	
もう逃がしはしない春をぎゅっと抱く	笹岡市	藤井 智史	
花火抱くとうに音さえしないのに	岡山市	永見 心咲	

秀句

抱き癖のついた男を飼育中  
 罪百態女は業を抱いて生き  
 残像を抱いてあの日のカフエの椅子

芦屋市 上野多恵子  
 鳥取市 倉益 一瑤  
 鳥取県 斉尾くにこ

「耳寄り」

(投句 230名)

清水英旺選



耳寄りな知らせが着払いで届く

鎌井寺市 鈴木いさお

耳寄りな話も後は自己責任

大阪市 横山 里子

里の母達者と風の知らせあり

明石市 糺谷 和郎

耳よりな話を補聴器が逃す

香南市 桑原 孝雄

顔のない人に混じって聞いている

佐賀県 真島久美子

耳寄りな話を運ぶ春の風

富田林市 山野 寿之

補聴器に数多聞こえるいい話

豊中市 齋藤奈津子

耳寄りな話春風連れてくる

西予市 黒田 茂代

蛇の道はへび裏口は開けてある

松山市 宮尾みのり

補聴器の小耳に挟むいい話

大阪市 今村 和男

耳寄りな噂を乗せて甘い風

河内長野市 中島 一彌

耳寄りな話ワインワインのお誘い

熊本市 杉野 羅天

耳寄りな話と言われ後ずさり

神戸市 富永 恭子

耳寄りな話に付いて来る尾鱈

三田市 多田 雅尚

オレオレの美味しい話感う古い

唐津市 坂本 蜂朗

幸せの種はたくさん発芽中

三田市 上田ひとみ

年寄りに「得」は魔の声鬼の声

寝屋川市 川本 信子

耳寄りな話に縁のない暮らし

東京都 川本真理子

耳よりな話どこかに畏がある

豊中市 水野 黒兔

耳寄りの話遠くの巣ごもり中

神戸市 近藤 勝正

耳寄りな話耳にチャックは出来ません

香芝市 山下じゅん子

耳よりな話色めく捜査陣

豊中市 上出 修

耳寄りな噂話で弾むお茶

三田市 北野 哲男

耳寄りな話などない自粛中

松原市 森松まつお

耳寄りな儲け話がにじり寄る

池田市 上山 堅坊

耳寄りな話もなく寒雀

岡山市 丹下 凱夫

耳よりな話楽しむ地獄耳

奈良市 米田 恭昌

耳寄りな話仕入れる更衣室

広島市 羽城 裕子

耳寄りな事も興らぬ八十路です

枚方市 谷 英也

耳寄りの話が好きな盗聴器

三田市 村田 博

うまい話にとびついて墓穴掘る

生駒市 饗庭 風鈴

耳寄りな話笑顔でやって来る

羽曳野市 吉村久仁雄

佳句

耳寄りな話の好きな猪口徳利

堺市 澤井 敏治

耳よりの話は半分聞いておく

鳥取県 本庄ひろし

幸せの種播く話なら聞こう

松山市 栗田 忠士

耳寄りな言葉も毒もある

札幌市 三浦 強一

耳寄りな情報発信源不明

枚方市 藤村 亜成

人

旨すぎる話の悲しすぎる落ち

今治市 永井 松柏

地

犬連れて良い事ないか町散歩

倉吉市 大羽 雄大

天

耳よりな話 補聴器つけ直す

弘前市 福士 慕情

軸

耳よりな話の正体霧の中

「せかせか」

(投句 225名)

原 田 すみ子 選



秒針は進むせかせかかなどしない  
 年金の隅でせかせか老いてゆく  
 せかせかと生きてせかせか息をする  
 冬蜂はもうせかせかとしていない  
 青信号まだか何度も足を出す  
 せかせかと生きてぼっくり逝きはつた  
 せかせかと塾をハシゴの受験生  
 せかせかと終着駅へ向かってた  
 九度五分です早く診てもらえませんか  
 自転車操業でもまだぼくは倒れない  
 せかせかと打つほど釘はへそ曲げる  
 オミクロン株に攻めたてられて落ち着かぬ  
 日曜になると張り切る父でした  
 せかせかで見ているなかつた子の悩み  
 A T Mに叱られながら振り出しに  
 人間について行けないナマケモノ  
 青信号傘寿が渡る急ぎ足  
 時代の足せかせかすぎではないか  
 せかせかと土産ばかりを買い旅行  
 早足で帰る背広はうそつきね

大阪市 小野 雅美  
 高槻市 富田 保子  
 鳥取県 門村 幸子  
 海南市 小谷 小雪  
 明石市 瀬島流れ星  
 富田林市 山野 寿之  
 大阪市 奥村 五月  
 藤井寺市 太田扶美代  
 奈良市 大久保眞澄  
 弘前市 高瀬 霜石  
 明石市 穂谷 和郎  
 西宮市 緒方美津子  
 河内長野市 森田 旅人  
 大阪市 平賀 国和  
 大阪市 大沢のり子  
 大阪市 吉村久仁雄  
 羽曳野市 樋口 眞  
 大阪市 樋口 眞  
 大阪市 古今堂蕉子  
 大阪市 平井美智子  
 松山市 大内せつ子

せかせかとこれも私のマイペース  
 結論を早く聞きたいそのお願  
 せかせかと歩幅を煽る黄信号  
 せかせかとポストへ今日も元氣です  
 今か今かせかせかしては呼名待つ  
 せかせかと今日もエプロン縦結び  
 せかせかと帰っていったかぐや姫  
 息つきもせぜせかせか生きて八十路坂  
 若かつた子等とせかせか走られてた  
 三歩後歩くつもりがいつも前  
 せかせかと句会回れる日に感謝  
 せかせかと喋りまくって友帰る

住 句  
 小走りで帰っていった雪女  
 段取りが良すぎて泣けぬ家族葬  
 せかせかと拭くワイパーに来る噂  
 私を急ぎ立てている「ねばならぬ」  
 不安感せかせか動き遠ざける

人  
 蟻たちの憧れだったキリギリス  
 せかせかと生きて幸せ積み残す

天  
 あわてるな水が澄んだら見えてくる

軸  
 仲間居ぬ家はすぐ出る論吉さん

土佐清水市 辻内 次根  
 三田市 上田ひとみ  
 富田林市 中村 恵  
 羽曳野市 徳山みつこ  
 鳥取市 山下 凱柳  
 大阪府 高木 道子  
 松山市 中筋 弘充  
 大阪市 磯島福貴子  
 堺市 今井万紗子  
 加西市 山端なつみ  
 池田市 上山 堅坊  
 神戸市 山口 光久  
 佐賀県 真島久美子  
 橿原市 居谷真理子  
 岐阜県 喜多村正儀  
 神戸市 富永 恭子  
 羽曳野市 藤原 大子  
 大阪市 高杉 力  
 大阪市 森 廣子  
 倉吉市 牧野 芳光

# 初歩教室

## 題 — スピード

### 西出 楓 楽

そうです、川柳は皆平等で仲間なのです。この初歩教室の皆さんは恐れることなく、どうぞ思いの丈を表現して下さい。

#### 【添削をしたい句】

●は原句 ○は添削句

● 出合いから一年後には娘は母に 誓子

近年は赤ちゃんが欲しくても出来ぬ夫婦

端からわたくし事で申し訳ありません。

私は川柳を始めて九十四年になりました。もっと長い期間続けておられる方も沢山居られるでしょうし、キャリアは全く自慢になりません。それは、川柳の場合、何点獲得を続けたから、何級になり作品がそれによって有利に評価を受ける、ということとはないからです。例えば川柳大会では、全員が同じ条件で投句して選者の評価を受けるのです。

従って初心者が「秀句」を獲得、ベテランが「全没」ということが大いに有りうるのです。いや、初心者の方が発想が新鮮であったり、怖いものなしの大胆な表現で、参加者を唸らせることが、往々にして起こるのです。私など何度経験をしたことでしょう。

以前からこういう言葉は差別語に属し、メディアは特に神経質になっています。少なくとも言われた本人が、不愉快になる言葉は極力避けて下さい。

○時は過ぎ子役が今じゃ老母役

○時は過ぎ子役は今じゃ老け役に

●あつという間に着きました極楽に 風 鈴

府も不妊治療を保険適用にする対策を検討していますが、なかなか思うに任せないと聞きます。娘さんは一年後にお母さんになられたので、めでたいことです。けれど「スピード」と言う題、最近の風潮からすると、できちゃった婚が大流行。いやいや、その言い方は赤ちゃんに失礼になるので、おめでた婚と言うとか。

○出合いから半年過ぎず娘は母に

●時は過ぎ子役が今じゃババア役 (團) 良子  
この句を見た本人は、たとえ事実であっても、どんな気持ちがあるでしょう。かくいう私も押しも押されぬ老妻ですが、ババアと言われると頭にくると思います。

間は生を受けたら誰も皆必ず死ぬのがルールです。さてこの句ですが、課題吟(出された題)は、自由な想像での作句が許されます。例えば王様になったり、絶世の美女になったりして楽しめばいいのです。作者は、極楽に着いた報告をしています。これまで、極楽へ行って帰ってきた人は、誰ひとりありませんから実に楽しい句に出来ています。このままで添削しなくてもいいの

ですが、参考のために雰囲気を変えてみました。

○あつという間に着けたらいいな極楽に  
これで皆が憧れるぼっくり死の句になりました。

●世の移りスピード早く待ったなし ひとみ  
一読明快、ひとみさんは世の移りの速さを嘆いておられます。課題が出た場合、念のため辞書を確かめる習慣をつけられることを、お勧めします。「スピード」はやさ、速力、速度、はやいこと（広辞苑）このようにスピードには、早い意味があります。従ってこの句の場合、スピード早く、は言葉が重なるのです。作者が驚かれることに全く同感です。特にここ近年のデジタル機器の発展には、ただただ手をこまねているばかりです。

○世の移りスピード老いに待ったなし

●八十路ですスピードアップと言われても 風露

川柳塔社から発刊されている冊子「川柳  
しませんか」にも明記してある通り、長

音「ー」と促音「ッ」は、一音字と数えます。ですから、この句は中八となつていません。中八はとかくリズム感が悪く感心しません。関東に頑なに五七五を守る結社がありますが、関西では上七程度は許されるのが、習慣になっていきます。けれど、中八はタブーです。なんてつたつて五七五が大原則なのは、言うまでもありません。この句の場合「と」は無くても十分いい句ですが、こんな風にして見ました。

○スピードアップせよと八十路に言われても

●コロナ禍でスピードアップのオンライン 和子  
この句も全く前句と同じです。不用意に「と」をつけておられます。というよりカクカナが続くために敢えて入れられたのかもしれない。そうしないと、披講などで読みにくいでしょう。こんな時は「の」かわりに一字明けましょう。

○コロナ禍でスピードアップ オンライン

●たまたまのスピード違反ひっかかる くみ子  
普段は交通ルールを守って、安全運転な

さっているくみ子さんでしょう。それなのにスピード違反でひっかってしまわれたとは、何という運の悪さ。罰金と減点！まあ事故を起こさなくて良かったと思うこと、と諦め反省材料とすることしましょう。ただしこのままの詠み方ですと、事実を述べただけになります。下五にひと工夫。これでより思いが深くなり、自分に対する反省、後悔、情けなさなどが、読み手に通じます。

○たまたまのスピード違反だったのに

### 「佳く出来た句」

コロナ禍もスピード感の無い政治 行久  
多発する事件に記憶追いつけず 不二夫  
なだれ込み我先掴む福袋 蟻日路  
戒めに壊れた車体展示する 一平  
つむじ風タイムスリップして逃げる 風鈴  
ドラレコに速度超過と叱られる 双葉  
スピード婚と言われながらも半世紀 双葉  
母の脚合わせて歩く小旅行 次郎  
五七五老化スピード遅くする 次郎  
秒針の速さで過ごす年の暮れ 道則  
スピードについて行けないデジタル化 道則

# 川柳塔鑑賞

同人吟板垣孝志

— 3月号から

デジタルに囲まれアナログに生きる

藤井寿美

針箱の中は女の万華鏡

太田 扶美代

衣食住の衣の部分占める針箱。大きな箱ではないが、その役目は食や住と比べても負けることは無い。

祖母の横にはいつでも針箱があった。私の弟や妹の産着を縫う時の嬉しそうな顔は今でも記憶に残っている。孫たちは祖母が縫ってくれた着物を着て遊び、それは小学校の入学式の前の日まで続いた。祖父が心筋梗塞で亡くなった次の日も祖母は黙って経帷子を縫っていた。

千人針も縫ったのであろうその針箱の中には、お駄賃に使う飴玉・米穀通帳・線香モグサにマツチなどなど、まるで魔法の箱のように色々なものが仕舞い込んであった。

男尊女卑の時代を生きた明治生まれの女性の悔し涙も、そっと忍び込ませてあったのであろう。

手こずって行列でできるキャッシュレス

降幡弘美

日本人にカードは似合わない。たかが財布袋一枚にしても、銀行まで出向き新札に両替をして貰い、三枚にするか五枚にするかで夜が更ける国である。

「スーパーのレジはカードさえ出せばシュッと通れますよ」との甘言に惑わされカードを出してみたら

「申し訳ありません。こちらの銀行とは取引がありませんので・・・」

「ほなこれかいな」

「あのう、それは郵貯カードなので・・・」

「ややこしな。早よせなシヨンベンが漏れてまうがな。全部出すよつてに、こん中から探しなはれ」

「恐れ入ります。ええと運転免許証に三菱UFJ、三井住友、イオンにペイペイ。VISA・KIPSに楽天、アマゾン、テレカにポケモン、鬼滅・・・」

時計は丸くて、真上に長身と短針が揃った時が正午もしくは午前零時。それで育った世代は、時刻を映像として捉える。だから時刻を尋ねたとき、

「〇時まで五分ほどありますな」

などと聞けば頭の中に時計の文字盤が浮かび、〇時の電車に乗る前にトイレに行けるなど考える。

現代の若者の時計は、ほとんどデジタルになった。時刻を尋ねると

「△時55分23秒です」などと言う。この23秒が気になってトイレに行き損なったりする。

千手観音手洗いで日が暮れる

大久保 眞澄

千手観音さまはあちこちで参拜できる。奈良・壺阪寺参道では直接手で触れることも可能。御手の数は四十本が相場。かなりサバを読んであらせられる。

大阪葛井寺の観音像の御手の数は千四十一本とネットで紹介してあるが、御手を洗われる時にややこしくないか。

寄せ植えに目立ちたがりが出て困る

柳田 かおる

芝桜の中に一本だけ間違つて咲いたチューリップのような方は、何処にでもいらつしやるようで、父の命が今日か明日かと親族が集まつた私の実家に、同じ方が一日五回もお見舞いに来て下さつた。

その訳を後で聞いたら、葬儀委員長を矢鱈とやりたがるお人であつた。

薄く描く眉今日は言いすぎないように

宇都 満知子

群ようこの短編に「120分の女」というのがある。お化粧に毎朝二時間も要した完璧の顔であるから、会議でも積極的に発言が出来、今では課長待遇となる。(顔に止まつたゴキブリは即死。)

女性社員がいつもと違う化粧で出勤した日は、何かの意思表示であろう。

使い込みツヤが出て来た。ありがとう。

廣田 和織

「ありがとう」は何度聞いてもいい言葉。使つて使つて使い込んだ「ありがとう」には、笑顔の神さまが常駐するだろう。

百万回笑つたあとで参ります

福西 茶子

赤ちゃんは一日に四百回の笑顔を見せ三十五歳を過ぎた大人は十五回というデータがある。声に出して笑うとなれば大幅に減ることだろう。七十代ともなれば【こしばらく笑つたことがない】方も数パーセントある。【笑う門には福来る】笑う回数にノルマなどつけず、大いに笑つて過ごすのが健康の源。

上弦の月になみなみ酒を注ぐ

山野 寿之

上弦に注いで下弦で飲み干す。日本海を水盤にして、寒鰯を泳がせ踊り食ひ。白楽天・杜甫・李白もあの世から呼び寄せ、日中友好。盛大な宴会を。

自画像はこの裸木のたたずまい

山口 不動

断捨離を済ませ、財産は生前贈与、延命治療も断り、御世話になつた方々にはお礼状を書きあげ、公園の裸木のように清々しく天命を待つ。全ての高齢者がそうあればよいのだが。

ドラマーの貧乏揺すり止まらない

村田 博

四十年あまりを工具で過ごし、作業服の左腕に差し込んだ十五センチの小さなスケール(物差し)で素材の長さや太さを、毎日何度も確認していた。

トータルすれば何万回、何十万回となるだろう。その癖は抜けず、退職した後でもスーパの商品を手を持った途端に右腕が左肩口の方に反射的に動く。ドラマーの足と同じで一種の職業病である。閉店の貼り紙にある涙あと

岩佐 ダン吉

新型コロナウイルスの影響で自粛生活も二年を越してしまつた。

あれほど活気のあつた商店街も人影が消え、安くて美味しい食堂や、新鮮が売りの青果店、親切な花屋さんとシャッターが閉まつたままの店が増えた。

何十年も付き合ひのあつた店が突然閉店、寂しいものである。

墨痕鮮やかな挨拶状が雨に濡れ、黒い涙を流している。

# 水煙抄鑑賞

—3月号から

古今堂 蕉 子

女房に好きな死に方など訊かれ

月波 与生

中々ユニークな句です。奥様も傑物とお見受けします。ピンピンコロリなんてありふれた返事せずに笑いを取って下さい。

生きる事飽きたと駄々をこねる母

岡田 恵子

私の姉も迎えに来るのが遅いと駄々をこねています。とは言いつつ病院通いも怠りません。額面道理におとりになりませぬように。

貧しさに虹が二色の国がある

真島 久美子

医療も食事も無く命さえ落とす状態の国のあること。心寒いことです。

ためになる話の好きな膝小僧

小川 道子

何々膝進めて輪の中に面白い話も好きよ。

不自由な自由ボンと一軒家

原 徳利

あのテレビを好きな人は多い。そこにはドラマが有り、自由に生きるさりとして凡人には出来ぬ。夢を見させてくれるところが愛される所以だろう。

天国にちよいと知ってる人がいる

まつもとともこ

よくよく知っている人をちよいとと含蓄ある言葉を使ったのが秀逸。私もちよいと知っている人を沢山見送りました。

お年玉あげて若さをもらい受け

石川 克美

今まであげてばかりで若さを貰うの忘れていました。こんな気持で相互にウィンウィンと考えるのがベストですね。

お正月来るのが楽しみにしました。

ふるさとは地球あなたはどちらから

響庭 風鈴

宇宙も近くになりました。惑星で見知らぬ人に出会ったのです。

こんな挨拶するようになるかもですね。

なぜか好き荒地に咲いた鬼あざみ

河南 すみえ

「あざみの歌」がある位日本人の好きな花ではあるが鬼あざみはまだしもアメリカカ鬼あざみは史上最悪の雑草ということだ。手を触れるべからず。ご注意あれ。

寅年だ吠えるぐらいはやれそうだ

福島 一雄

コ罗纳禍に出るな、喋るな、集まるなと人もお店もイベントも消耗しきっている。吼えて下さい、寅年です元氣一杯！

よく言うね世話女房にしつこいと

奥野 健一郎

これは同感。私もよく言われました。わかった。しつこく言うなって。関心も愛もあるからしつこいのですよ。

人間の力引き出す褒め言葉

上山 堅坊

厳しい言葉に発奮する人、くさされてなにくそと思う人いろいろでしょうが、概ね時宜を得た褒め言葉は人のやる気を引き出します。

蕪村おじ 長い堤をのたり行く

これ蛙 それ飛び込めと筆を持ち

三谷 松太郎

俳句からの遊び。こういうのもありかな。





自分を肯定する

少し古くなりますが、平成30年の内閣府による「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」(諸外国とは、韓国・アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・スウェーデン)の結果を見ますと、「日本の若者は諸外国の若者に比べて、自身を肯定的に捉えている者の割合が低い」となっています。

この「自己肯定感」の低さは、若者のみならずどの年代でも見られるもので一つの国民性とも思われます。そして、その国民性の背景にあるのは伝統的な美德とされる「謙虚」とか「奥ゆかしさ」ではないでしょうか。

昔から争う気なし勝つ気なし

古今堂 蕉子

生温い空気が僕の性に合う

片山かずお

事なかれ主義に徹して日向ぼこ

小谷 集一

あほやなと言われほんまやなと思つ

坂上 淳司

のんびりが続き有頂天がない

福西 茶子

平凡な暮らしまだまだ飽きてない

侯野登志子

自己肯定感とは他者との競争に打ち勝って自信を持つことによつて高められます。しかし、川柳作家はそれほど単純ではなく、「争う気なし勝つ気なし」とか「生温い空気が性に合う」「事なかれ主義」等と自嘲しながら、「不甲斐ない自分だが、それでいい」と肯定しています。あほやなと言われても逆らわず、のんびりが続く平凡な暮らしにも飽きていません。本誌2月号の目次下エッセイは、西尾葉師の「受身」ですが、

その中に「負け方や、受身の本当に身についた人間が、世の中の悲しみや苦しみに耐えて、他人の胸の痛みを心の底から理解できる。そして、やさしく温かい人間になれるのである」とあります。ここに掲載の作品のように「私は私、これでもいい」と開き直れるのも世間の荒波に揉まれた結果であり、その点が高齢者が多い川柳作家の強みでしょう。

忘れるというお手軽な自然治癒

山岡富美子

雑種です教科書通りワンと鳴く

居谷真理子

逃げ足は速いがかけっこは遅い

藤田 武人

さつと身をかわす術なら長けている

吉村久仁雄

毎日が弱い自分とボクシング

伊藤 良一

生き方がサンドバッグになつている

藤井 智史

物忘れすることを嘆くのではなく「お手軽な自然治癒」とポジティブに主張。市井の民を「雑種」と大胆に開き直り、「逃げ足の速さ」や「身をかわす術」を恥じるのではなく、個性として肯定して一句に纏めているのもお見事です。また、自分や世間との日々の闘いを「ボクシング」に喩えることが出来るのも自分を客観視する川柳作家ならではのようです。

次は女性の句ばかりですが、このように纏めてみますと、女性の方が開き直りの自己肯定が強いように思えます。

四捨五入すれば良妻ですわらし

工藤千代子

貧乏も続いていると慣れてくる

大川 桃花

耐えることだけに自信持つている

鴨谷瑠美子

干し柿も私も皺で味を増す

米澤 俣子

だんだんと自分のことが好きになる

上田ひとみ

一つまみほどの自惚れならいいか

大久保真澄

# 『麻生路郎読本』余滴 (69)

## 「商業之大日本」の頃 ⑤

葉原道夫

11月号を見ていく。本文120頁。この号から菊二倍判を四六倍判(横188mm×縦254mm)に変更。定価も50銭から35銭に変更。

路郎は「欧文電報の隠語秘語に就て」を執筆。それ以外に、幸兵衛で「誇張と眞實」、路郎生で「壹圓の品を壹圓貳拾錢に賣る方法」、江戸堀幸兵衛で「珈琲店の卓上より」を執筆している。まずは、「誇張と眞實」と「壹圓の品」の2編を全文挙げておく。

誇張と眞實

幸兵衛

僕が一生懸命になつて原稿を書いてゐる傍で五つになる娘が玩具の三味線をならしたり、鉛筆をなめてはそこら中へわけの分からぬ線をひきさがすので、頗る閉口する。なぐるわけにもいかぬので「邪魔をしたらご飯が喰べられぬやうになるが、それでも

エ、か」と聞くと「喰べいてもエ、」と答ふ。

僕の言既に誇張がある。娘の言の眞實なるに及ぶべくもあらずである。けだし「喰べいてもエ、」と言ふ譯の分らぬ間が幸福なのであらう。「喰べいでエ、」と言ひきれぬ勞働者には幸福が常について廻らぬのもむべなるかなである。

壹圓の品を壹圓貳拾錢に賣る方法

路郎生

實際壹圓の價值しかない品を客が幾らですと聞けば壹圓貳拾錢ですと答へる。恚うした際に客の風體を逸早く觀察することは勿論である。斯かる手段に出る商人を或る人達は商賣人だと思つてゐる。

即ち懸値をいふことが商賣の一つの秘訣のやうに考へてゐるのであるが懸値賣は商賣の秘訣でもなんでもない。寧ろ前途をふさぐ小刀細工に過ぎないのであるから大きな商賣人にならうと思ふ人達は決してこんな悪法に依つて利を貪らうとしてはいけない。

### 第一 時間の不經濟

懸値のある商品と懸値のない商品とは誰

れにでもすぐ解る筈である。すぐにわからぬとしても何れはわかるのである。懸値があると知れば客の方でも勢ひ値切らねばならぬ。値切る事の嫌ひな客は全然寄りつかぬやうになる。値切ることの下手な客も、あの店は懸値をいふと知つたら再び來なくなる。さうしたならば臆面もなく値切ることの出来る客だけが來ることになるから客の種類が下落して佳い品が賣れぬやうになつて了ふ。段々客種が悪くなれば其の店の前途は暗闇である。

「まけてくれ」「まかりません」の押問答で無駄な時間を費すことは商店にとつては大きな禁物である。懸値販賣法では普通百點の商品を商ふ時間に廿點しか賣れぬとすれば眼に見えて損ではないか。

### 第二 人に頼めぬ

駈引のある店の商品は他人に頼んで買つて來て呉れといふ譯に行かぬ。是非共自分が出掛けなければならぬので、つい面倒な時には他の商店で間に合はせるやうになる。その店の品が案外安い時には其の客は永久に失はれて了ふ。

### 第三 通信で買へぬ

前にいふ理由で駈引がある店へは、手

紙や葉書で註文をするわけに行かないから客の地域がズント狭（ま）ばめられる。定價から一厘も引かぬ店の品であれば家庭に定價表一部送つて置けば客が何時も其の店に來てゐるものと變らない。サア要るといふ時には使ひでも葉書一枚でも用が足りる。

#### 第四 取換が利かない

懸値のある店では押問答の末に賣つた品であるため、客がその品に缺點を發見して取換に來ても取換に應じない。そのために信用のある店には到底なれない。

#### 第五 店員が胡麻化し易い

壹圓の品を壹圓貳拾錢に賣つても壹圓參拾錢に賣つても差支ないとすれば店員が不正な事を働かぬとも限らない。自然店員を見るのに絶えず監視の態度になつて店主と店員との間が圓滑に行かず、延いては店の信用を害することが出來て來るのである。

「珈琲店の卓上より」は長いので、一部抜粋する。

珈琲店の卓上より

色彩なき世界を夢見つつ

江戸堀幸兵衛

私達が色彩に對した時の感覺を憂鬱的と

安靜的と刺戟的即ち昂奮的との三つに區別することが出来る。レッドとキエロウとブルーは刺戟的であるが殊にレッドは昂奮的の色彩である。しかしキエロウの方は元氣を鼓舞する色彩である。

日中の太陽の黄色の光線は人間に元氣を賦與して事業を成就させる色であるが太陽の碧さや月の蒼さは安靜な色彩であつて私達の心身に一種の休息を與へて呉れる。

キエロウがレッドの色合をうけると直ぐに安靜的な色彩と變じて了ふ。

暖爐の燃え立つてゐる中を見つめてゐるとブルーの舌で取り卷かれた黄味を帯びた赤色のほむらに何處か安靜な色彩を呈してゐることに氣がつく。黄色がグリーンに交ざると、これまた安靜な色彩となるが、グリーンが勝つにつれて憂鬱な色彩となる。ブラウンとパープル、灰色とブラックも憂鬱色であるが、これ等の色は中性色であつて刺戟色の眞の價値を薄らげるために刺戟色と共に使用されてゐる。

實つた麥畑のブラウンの色彩に、クエーカー教徒の服装に會葬者の聖服の色彩に一種の静けさを見ることが出来るではないか。右に述べたやうな色彩をもつてゐる鳥に

はレッドバードやブルーバードやカナリヤなどがあるけれども總ての鳥は皆昂奮的な色彩をしてゐる。鳩の如きは灰色かブラウンであつて他の鳥に比べると、より以上に憂鬱な色をしてゐる。

「人形の國」と題して、若島留里子と麻生霞乃の短歌が、五首ずつ掲載されている。霞乃の作品を挙げておく。

君とあそびし紙こま拵の犬をかくく吹き思ひつづくる夜の懷手  
(舊作)

今はただ女のめづること知りて絹糸をまく夜の静けさ  
(舊作)

へるめつとかむれる君が年すこし老けてみゆるもたのもしきかな

肺をやみて故郷くにへかへりぬいかづちの如くものいふ君なりしかど

やよ百足わこにつかざれよすがら蚊帳の天井を這ひてあるとも

(次回に続く)



(投句187名)

とうとう起こってしまつた戦争、テレビの画面に映し出された現実の悲惨さには目を覆うばかり。



家族との別れの涙や、子供を亡くした若い母親の慟哭に、共に涙する私がいる。遠いウクライナを想いながら、テレビの前でいつもと変わらぬ食事を取っているのも、紛れもない私自身です。この矛盾に少々戸惑いながらも平和を願い、改めて今ここに在ることの幸運を思わずにはいられません。では、ナビを。

弘前市 高瀬 霜石  
雑草を刈る雑草のような人

(評) どちらにもひと癖ありそう。刈ろうとする人、刈られてもすぐ生えて来るもんなね、と飄々と揺れる草。

黒石市 北山まみどり  
うそつきな鏡と正直な鏡

(評) たまにはうそつきな鏡を見たくな

いですか。あまりに正直にキツバリと顔を写されると、心折れそう。

枚方市 藤田 武人  
軽石と違つたのかな月の石

(評) あの沢山の軽石は、今はどうなったのかしら。考えてみると、月の石だつてひよつとしたりら、なんて。

橿原市 居谷真理子  
兵馬俑死んでも敵の多い人

(評) 死んだ人に鞭打つようなことはイケナイとされているけど、始皇帝ほどビッグでなくてもいますよね、こんな人。

豊中市 きとうこみつ  
生きている人の都合で墓じまい

(評) 最近、よく言われる墓じまいだけでなく、死者にまつわるあれこれは、残つた人の為と聞いたことがあります。

河内長野市 梶原 弘光  
七福神やつばり僕はえべっさん

(評) おやおや、七福神にも「押し」があつただなんて。でも、えべっさんは福々しくつて、エエですわ。

藤井寺市 鴨谷瑠美子  
レットテルを剥がすと雑草がはえる

(評) 言葉は悪いけど、「ポロ隠し」の役割をしていたのですね。確かに、思い当たる節、あれもこれも、です。

大阪府 米澤 俣子  
美しい景色は知らぬ靴の裏

(評) 言われてみればその通り、よくぞ

気付かれませんでした。靴は踏みつけられながら足を守ってくれます。改めて感謝!

東京都 川本真理子  
悠久の時を一人でうたた獲し

(評) 古代から微動だにしない雄大なもの、目覚めたときは次の世紀に移つていたりして。変わるの人間ばかりかも。

大阪市 石田 孝純  
「覗くべからず」覗いてくれと同義語か

(評) もちろん、そうですとも。反対の行動をしたくなるのは人の性、そのもうひとつ裏があるのかもしれない。

岡山市 永見 心咲  
新しいコインは原始ギヤートルズ

枚方市 栃尾 奏子  
罪という眠り妨げてはならぬ

横浜市 菊地 政勝  
ロボットに先人の脳組み込まれ

今治市 永井 松柏  
お静かにいま文明の夜明けです

箕面市 酒井 紀華  
卵からできるレシビは無限定

西宮市 緒方美津子  
美談です隅に小さく囲み記事

佐賀県 真島久美子  
キュビズムの世界未だにアレルギー

松山市 郷田 みや  
あがりのないすごろくなんて信じない

尼崎市 近兼 敦子  
外堀りの中が見えないミステリー

香芝市 大内 朝子  
近寄れば古代の風に会えそうな

米子市 八木 千代  
野仏に向かうとポチも尾を垂らす

河内長野市 穂口 正子  
樹木葬こころ辺りは低価格

西宮市 西口いわゑ  
シャボン玉一緒に行く宇宙まで

大阪市 岡田 恵子  
ケンケンパー次の一步が踏み出せぬ

河内長野市 森田 旅人  
落選に取り巻きも散り静かな夜

三田市 堀 正和  
爺ちゃんはずうな風呂から出て来ない

生駒市 飛永ふりこ  
こんがりのトースト今日が目覚めます

鳥取市 山下 凱柳  
三猿を貫く意志の強さみせ

池田市 上山 堅坊  
本当の中身分からぬ玉手箱

大阪市 小野 雅美  
少しずつめくられてしまふ脳のメモ

松山市 栗田 忠士  
縄飛びのリズムで歌う春の詩

奈良市 山本 昌代  
穏やかな日々を送っている歴史

豊橋市 西郷紀美代  
冬眠のカエルに御免土起こし

大阪市 石橋 直子  
パソコンも重機もなしに古墳群

青森県 月波 与生  
死に場所を探し毎日昼寝する

羽曳野市 吉村久仁雄  
乗り鉄で歴女で古墳めぐる旅

大阪市 樋口 眞  
宝物今も埋まっているかしら

西宮市 高橋千賀子  
永遠にたまご抱かないフェニックス

明石市 瀬島流れ星  
まあいいか歳と妥協の化粧する

神戸市 みぎわはな  
縄飛びは苦手 長い脚が邪魔

松山市 柳田かおる  
思考回路でわたし時々つまずくの

大阪市 平井美智子  
老人と呼ばれてからの長い列

弘前市 稲見 則彦  
盗掘でボクの頭のようなもの

箕面市 出口セツ子  
天皇家の子孫ですのよオホホのホ

唐津市 仁部 四郎  
日に一度二重人格稽古する

神戸市 輿水 弘  
鏡まいにち何も言わずに老けてゆく

宮崎県 惠利 菊江  
出没の美女に注意と但し書き

熊本市 杉野 羅天  
謁見禁止只今修理中申弥呼

防府市 坂本 加代  
遊ぼうよ窓から覗く隣りの子

大阪市 江島谷勝弘  
権力闘争に明け暮れる古事記

三原市 笹重 耕三  
覚悟した首は動揺などしない

河内長野市 中島 一彌  
ドローンに国の秘密を盗まれる

三田市 尾崎 一子  
果ごもりの自助でさくらを待っている

富田林市 山野 寿之  
鍵穴の向こう期待と不信感

和歌山市 佐藤 まき  
立入り禁止レム睡眠の夢途中

大阪市 今村 和男  
静脈を天日に晒し春うらら

明石市 穂谷 和郎  
神様は無欲な人が好きらしい

倉吉市 牧野 芳光  
毎日をナマコみたいに生きている

神戸市 富永 恭子  
何枚も扉を押して知る真

尾道市 村上 和子  
日本が沈まぬように踏ん張るぞ

6月号発表  
(4月15日締切)



(平本 霧石人 画)  
柳箋に2句

# おとせのついで

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります。  
楷書で誤字のないようにお願い  
いたします。  
編集部

## 川柳塔打吹(鳥取)

斉尾くにこ報

地下掘って地上陥没ああ怖い  
掘り炬燵吹雪の中で船の旅  
年の瀬に大雪掘って車出し  
ガラクタか金かひとまず掘ってみる  
雪解けに掘って見つけた春の音  
掘って埋め掘っては埋める人の業  
寅年の年男だがひそむ猫  
新年会まわり気にしてでも開く  
ゆつくりと論じて心開かせる  
宝くじ開封までのお代です  
握り拳開きや舞い込む春の風  
春の吐息にそっと開いた赤い薔薇  
神仏二股かける私です  
神様と添い寝した朝ルンルンだ

久芽代 貴恵 裕子 龍枝 紀子 石花菜 大鯨 清江 芳江 滋 節子 美ツ千 岳人 紀美恵

神様が沢山おられ悩ましい  
機嫌良く振るまつたら神が寄る  
神様は何彼につけて酒が好き  
ボクの心に神様という宇宙  
アウシユビッツに神様は居なかった  
氏神と氏子の仲はウインウイン  
神様の領域までも入れるメス  
神様も過労死をする絵馬の数  
神様のお水で治る母の風邪  
初詣だけの社で畏まる  
人間を掘れば弱くて柔らかい

義人 陽之助 三津子 照彦 芳光 玲坊 紀の治 重利 美知江 完司 くにこ

介護した親を手本に生きてゆく  
しがらみを抜けて掴んだ自由席  
帰省する度増えている空き家  
古里は地球と言え近未来  
踏ん張って生きるドラマがまだ続く  
望郷の想いが募る秋の暮れ  
一年のドラマを綴じる古日記  
ふるさとの杉は私と同じ歳  
オアシスというふるさとがある和み  
グローバル出身地など気にしない  
どんな時もふるさと自慢おらが春  
ふるさとを話せば小じわ消える妻  
二刀流すごいドラマが生まれ出す  
団地で古里はもう夢の中  
通帳もカードもなくよく眠れ  
いつまでもそばで見たいな子のドラマ  
帰宅してうがい手洗いせぬドラマ  
かたず呑むシーンになるとコマーシャル  
遅刻ですタイムカードは嘘つかず  
はち切れる財布の中身みなカード  
ふるさとに青春の影置いてある  
シナリオが日々変わるから持つ希望  
朝ドラを見ないと仕事始まらず  
用済みのテレカで鍋の焦げ落とす

起世子 菜摘 昇 保州 昭枝 彦弘 義泰 明子 知香 眞智子 悦男 和美 よしこ 正七郎 康則 俊介 剛 明宏 澄夫 夢子 幸彦 満喜子 千鶴

## 和歌山三幸川柳会

西川 千鶴報

悪役が濃い味付にするドラマ  
オミクロンまたふるさとを遠くする  
カードなら高い物でもパッと買う  
俺の城作ってみせると里を出た  
窓の灯の点す数だけあるドラマ  
いつだって子のふるさとになりましよう  
まだカードあるから明日も生きられる  
切り札の使用期限が切れていた  
杖などは持たぬ男の正念場  
散る花のひとひら毎にあるドラマ  
世界中皆平穩に暮らしたい

敏照 ひろ子 宏枝 一雄 八重子 碧 純子 和子 准一 俣子 まき

千鶴報

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

一句抜けとでもめでたいコップ酒  
 五十過ぎ出版社からお年玉  
 又孫と女同志の秘密濃くなり  
 喜寿祝い数えて祝い満でも祝う  
 恙無く除夜の鐘聞き床に就く  
 宝くじ当たらなくても皆元氣  
 門付けの俵転がし福運ぶ  
 子の子から年玉貰う老夫婦  
 おめでとう二十歳の誓い忘るるな  
 やつとこさ手渡ししてきたお年玉  
 茶柱の立つお茶選ぶ松の内  
 息災を願いたいだく小豆粥  
 六人の兄弟みんな生きている  
 諦めた籠はずれて翔ぶ構え  
 長生きし孫からもらうお年玉  
 子供等と食べて笑ってお正月  
 初孫の十月十日を待つ春だ  
 よく見てこらんまわりは宝ものだらけ  
 夢中でした最後の「たすき」笑顔走  
 ご機嫌な画鋏に病妻と笑い合う  
 ひと匙の加減で言葉選りすぐる  
 ふるさとは口に蕩ける冬苺

除雪してまた除雪してお茶にする  
 やせようと茶碗七分目飢えている  
 妻の愚痴茶柱さえも見放され  
 お茶の間は主婦が団樂できる場所  
 お茶仲間御託並べて一日を

隆樹 孝子 義明 重虎 澄子

わかやま吟社 小谷 小雪報

火あぶりの刑に観念したするめ  
 お手玉を縫って昭和を抱き寄せる  
 将来を見据え布石を打っておく  
 干されても我が道を行く老いの意地  
 サークスの命を託すピアノ線  
 御陽様が好き干し芋のひとり言  
 秋の空白い布解く建碑式  
 調律の耳が要のドレミファソ  
 バイエルをやつと弾けると特技欄  
 思い出を繋ぎ合わせてキルティング  
 梅干しも陳ねて深々老いの皺  
 アラブの女性チャドルを被り戦場を  
 校長がピアノで校歌リハーサル  
 窓際に干されて渋い自尊心  
 ジャズピアノ調子上向き弾みだす  
 御日様の匂いもうれし干しブトン  
 池の水抜いて消毒毎日干し

倅子 寿子 紀子 富美子 佳子 悦男 夕胡 和宏 精子 信勝 敦巳 明 八茶 ふりこ 節子 夕カ子

西村 哲夫 選

くさび打つ理屈一つが動かない  
 片づけの苦手な家の生まれです  
 止めるのはよそうカルガモのワルツ  
 何はともあれ愉快に過ぎた三が日  
 カレーライスに白い上着が抱く予感  
 海岸で聞く流木の放浪記  
 この広い世界に僕の職がない  
 隠し事見抜いてますと遺影の目  
 ブライドが邪魔をしている孤独感  
 マニユアルを捨てて私が躍り出る

昌子 紀子 桂子 直子 雅美 光久 梶子

佳句地十選

(2月号から)

山岡 富美子 選

取り敢えずこれ飲んどけと医者が言っ  
 マンネリに始末をつける旅に出る  
 ジェンダーフリーひとつになつたお手洗  
 ながれぼししゅつとおやまにかくれんぼ  
 年とれば無欲になると思つてた  
 初めての顔で話を聞く介護  
 特効薬ひび割れしたらます「ごめん」  
 握手してハグした友の名を忘れ  
 神妙に弾くと勝てぬパチンコ屋  
 九十七歳の年が始まる頑張ろう

昇枝 初枝 くにこ ちか 穉民 敏治 直樹 武人 藤則彦 シマ子

飲み干して一か八かのプロボース  
風呂敷は広げず引き算で生きる  
ピアノ曲の香をポケットに入れてある  
大根のずらり並んだ脚線美  
窓開けて我が身一つを日にさらす  
雑巾になつても夢は捨ててない

竹原川柳会(広島)

古田比呂子報

初詣健康一番祈つてる  
今年こそ遺影一枚撮つところか  
自覚して一期一会を生きる齡  
とてつもなく深い一番と二番の差  
一つとせ人とは仲良く手をつなぐ  
タンスの奥に虎の子の二千万  
眠り猫酒一杯で虎になる  
今年こそ虎も倒して祝い酒  
虎の子を毎夜教えてほくそ笑む  
初詣今年の虎に賭ける春  
爺一人あの手この手の治療薬  
頼る手と任せなさいがする握手  
祖母の手のシワ人生の重さ見る  
手をあげて介護を頼む車椅子  
胸張って傘寿の道へ手をつなぐ

晶子 知香 小雪 あかね 徑子 大輪  
初音 輝恵 弘子 蘭幸 比呂子 和子 宣之 夢香 昭紀 栄香 節生 慶子 歩美 貞子 敬子

手を合わす元気に育ちますように  
手と手と手とともも温い話です  
逆らつて夢を貫く若い風  
真つ白の障子眩しいお正月  
教室に咲くよ僕らのヒヤシンス  
うめほしが入つたひみつちがいえにある  
小一 さや  
トラどしにちかはしようがくせいになる  
六歳 ちか  
千代美 笑子 幸子 厚子 史子  
逆らつて夢を貫く若い風  
真つ白の障子眩しいお正月  
教室に咲くよ僕らのヒヤシンス  
うめほしが入つたひみつちがいえにある  
小一 さや  
千代美 笑子 幸子 厚子 史子  
千鶴子 一文 泰子  
死を覚悟こっそり書いた父の遺書  
赤木ファイルもう隠すのは止めてくれ  
口止めをされた話か胃につかえ  
男の子一度は秘密基地造る  
ちらちらと秘密言いたげ孫の顔  
胃が痛いちよつと秘密のため過ぎた  
楽しそに遊ぶ子どもの秘密基地  
秘密裏に外交筋が動くらし  
駅裏に妻も知らない秘密基地  
耳をかせ言われて墓穴掘るはめに  
機密費は誰に渡っているのかな  
君にだけ明かした秘密みな知る  
秘密無い言うてへそくりしています  
さくら

貧乏を経験したけど飢え知らず  
食品ロス飢えてる人に届けたい  
同じ地球に飽食の国飢餓の国  
ワーキングプアが子供を飢えさせる  
昭和一桁の母の戦下の話聞く  
大量の食品ロスと飢餓の記事  
蚤虱取つては食べた戦時中  
貧者の一灯飢えの子どもに届きませ  
飢えた日がわたしを強くしてくれた  
ヤングケアラー支援の愛に飢えている  
飢えしのぐ炊き出し飯の暖かさ  
あの頃の母だけ茶碗小さくて  
飢えて知るとん底からの心意気  
富柳会(大阪) 山野 寿之報  
理由ありの辺りで爪を研いでいる  
未練捨て生まれ育つた郷を売る  
ときめきを忘れた日々が続く今  
お人好し無常の風に連れ去られ  
追い風に背を押されて箱根越え  
じろじろとながめるばかり我が預金  
螺子を巻く日はシヨパンよりビートルズ  
人は人割り切れなくて週刊紙  
待ち詫びて春はそこまで福は内  
かつ美 正義 一步 冬之ト こみつ まつお 専平 理恵 扶美代 宏造 フジ 洋一 みつこ 恵 武人 和子 高鷲 壽峰 一文 かこ 奏子 由夏



あの人整形して其処と此処  
大浴場スキーを終えて別天地  
耳許で囁きくれる風の私語

川柳de遊ぼう会(大阪) 小野 雅美報

初風呂におちよこ二杯の新酒入れ  
金曜日過ぎてホッとす監獄は  
どう活かす余白少ない人生を  
新しい事知らずとも尻の河童  
余りにも喪中はがきが悲しすぎ

新しい朝と一緒に伸ばす腰

余生をばチャンスと信じ好きな事  
余白からにじむ秘密と俺の嘘  
埋められぬ余白かかえたまま生きた  
新入りのつるし柿です耐えてます  
恋心芽生えて続く不整脈  
大根の一本持て余すひとり

後悔ある人生 限りある余生

たらればの明日への余白多すぎる  
まっさらのカーテン猫は引つ掻いた  
春風に騙されてみる酔ってみる  
二年ぶり新酒引つ提げ友が来る  
√には余りがなくて難しい  
如月の羽化わたくしは蝶になる

愚痴詰めた堪忍袋裂けてくる

川柳茶ばしら(愛知) 金子美千代報

年なりの健康維持に努めてる  
ト近眼その昔なら丙もだめ  
気ぜわしくスマホを操作株価見る  
この寒さいつまで続く灯油高  
何となく子らは見捨てはしないだろ

川柳ふうもん吟社(鳥取) 山下 凱柳報

完璧になるまで待つてあと少し  
七福神の死角に住んで貧乏人  
生きるってつらいため息ふたり連れ  
五七五詠んで苦楽の処方箋  
新米を完つて古古米食っている  
ゆず浮かべ一日の疲れいやされる  
大空が味方だ何も恐くない

初日の出拝めなくても南無阿弥陀仏

邪へ真つ赤になつていく正義  
蛇口全開迷いの消えた朝の顔  
コロナ禍に花火連発癒される  
天地人三連発が僕の夢  
不祥事の連発社長代わるだけ  
ダメ元で連発恋のキュービッド

生あくび猫も連発冬ごもり  
横文字を連発しては煙に巻く  
哀しみが続いて明日の絵が描けぬ  
四苦八苦先送りする核のゴミ  
核心になかなか触れぬ恋心  
核と核ぶつかりあっている夫婦  
団らん笑顔の核におわす孫  
墓の行く末明日に悩む核家族  
長崎広島あの日忘れてならぬ国  
核心は告げぬ墓場へ持つて行く

家の核一言吠える寅の母

女房も核もコロナも皆怖い  
役人のスピード感はSL級  
スピード違反をしている逆走車  
一瞬の呼吸の乱れでパトン落ち  
スピードについて行けない遊園地  
スピードの歯止めが効かぬ青い竹  
スピードが明日のいのちを無駄にする  
スピードを出さねばあなた見失う  
スピードを緩めて見えた手の温み  
長話に欠伸連発かみ殺す

ブラザ川柳(大阪) 穂口 正子報

声かかる時も有るだろスクワット  
哲子  
回春子  
無限  
龍彦  
白兔  
幸二  
龍枝  
月満  
厚子  
振作  
絃一  
賢吾  
螻蛄  
一平  
由紀女  
菊江  
一瑤  
八千代  
凱柳  
正子

雪空に赤いマフラー友も又

アニメ好き気付けば私タレントに

嫁自由息子と孫が我が家へと

馬の脚台詞はないが名演技

オブラートに包んだ愛を持って余す

捨て台詞吐くが未練は断ち切れぬ

雪洞に似合わぬドレス飾り

大寒に薫るろう梅春はそこ

風呂敷で包む文化はあの昭和

ありがとうきつとあなたの宝物

僕の手で包んであげる冷たい手

廃屋もいつかは山に戻ります

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤

足し算がなく引き算の空財布

手を上げて言うべきだった会終る

新聞も時に音読ほけ防止

一年の痛んだところ手当する

車窓からみる景色には柿たわわ

人柄と声に魅せられ深夜便

親ガチャと言われてもいい好きにする

一年の重み背負って誕生日

我が家計補正予算を付きたいよ

藤井棋士コンピュータの先を読む

和代

園子

景子

一彌

弘光

克三

政夫

清乃

悦夫

靖子

淳司

五月

宏之報

宏之

雨奇

久直

宣子

治代

恵子

俊久

多美子

美緒

博子

かかりつけドクタースマイル励まされ

もやもやを垢といっしょに流す風呂

喜びとストレスくれる五七五

三冠の指四冠の駒に触れ

アワタチ草咲き誇ってる売れぬ土地

ずっこけた何も無いのにずっこけた

ひろし

南大阪川柳会

松岡

篤報

受験生模様だよと絵馬を売る

ジンクスを守り右足から一歩

ジンクスを気にする夫しない妻

大安も無視して挙げる出来た婚

なんでかな掃除をすると来ない客

茶柱が沈んだ日にはふて寝する

すんまへん私の旅は雨が降る

あせりすぎ合図間違えフライイング

ほつべにチュー愛しているよと孫合図

親分のカラスが啼くと騒ぎ出す

二次会はアカンと合図する財布

呼び出しは一回だけで切る電話

長電話妻に差し出す砂時計

体重が減ってきたのは合図かも

折々の四季を彩る花時計

葉々

瑞枝

美穂

千代

令位子

ひろし

篤報

博

直子

いさお

通江

よしみ

郁夫

勝弘

峰子

蕉子

東風

敏治

柳右子

常男

楓楽

弘子

満作

まめまめし母の膳には四季がある

歳時記を繕き知った四季の彩

一夜づけ大当たりして味しめて

病名をずばりと当てる聴診器

よく当たる膝関節の雨予報

杖あたる夫の帰る音を知る

お互いに大当たりだと老二

80年やっと当たった1万円

ずばり母言う学校が嫌なら働けと

無常な世一期一会を大切に

トンガの噴火よそ事でない火山国

生きてれば奇跡も起きる妻の治療

友情が軋む未知数解いてから

駅そばでほつこり命考える

喜寿と古稀夫婦で祝う虎の年

川柳あまがさき(兵庫)藤井

宏造報

安倍のマスク捨てても配ってもお金

泣き言を聞いてくれてた妻が近く

涙目で詰め寄られるとすぐ負ける

散髪に行くのを迷うオミクロン

つるつるの見る夢いつもふつさふさ

紛争もオリンピックもある地球

ます褒めるそして核心衝いてゆく

志華子

一步

まゆみ

ひさ乃

大子

弘委智

実

篤

シマ子

ルイ子

国和

克己

昌紀

柳伸

亜成

こみつ

厚江

健二

耕治

隆一

修平

ゆきみ

髪結いの亭主に徹し共白髪

紀 惠

亡き夫のひじ付き椅子も家族位置

敬 子

母のことまた思い出すちらしらずし

朝 子

趣味の絵を褒めると帰り持たされた

新 録

極寒を乗り切る群の猿だんご

満 知 子

はんなりと抹茶の味のチョコレート

八 千 代

褒めちぎりぐうたら亭主こき使う

千 賀 子

もう二年家族揃ったことがない

勝 弘

晴れ姿ママの張り切る千歳飴

敏 治

カツラ出来おしやれ楽し老後かな

佐 和 子

あの頃はと昔を偲ぶ家族愛

世 紀 子

初物はまず仏壇の父母へ

い さ お

退院後出直す句会美女ばかり

柳 明

竹の子の拝み形で頭出す

ひ ろ 子

八十はまだまだ若い長寿国

扶 代 美

メモ見ながらカートを押して歩く妻

雪 菜

とりあえず頭を下げて野心理

和 夫

初恋はマニユアルもなく地図もない

時 雄

デボチンが二倍ほどにもなってきた

勝 弘

藤井君彼の頭脳を覗きたい

廣 子

初恋はマニユアルもなく地図もない

時 雄

声高な主張にきつと裏がある

久 仁 雄

さて結果緊張してた脳ドック

美 津 子

東北の冬は演歌の歌詞になる

恭 子

生きてこそ出直すチャンス巡り来る

堅 坊

頭脳明晰眉目秀麗いまいずこ

蕉 子

風水がうやむやにする設計図

千 賀 子

泣くがいい涙はきつと虹になる

紀 華

難問も頭冷やせば読めてくる

憲 彦

これからもあなたの杖になる覚悟

郁 夫

コロナ対策出直しにしたオミクロン

か ず お

頭の数が揃えるだけに呼び出され

志 津 子

春一番きつちり結ぶ靴のひも

洋 志

高額の手毛刺は親が買う

(人) 修 平

ちよつと頭下げれば風は通り抜け

佳 子

ひばりの右に出る歌手いまだ現れず

福 貴 子

日本の亭主嫁はんちよつと褒めなはれ

菊 江

医者よりも長いわたしの患者歴

俣 子

教会讚美歌心あたたまる

ル イ 子

見てわからんルツサルコウトウルプ

和 子

四十路の娘見合い重ねて馴れたもの

進

風除けにしますあなたのためまじさ

実

酒を断ち出直し図る左遷の地

良 種

ペテランは手を抜くことを知っている

素 頼 馬

生けるものかく逞しく芽吹く春

弘 委 智

子は褒めて育てと言うが嘘だった

英 坊

老人と言わずペテランだと言つて

玄 也

反抗期終わり息子も逞しく

五 月

コロナにも宝クジにも当たらない

宏 造

再々婚もう何も彼も手際よし

尚 邦

善悪を見極め揺るぎなく生きる

賢 子

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

食卓に小さなおはし増えて春

万 紗 子

道半ばなのに年はもうペテラン

清

お金の話うやむやにして幕を引く

か ず お

大家族寝る暇もない母の労

満 作

ペテランの域に達した物忘れ

堅 坊

うやむやを楽しんでいる縄のれん

堅 坊

軋んでも足並みそろろう家族の輪

雅 明

ペテランのくせにペコペコ腰低い

舞 夢

今はベター今後ベストになる期待

優

血の所為か家族皆が祭り好き

憲

花満開街は華やか稚児祭り

光 雄

ゆつくりと歩むオンリーワンの道

宏 造

風になり一目逢いたや拉致家族

み つ こ

春の山また来てくれと散る椿

禮 子

コロナ禍で明日が見えぬ日本地図

野 鶴

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

茜雲明日を信じてベダル漕ぐ

温暖化地球に人がいなくなる

これからも変わらないのは貧富の差

落武者の村には似合うソバの花

妻へ伝オレより先に逝かないで

聞き耳をたててひと駅乗り過ごす

桜咲く頃にボツクリなんて夢

寂聴尼おいでおいでと黄泉の道

地獄絵をみたらよいことしたくなる

物価高コロナの陰で隠れん坊

酒呑みの嫌いな言葉お勘定

空き缶は蹴って遊ばす分別へ

オミクロンああオミクロン君は誰

成田山ピーナツ拾いワンカップ

コロナ撃退ちよつと奮発お賽銭

永らえる命に運命加勢する

無印の人生だけど妻がいた

うやむやに許してならぬ汚染水

オミクロンどこ吹く風と冬木立

八尾市民川柳会(大阪) 山野

寿之報

雪霏雪の雪の化身は雪ぼんな

新時代担う聡太の将棋盤

逆光に晒して洗う今日の嘘

星雨

信子

廣子

黒兎

義明

和夫

志華子

肇

峰子

一歩

隆一

ゆきみ

昌紀

博

万紗子

正彦

廣光

満知子

満作

欣之

壽峰

常男

君たちのババ亡くなった猫スズメ

皮をむくむいてもみかん母である

全幅の信頼だけが消す不安

良心の欠片集めて貯金箱

満天の風呂から掴むオリオン座

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

飲みたいなあビールの泡に見える雲

劇場だ雲から降りたBIG BOSS

思い切り泣いたら軽くなった雲

捨てられた芋の蔓から小原流

ひとつふたつと座右の銘を捨てはじめ

捨てゼリフ心突きさす受けて知る

君の捨て台詞をひとりジンで呑む

執着をまず捨てないと道はない

捨ててしまえばよかったらうに玉手箱

ドラえもん米中結び平和賞

チビ丸のマンガ見ているいい時間

人生に転ぶマンガを見て笑う

幸せにようやくなれた四コマ目

難所だなレンズかざして這い上がる

どの顔にもレンズは媚びることはせぬ

好色のレンズが曇りだしてきた

高鷲

あかり

卓郎

涼子

寿之

青帆

美智子

邦代

桂子

米估

瑞人

柳歩

弘充

あきら

知恵子

小鹿

吹喜

とも子

豊仙

芳山

太陽とレンズ灼熱の抱擁

ふところ覗くATMのレンズ

曙杉の林冬ソナよみがえる

寅年だ阪神優勝念じます

虎の勢いコロナ撲滅頼みます

食べ物で長寿が極まる生きる道

新玉のあけほの凜と竹まり

新年を寿ぐ朝焼けの富岳

粉雪も土手の水仙雙鏢と

虎の子は懐深く隠してる

封印したトラトラトラにある哀史

五黄の虎目指す阪神日本一

外で猫家では虎の家内です

虎にまた今年こそはと聞かされる

朝ばらけ霜踏む吾子のスニーカー

おわすれでしたかと明日が立っている

虎の皮敷いて成金高笑い

グーグルがすぐに返事し会話取る

なけなしの虎の子孫の手に踊る

春はあけほの洋々として恙無し

試着した時に似合って見えたのに

新春の夜明けを阻むオミクロン

雪代

徳利

楓楽

廣子

舞夢

善之

大子

満作

ふりこ

桃花

富子

和夫

江里子

恭昌

志華子

義

蕉子

敬子

理恵

昭

弘美

行久

翠洋会(大阪) 原田すみ子報

マスク越しアクリル越しの話し合い 定夫  
古傷が広がってゆく寒の入り 弘子  
ほんとは淋しがりやの昼の月 希久子  
堪忍袋時々換気しています 眞澄  
自分史のあけぼのとなる年明け げんえい  
口喧嘩しつつも好物を作り すみ子

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

アベスガの改憲コピーいりません 一歩  
コピーしたおふだに掛ける願い事 義泰  
感動の言葉心にコピーする 常男  
下心いっぱい入れて茶封筒 はこべ  
心うつひと言だった御蔭様 ダン吉  
柏手を打てば心が透き徹る ひろ子  
心情を察し言葉を控えてる 隆雄  
念を押されて動揺走る 香代  
その話興味ないけど相槌を 和美  
新聞紙にくるんで真心を送る 航太郎  
空は晴れなのに心に雨が降る 珠子  
思いやる心に人の温さ見る 進彦  
老婆心小さく出して愛される ふさふ  
心ならず何度頭を下げたやら 保州  
心の洞に寂聴さんの法話沁む みつ江

日ハムの動揺残る水面下  
動揺をせぬよう補聴器を外す  
町内にコロナ患者がでたらしい  
動揺を隠すに恰好のマスク  
穏やかな老後迎えるはずでした  
ご飯よと呼んだら米のままでった  
動揺を見られたくない自尊心  
まだ人に恋する心あったのか  
不登校孫の心の闇深い  
来客に夫婦喧嘩は小休止  
黒塗りのコピーに本音透けている  
長命の遺伝ひとまず父の年  
正月だ矛を収めて握手する  
口喧嘩ひとまず堪えて五秒待ち  
日なたほこ白寿の二人生き写し  
後継者決まり安心した論吉  
嫌な事なるべく後に廻す癖  
微笑みと微笑み心ぼっかぼか  
揺れ動く世相の風に乗り遅れ  
倍数が増えるオミクロンの怖さ

西宮北口川柳会(大阪) 緒方美津子報

初詣心を洗う雅楽の音

靖夫

恵子 予定キツチリ元気が踊るカレンダー  
敏治 検査後の結果聞くまで落ち着かず  
万彩 十八歳あらあら値段みな大人  
玄也 決め手なく打つ手も寒く第六波  
理恵 寒いなあまた後手後手になりそうだ  
眞澄 フラダンスその腰付に惚れ直す  
扶美代 帰省した息子の苦勞聞いて除夜  
恭子 寒い朝箱根駆け抜く若い風  
康信 映画でも貧乏人は殺される  
いさお 汚れ役果し男になってゆく  
憲彦 呑気者あらあら火事とお茶を飲み  
俊雄 寒鯿は煮付けしゃぶしゃぶ寿司もよし  
三成 寒空に大風ひとつお正月  
勝久 日本酒党集めた猪口は百個越え  
恭子 キューポラの小百合に歓喜した映画  
万彩 古の和の伝統を巫女が舞う  
タカ子 志村喬「生きる」が僕の原点だ  
昌代 コロナ禍も寒さも忍び来た句会  
彦弘 おむつ取りやあらあらビュッと顔にくる  
信子 メールより恋しさつのる置き手紙  
鳥唄が出ると手足が踊り出す  
チヨイ役で必ず出てるヒチコック  
ビーチバレーあらあら跳るへソピマス

野鶴

風揚も羽根つきも見ぬお正月  
あらあらが増えてきました忘れもの  
美津子

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兔報

金メダルドラマがあつて光り出す 純子  
運まきながらドラマに仕立てたい余生 則彦  
断捨離ができぬ未練を解き放つ 契子  
夫婦ゲンカいつも僕から和解案 宏造  
今はもうコロナ解放祈るのみ 直子  
脱ぎ捨ててどんぶらこんと風呂に入る 守啓  
三十年使っていますフライパン 勝弘  
仏壇の母へ手作りチョコレート 春代  
名画館シニアの集う原節子 正子  
芋の子を洗う昭和の風呂屋さん 奈津子  
鍋いっぱいポップコーンの花が咲く 順子  
土鍋という強い味方の冬の夜 黒兔  
鍋だつて蓋が嫌いな時がある 堅坊  
密みつ密PCR早くして 一弥

長柳会(大阪) 大浦 福子報

本番でトチリ慌てたプロポーズ 福子  
あの世まで抱き続ける欲の皮 靖博  
ほどほどに幸をください隔てなく 千代  
言葉無くハグで伝わる友と友 由夏

汗と涙ぶつ飛ばして居る歓喜の輪  
年の豆一つの重み知る輪  
見栄を切るそして十八番の決め台詞  
捨て台詞使いそびれて腹の中  
好奇心生きる力を包んでる  
引きつった笑みで悔しさラッピング  
チューリップ蕾に春を包み待つ  
沙羅ちゃんを包むスーツの明と暗  
はじらいを包み隠していた昔  
捨て台詞拾い集めて元の仲  
虐待ニュース読まずに閉じる新聞紙  
惚れたのはばあばと爺のとほけ顔  
恋なんかしないときめて今の妻  
路のトウ苦み楽しむ春近し  
嬉しさが隠せず笑みが湧き上がる  
入園式靴も帽子も跳ねている  
匂い立つ焼芋包む新聞紙  
派出るオリンピックで感動し  
スマートフォン袖の下からカンニング

隆彦  
澄子  
純風  
克己  
ヒロ  
淳司  
幸子  
孝代  
和子  
隆明  
光弘  
直樹  
正博  
邦夫  
正美  
ふみ  
登美子  
由子  
おくみ  
隆彦  
澄子  
純風  
克己  
ヒロ  
淳司  
幸子  
孝代  
和子  
隆明  
光弘  
直樹  
正博  
邦夫  
正美  
ふみ  
登美子  
由子  
おくみ

川柳藤井寺(大阪) 鈴木いさお報

未生流師範ですのとロボが言う  
誤作動もするロボットの反抗期  
ロボットになりたくはないまだヒト科

ロボットが反撃の日を練っている  
ロボットだから従順だとは限らない  
ロボットに銃を持たせてはならぬ  
子も孫も妻の優しさ継いでいる  
青雫みかん一つまわりにうつつ  
6チャンネル玉川さんの言うとおりに  
コロナ死の友の写真を出し悼む  
すぐ傍にいるかも知れぬ感染者  
感染で老々介護つらくなる  
ロボットの進化失業者を増やす  
ロボットに職奪われる日も間近  
ロボットがかわいい声で機嫌とる  
注射嫌い進んで受ける三回目  
妻のロボットになりきり日々平和

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報

風評に動揺は無し辻地蔵  
風評が時には人を殺しちゃう  
着膨れたうわさ話が店を出る  
迷惑な噂流れてまだ独り  
風評など意にも介さずビッグボス  
風評へハチの一刺し返しとく  
モットーも哲学もない風見鶏  
創設のモットー額に社長室

ダン吉  
かずお  
シマ子  
久仁雄  
俣子  
勝弘  
一步  
いさお  
瑠美子  
扶美代  
ちづる  
大子  
喜代子  
みつこ  
比呂志  
佐知  
寿美子  
志津子  
加代  
敏子  
正治  
直子

モットーをかけた過ぎたか輪が歪む (長) 敏子

直線を書き足し男曲げぬ道 和 大

何事もしつかり噛んで消化する 黒 兎

理想論外し指針に主義主張 (川) 信 子

難しいモットーいらぬ花の下 瑠 美 子

誠実をモットーにして弾む毬 ゆうこ

ラブライフ・リブ3し忘れず句を作る 亜 成

ホラーです入歯が並ぶ旅の夜 里 子

入歯のお陰祖母は達者で畑仕事 シ マ 子

認語の国の卑劣に歯斬りす (河) 正

インプラント五本も入れて逝きはった 灯 子

コロナ禍の街で鳴いてるかんこ鳥 朝 子

覗き込み白い歯みせるお年玉 和 美

なくなつて分かったその歯あつた意味 文 吉

歯が全部抜けてもお酒なら飲める い さ お

乳歯生え家族みんなの目が覗く 哲 夫

年老いて三度目ほしい生え替わり 龍 せん

デイベートへ並ぶものなき乱抗歯 紅 絵

聞く力流す力に変えました 蒼 水

ミサイルに生傷絶えぬ日本海 進

親ガチャがはずれてヤングケアラーに 美 春 日

リモートでときれとぎれの授業聞く 花

うまい棒もついに値上げか寒の餅 知 恵

晴天を衝けば雨漏りする日本 千 代

通天閣真つ赤に染まり不気味なり 克 己

地球より重き命が日々軽く 古池 蛙

風評拡散SNSが凶器にも 福 貴 子

川柳塔なら 大久保眞澄報

倒れかけ人気たつぷりピサの塔 堅 坊

薩摩芋皮まで食べる人気ぶり 羅 天

ちよい悪の情報通が人気者 行 久

コロナ禍にコメンテーター風が向く 美 美 子

ばらまきで人気取るしかない無策 俊 雄

喝采のライトが消えて一人ぼち 比 呂 志

人気ある女優はみんな知らん顔 げんえい

人気者でした論吉が尽きるまで 雅 美

寂聴のうまい法話に耳が寄る よう子

勝つて良し負けても良しのトラ人気 すみれ

大根が引つ張りだこのおでん鍋 盛 隆

人気出て昔の埃舞い上がる 敬 子

AIの鋭い早さ正確さ 一 歩

舌鋒は鋭いけれど支持がない もと子

鋭い指摘検討すると躲しとく かずお

絶叫が耳を鋭く切る訝 弘 子

妻よりも鋭い孫の批評眼 則 彦

質問の中に意外とある温み 丹 吉

世の中の理不尽あばくコラム欄 和 郎

微笑んで鋭い敵意包み込む 史 郎

包丁を研いでトマトで試し切り 美智代

鋭角に問い詰めてくる妻の膝 満 作

稜線の鋭さと地を分ける 薫

切っ先に触れると怪我をする言葉 亜 成

錆びてなお尖つたままの釘でいる 俊 八

覚めやらぬ趣味に没頭よもすがら 淳 子

迷いから覚めた足どり軽くなる 大 子

麻酔覚め生きておつたぞこの痛さ 昌 代

麻酔から覚めて現世に舞い戻る い さ お

目覚めるたびあなたが傍にいる安堵 氷 筆

押し引くことに目覚めた人間味 寿 之

麻酔から覚めて家族の顔が寄る ひろ子

現実が目覚めるまでのまわり道 柁 子

麻酔から覚めて命を確かめる (鳥) 美智子

ラフシーン覚めた眼で見る五歳 恭 昌

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

風を読み社長何度もギアチェンジ 信 子

「終束」と書ける日待つ太い筆 寿 子

いい人だ他人よろこぶ事に汗 一 歩

雑魚集い上司肴に屋台酒 仁

幸せはわずかばかりの運の良さ 和 織

社長です取締役みな家族 彰 一

卒論はマルクスでした今社長

今はもう破る人なし障子貼る

たびだちの島へ一札して白紙

雨の日にわざわざ白紙投票に

白紙にはできぬ私の銀の道

腹案を隠し白紙と言っておく

森林がいのち削った白い紙

ゆっくりと白紙のままて人を見る

横浜はカジノ白紙にしましたよ

留守番の夜を喜びひとり酌む

喜ぶ事とんとごぶさたしています

ちよつとしたことで喜ぶ良い人だ

喜びの輪が展がれば世は平和

喜びはクレッシェンドの拍手から

助け合う心喜び分かち合う

お正月だけヨの酒がまだ続く

本心で喋ると酒がうれしがる

酒飲むと肥えるし呑まぬと淋しい

コロナ後を見据え花見の宿探す

人生の冬を迎えて一人酒

千人の知人以上の無二の友

こころ晴ればれ元気をもらう青い天

酔うように漂うように句意を練る

幸せなことだけ書いて初日記

弘一

千賀

欣之

かすみ

あかり

かずお

星雨

ルイ子

勝弘

玲子

銀杏

さち子

高志

武人

朝子

博泉

郁夫

亜成

博

一文

高鷲

賢子

弘委智

弘子

新年会白紙に戻す回覧板

行く先は白紙まだまだ努力する

逝く時は神へ白紙の委任状

硯海の墨におぼれている白紙

達成の歓喜が見える九合目

六甲川柳会(兵庫) 梶谷 和郎報

爺ちゃんがのど飴舐めてカルタ取り

エヘンひとつ車中の視線浴びている

喉飴の一つが美声軽く産む

あーあーあ今日の調子をチェックする

言えなかつたこと多かりし喉の奥

喉元を過ぎて忘れる恩返し

良い味も喉元過ぎるまでのこと

大好きな餅をこわがる喉となり

一度だけ聞いた親父の渋い喉

ワイシャツのルーシユの跡が誤解生む

丸顔で団子鼻ならお人好し

ペラペラと喋らんようにしています

苜屋の人みんなセレブと思ひ込む

誤解してた父の気持ちの分かる歳

名物は美味しい物という誤解

飲めそうな顔してはると誘われる

ハイハイと軽い返事で重い腰

麗

堅坊

祥昭

壽峰

常男

崇史

美穂

公輔

ひとみ

弘

恭子

青ひろし

美津子

洋次郎

正美

正和

勝弘

隆浩

和宏

千賀子

哲男

道子

のらりくらりはくらす話術浮いている

軽い嘘重ねるうちに抜け出せず

ここで泣けば軽い女と見なされる

値を知らず軽く約束した小指

長患い詫びる母の軽い骨

15kg剥いだ軽さよ退院日

約束をホゴにして返す友悲し

恩返し世にも親にも僅かでも

見返りなど求めぬ母の深い愛

三回目済めばトンネル抜けるかな

まともな世に戻れと祈り春を待つ

ミス続く癒えないままの不発弾

これという欲しいものない不仕合せ

引き潮でしみじみ人の情け知る

背伸びする分だけ重くなる気持

何気ない今が一番大事かも

喉元を過ぎるコロナへもうええは

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

朝食の手間を省いてモーニング

吊り橋はひやりとさせる絶景だ

喉元に言えぬ後悔引つ掛かる

タブレットペーパーレスで効率化

急ブレーキ恋猫二匹飛び出した

正彦

盛夫

利恵子

狸月

次郎

真桜子

弘華

廣光

利子

美恵子

博

克美

武彦

和郎

光久

義明

晴子

多美子

時子

健二

真理子



しがらみも省けばちよつと肌寒い  
 清貧に自然と馴染むわが老後  
 庭木から刈込鉢持ち落下  
 北京五輪天安門へ続く道  
 前略と後略それに中味なし  
 こりもせず今日も笑顔の衣替え  
 コロナ禍でだんだん似合うマスク顔  
 世界中ひやり見詰めるウクライナ  
 ぼたん鍋酒は丹波の地酒よし  
 ドア・ノブが殊更冷えてきよう大寒  
 信号が変わりかけても渡る人  
 乱気流に下肝冷やした空の旅  
 自転車の暴走族が怖いです  
 AIに聡太の頭脳誰入れる  
 淡い夢結果出るまで僕のもの  
 子をおんぶママチャリ信号無視をする  
 最初から除外されている節がある  
 待ち人の気配感じる二度三度  
 山彦に春の気配のリズムあり  
 待ち人がいる時は皆若く見え  
 言い勝つた後のひやりとした空気  
 青空のまんなかについて落着かず  
 平和呆けさせぬマイルオミクロン  
 どうでもいいことを考えてしまう

英三 武彦 義明 憲央 敏昭 公輔 野鶴 堅坊 哲男 英旺 忠子 初正彦 福正彦 一歩 満作 見清 黒兎 則彦 千賀子 弘委智 洋志 美津子

### 【電子化冊子ご案内】

川柳塔社の「塔誌電子化事業」では、発刊後2年経過した塔誌及び先輩諸兄の句集等を電子化。ホームページにてどなたにも無料公開しています。

このたび、同人の皆様句集並びに同人主催の合同句集等の電子化を企画致しました。ページ数や判型に関わらず無料ですので、ご希望の方は「電子化希望」と明記して川柳塔社事務局へお届けください。

但し、電子化作業にて綴じ込み部を裁断しますので冊子は返還できません。復元は別途見積もりとなりますので、ご希望の方はその旨お申し出ください。

また、その句集の発行元が川柳塔社以外の場合は、それぞれの出版社に対してご自身で電子化の許諾を得てください。

なお、応募された句集の電子化実施時期並びにホームページへの掲載時期につきましては塔社に一任くださいますようお願い申し上げます。

川 柳 塔 社

私以外みんな逆走して迫る  
 仏壇の花を誉めてる亡母が居る  
 以下省略に大切な人が居る

眞澄 眞澄 子 垂成

知らぬ間に俺を故人にした名簿  
 正直に生きた証だ回道  
 バックミラー内緒話も知っている

北舟 武人 ひとみ

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 さかい	7日(木) 投句締切 大人・電話・汚れる 折句:か・ま・す	投句先 〒599-8122 堺市東区丈六77-4 斎藤さくら
川柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 回り道・病・古い・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	16日(土)14時締切 笑顔・香る・雲・こっそり	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ徒歩5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳 たちばな	16日(土) 13時45分締切 印象吟・歌(互選)・捨てる 自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔 みちのく	16日(土) 17時締切 家事一切・くねくね・式	会場未定 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	17日(日) 席題・一年生・白い・野党 自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川駅から徒歩15分 または京阪バス市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	17日(日) 14時締切 無邪気・つなぐ・席題共撰	藤井寺市生涯学習センター・しゅほホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
南大阪 川柳会	18日(月) 14時締切 若い・地藏・数字・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1116 高槻市白梅町5-15-1008 松岡 篤
豊中 もくせい 川柳会	18日(月) 13時50分締切 おやつ・叱る・緩い・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	19日(火) 13時30分締切 注目・寂しい・ブランド 使う・自由吟	キッピーモール 6F (JR三田駅前) 投句先 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳塔 すみよし	23日(土) 14時締切 端・削る・チャンス	住吉区役所内 住吉公民館 2F 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山 三幸川柳会	23日(水) 13時15分締切 祝う・育てる・旅	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民会 川柳会	24日(日) 14時締切 復活・探る・そわそわ・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	24日(日) 13時～ 自由吟・リード・回転・走る	県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町2 1 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

★上記は年初の予定。諸般の事情のため、詳細は各柳社にお問い合わせください。

## 4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	2日(土)14時締切 軽い・くれぐれも・呑気・自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	2日(土) 黄・すんなり	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0066 富田林市錦織北1-14-6 中村 恵
倉吉 川柳会	2日(土)14時締切 信・後追い・くつきり・席題一題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 塔え社 まっ 吟	2日(土)13時30分締切 河・魔法・消す・そこそこ	投句先 〒690-0034 松江市古志原7-19-19 中筋弘充 会場 雑貨公民館
川柳 塔 な ら	7日(木)14時15分締切 制服・旨い・出会う・席題	奈良市中部公民館4階 投句先 〒636-0202 奈良県磯城郡川西町結崎421-64 長谷川崇明
おりひめ☆ ひこぼし 川柳会	7日(木)必着 翔ぶ・ソヨソヨ・翠	投句先 〒573-0095 枚方市翠香園町2-7 【おりひめ☆ひこぼし川柳会】 藤田武人 TEL・FAX 072-395-5453
あかつき 川柳会	8日(金)14時締切 帳尻・ルーキー・唱・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳大阪	9日(土)14時開場 釣り・晴れ・歓迎	投句先: 〒534-0021 大阪市都島区都島本通り4-11-6 山崎珠生
六甲 川柳会	9日(土)14時締切 コピー・それぞれ・貸す 自由吟	六甲道勤労市民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン6甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳 塔 打 吹	9日(土)13時30分締切 胸・切れる・はらはら・席題	倉吉市上灘町9 上灘コミュニティーセンター 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	10日(日)14時締切 新米・もてなす・祝う・雑詠	八尾市安中町3-5-1 渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳 塔 わかやま 吟 社	10日(日)14時10分締切 兼題=素材・紫・ゆとり 課題吟=桜	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川柳会	11日(月)14時締切 席題・コント・くすぐる さては・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
ほたる 川柳 同好会	12日(火)13時30分締切 旅・引く・こっそり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

# 柳界展望

ねぶた絵の中さモツケ 行目、若王子↓若王寺。  
だ父がいる

▽ご芳志お礼△

▽訂正してお詫び△ ○匿名の方より金一封拝

○1月号 P 87上段25行 受しました。

目、古今芭蕉子↓古今堂 ○古今堂蕉子様より金一封拝受いたしました。

★「第66回衣笠川柳界誌上大会「薬」。参加者281名。同人成績。

天位 平井美智子

ジョークでは済まぬ地球の摩擦音

令和3年度「薬」年間賞 淡い恋。P 43下段17行目、去 享年89。

令和3年度「薬」年間賞

笹重 耕三 P 73中段9行目、「只管」 大阪府 滝井恵美子

★「令和3年度・奈良新聞柳壇受賞」。

↓「只管」。P 100上段6行 紹介者 平井美智子  
目、山田泰正↓山田恭正。 大阪市 秋田 仁

佳吟賞 宇賀 史郎

おむすびは母の思いに似た丸さ

▽各地句会△

○「令和3年度川柳塔みちのく大賞」作品。

高瀬 霜石

## ひとこと募集

一行18字 25行まで

採否は編集部に一任の事

## 第32回 時の川柳交歓川柳大会

日時 5月1日(日) 開場10時30分  
会場 兵庫県中央労働センター

TEL 078-341-2271  
2階大ホール

会費 2000円(記念品・発表誌呈)  
神戸市中央区下山手通6-3-28

出句締切 12時  
※昼食は各自でお済ませください

兼題 各題2句 席題なし 欠席投句拝

「竹」 くんじろう 選

「坂」 阪本 高士 選

「高」 高橋土筆坊 選

「新しい」 新家 完司 選

「森」 森中恵美子 選

「赤い」 赤井 花城 選

「雑詠」 矢沢 和女 謝選

特別課題 1句 「小さい」 小山 紀乃 選

\*コロナ禍のため予定を変更する場合があります。

問合せ先 矢沢 和女  
TEL 090-7340-5956  
主催 時の川柳社

## 2022 ふあうすと誌上川柳大会

2022ふあうすと川柳大会を誌上大会として実施することになりました  
全国の皆様のご投句をお待ちしております

### 宿題 (各題2句)

- 「明るい」 山口 早苗 選  
 「舞う」 富田 末男 選  
 「カード」 高木 勇三 選  
 「救う」 矢沢 和女 選  
 「季節」 田中 新一 選  
 「ふたたび」 小島 蘭幸 選  
 「雑詠」 赤井 花城 謝選  
 令和4年4月11日(月)必着

### 投句締切

1000円

### 投句用紙

(郵便小為替又は現金)(切手拝辞)  
 規程用紙(コピー可)または2.5cm  
 ×19cmの句箋に1句ずつ記入  
 氏名(雅号)は記入しないで左記  
 へ郵送お願いします

### 投句先

〒651-0011  
 神戸市中央区下山手通6-2-19  
 甲陽会館内  
 ふあうすと川柳社 誌上大会係  
 お問い合わせ先 TEL 078-791-1572  
 (樋口祐子)

## 井笠川柳会誌上大会

### 「薬」ひこばえ

### 課題と選者 (各題2句)

- 「声」 高橋土筆坊 選  
 安部 美葉 選  
 小島 蘭幸 選  
 濱邊稲佐岳 選  
 長島 敏子 選  
 「針」 新家 完司 選

### 応募要領

便箋または所定の用紙に各題  
 2句(計4句)を列記し郵便  
 番号・住所・氏名・電話番号・  
 所属柳社を明記し投句料と共  
 にご送付ください。

### 投句料

1000円

### 締切

(定額小為替または現金書留)  
 4月30日(土) 消印有効

### 投句先

〒714-0081  
 岡山県笠岡市笠岡22289  
 井笠川柳会  
 TEL・FAX 0865-6216200  
 各課題毎に、天位獲得者3名  
 のうちから1名に句碑を贈呈  
 します。  
 主催 井笠川柳会

## 姫路 川柳水流会

### 第18回誌上川柳大会

### 課題と選者 (各題2句)

- 「素足」 黒田るみ子 選  
 「触れる」 吉川美佐子 選  
 「吠える」 三宅 保州 選  
 「裏」 大家 風太 選  
 「戻る」 古谷龍太郎 選  
 「旗」 新家 完司 選  
 「雑詠」 赤井 花城 選

### 投句要領

所定用紙または原稿用紙・便  
 箋1枚に各題2句を連記。〒:  
 住所・氏名・電話番号・所属  
 結社を明記。

### 投句料

1000円

### 投句締切

(切手不可・定額小為替等)  
 4月30日(土) 当日消印有効

### 送付先

〒670-0884  
 姫路市城北本町9-15  
 濱邊 淳 宛  
 主催 姫路 川柳水流会

# 編集後記

★争いはない地球儀の海  
の青 薫風

★2月25日朝、いつものように開いたパソコンのヤフーニュースに凍りついた。「灯火管制は命を救う 空襲備え」の見出しが躍る。「侵攻は止ま

ず不安な一夜 ウクライナの首都キエフにロシアが侵攻」と記事は続く。

★前夜遅くに私は「日本のいちばん長い日」(半藤一利著・文春文庫)を

読み終えたばかりであった。「降伏か、本土決戦か」昭和20年8月14日から15日までを克明に活写した息詰まるルポルター

ジュ。生々しい戦争の余韻冷めやらぬ僅か数時間後のニュースである。我がことのように恐怖に震えた。

★小学生のころ「日本は島国、島国根性」と島国のマイナス面ばかりを教

わった気がする。しかし今、四方を海に囲まれた小さな島国だけれど、その有り難さを痛感する。

時々、ミサイルは飛来してくるけれども、目が覚めたら他国軍が枕元について、なんて恐怖を味わうことはない。信じたい。

★連日テレビ画面にリアルタイムで流れる戦争の惨状。涙を流しながら観ているしかない無力な私。若い人に言いたい。よく見て欲しい、これが戦

争の実態だ。一日も早く停戦合意し、ウクライナに平和を、そしてロシアの人々にも平穏な日常が戻ることを祈っている。

「ふる里は戦争放棄した日本」第4回高田寄生木賞を受賞した大久保眞澄さんの作品が重みを増す。

★アルゼンチンタンゴの第一人者、アストル・ピアソラは伝統のタンゴのリズムにロックやエレキ

ギターを取り入れ、それを非難されたときの言葉。「タンゴを変えなければ若者が見向きもなしな柳雑誌社ビル」「誓徳寺」など。戦後「御津八幡宮」など。戦後「生根神社」「光明」「二七会」、尼崎の「たちばな」ぐらいです。

## ひとこと

楽しかった1月6日

「2年ぶりの本社句会開催」  
自粛生活に飽きていて、そんなおり、晦日届いた川柳塔社の便り。その日から私のころころはワクワクムードと相成った。正月気分も上の空、1月6日が待ち遠しい。

こどもの頃の正月を待つように日々を数える。因みにこの日は私の誕生日でもある。さてさて、参加できるか、しないかは別にして、その日は、「また全没か」と頭を

抱える日でもある。当日よりもこの日を持つワクワク感が、一番楽しいと言えないかも知れない。「当日になれば不安なことばかり。私としては何年ぶりになることか、当日ぎりぎりに行き、ぎりぎりに出した席題「艶」一句のみ。

「今日の題みんなきれいで艶がある」抜けました。

久しぶりに行くところ、珍しそうに皆が私を見ているようで、怖かったです。でも楽しかった1月6日でありました。

(西村哲夫)

## 作品募集

6月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島 蘭 幸 選  
 水煙抄 (8句) 川上 大 輪 選  
 愛染帖 (2句) 新家 完 司 選  
 檸檬抄「鈍い」 (2句) 栗原 道 夫 共選  
 久保田 千代 選  
 インスピレーションナビ (2句) 大西 泰 世 選  
 「刻む」 福士 慕 情 選  
 「とことん」 西口 いわゑ 選  
 一路集 (2句) 「強情」 (3句) 高瀬 霜 石 担当  
 初歩教室 「強情」は7月号発表

7月号

檸檬抄「消える」  
 一路集「閉じる」「アレンジ」  
 初歩教室「ポケット」

## お知らせ

4月4日(月)開催予定の本社句会  
 は中止と決定しました。代わって誌上句会として開催致します。詳細は表紙裏をご覧ください。  
 オミクロン株の感染力は凄まじく、発症までの期間も短いようです。三密を避け、マスク、手洗い、消毒、換気の基本を守り、ご安全にお過ごしください。

本社5月号会  
 9日(月) 午後1時から  
 兼題「こっそり」「煙」「ハードル」「惜しい」「関心」

## 川柳塔柳箋

3冊 送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

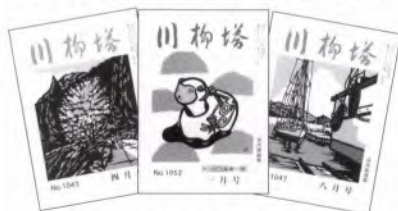
〒543-0052

大阪市天王寺区大道一丁目一七  
 花野ビル201号室  
 定価 八百円(送料100円)  
 半年分 五千円(送料共)  
 一年分 九千八百円(同)  
 二〇二二年(令和四年)四月一日発行

発行人 小島 和幸  
 編集人 木本 朱夏  
 印刷所 美研アート  
 発行所 川柳塔社  
 電話(06)67791349番  
 振替009814198479番

川柳・俳句・エッセイ・小説  
 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



## 美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10

TEL (06) 4800-3018

FAX (06) 4800-3028

Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp

ホームページ <https://www.bikenart.com>

# 箸がとまらん 極うま塩昆布

「直火仕込み製法」により炊き上げた濃厚な旨さ  
職人の技術で、超とろ火の火加減により、  
秘伝の煮汁にじっくり溶けだした旨味を、昆布に染み込ませています。



お友達LINE  
QRコード

舞昆のお友達に  
なって下さい。

舞昆のころはら

商品のお問い合わせはこちらまで（ご試食承ります）

フリーダイヤル 0120(11)5283

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし  
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

## 医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科  
緩和ケア（ホスピス）  
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>